空想科学忍法帖　泥覧試合編

８４ｇ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空想科学忍法帖　泥覧試合編

【Ｎコード】
Ｎ２１００Ｕ

【作者名】
８４ｇ

【あらすじ】
　時はもちろん世紀末。
経済破綻によって民営化した日本警察は、資金難から東京都より業務撤退。
勢力を増した極道『新鮮組』は、東京ドームを買い上げて江戸コロッセオと改称、剣士同士の殺し合いである泥覧試合を開催。
彼らの武器は火屯鉞刃（フォトンエッジ）、エネルギーで刃を構成する輝く必殺武器、断てぬものは光と影と心のみ。
宝蔵院が、示現流が、根来忍者が、人造理心流が、最先端科学と

秘伝の奥義で激突する大必殺。理不尽ジャパニーズＳＦ根性系バトル。

序文　作品紹介

「今回の泥覧試合は明日の零時からスタートす。今が二十三時四十三分すから、あと少しスね。
開始後、二十四時間逃げ回っていただきます、こちらの三名の皆さんから」

「根来が紀伊組頭領、一十一人居士がひとり、霞心居士（かしんこじ）」

「伊賀、隠衆（なばりしゅう）…ええっと…百地弾牙（ももちだんが）」

「甲賀、万衆（よろずしゅう）、中忍、猿飛重三（さるとびじゅうぞう）」

△▼△▼△▼

【西郷流星】
「でもね、山至示現流では、重い方が速いのよっ！」
「振り下ろすより早くあたしを殺せるかもしれないし、殺せないかもしれない」

【松崎仁】
「…それならば、戦うとするか」
「お前…本当にバカなのか？」

【雑賀凶華】
「ただ、あんたのことが嫌いってだけよ」
「これで私はファイヤー・キョウカッ！」

【伊藤幽鬼】
「理由があろうとなかろうと…人を傷つけていい道理がないでしょうッ！」
「あなたに…本当の幸せが訪れる日を祈っています」

【飯篠士輔】
「人生とは、カネや時間というポイントを消費し“不安”というクリーチャーから逃げ回るゲーム」
「明日は長くなりそうだ、人生で一番長い日に」

△▼△▼△▼

互いに手の内は知り尽くし、体力もすり減らし、既に負荷は限界を超え、肉体は万全とは程遠い状態にまで追い詰められている、だからこそ決着時。

@

火屯鉄刃ではなく、昔ながらの鉄を鍛造しただけの日本刀で、彼が振るう剣術は昔ながらの一刀流。

流星がかつて見たものよりも完成された夢想剣、そして切り落とし…恐るべし、根来十一人衆。

@

「…キレイ…」

お客さんの誰かがそう呟いた。

夢幻にして無限、さっきまでの大衆食堂からは変わってそこは鏡の国となり、あたしはその光景にサラダバーのお代わりも忘れて見惚れていた。

@

「舞い散る人命、咲き誇るは刃の華。甲賀忍軍、鎌乃百合（かまのゆり）」

「繰り出す拳は無限・無間の大煉獄。六道に堕ちてゆけ。甲賀忍軍、望月六花（もちづきりっか）」

「下る天罰、下す随行者。甲賀忍軍、筧十重（かけいとえ）」

「人を穿てば穴二つ、呪いを祝え。甲賀忍軍、穴山小弧（あなやまここ）」

「伊賀から甲賀へ冴え渡る才気煥発。甲賀忍軍、霧隠才那（きりがくれさや）」

「海の底には墓標あり。甲賀忍軍、三好大海（みよしひろみ）」

「海の底には情愛あり。甲賀忍軍、三好空海（みよしくうかい）」

「爆発々々、必殺々々、稲妻重力大落下。甲賀忍軍、海野陸（うみのりく）」

「この乙女、肌を合わせば謡うその歌、四面楚歌。甲賀忍軍、根津心（ねずこころ）」

『甲賀忍軍精鋭、真田獣幽士、ここに登場ッ！』

@

「コォオオオオ、ロォオオオオ、ナァアアアアッッ！」

「ここ、笑うところですよね…？」

「…笑えないですよ」

@

「これこそ、我らが悲願、地飛星計画のスタートなのですッ！」

地飛星たるナタ、完全なる人間の完成。

「不完全ゆえの人間とは思わないのか？」

「不可能に挑戦するのも人間とは思いませぬか？」

「正論だ。だからこそお前たちは俺に歯向かうというわけだ」

@

「止まれ、止まらなければ撃つぞ」

「建前はともかくさ、極道さんのお兄さん、あんたは撃ちたいの、撃ちたくないの？」

「撃ちたいに決まっている、実弾が発砲できる機会なんて私たちの稼業でも多くないからな」

「ナイスフィーリング。　あたしも実弾を発砲される機会なんて多くないのよ」

@

鍵を握るのは弾丸に弾丸を当てた後だ。その弾丸がまだ空中にある内に次弾を撃つこと。

こうすると、弾丸が浮かんでいる位置は、スペースインベーダーのトーチカのように互いの弾が通らない“安全地帯”となる。

浮遊する弾丸に新たな弾丸を掠めさせて自分に有利な位置に動かしつつ、相手を銃撃する。これを二丁拳銃の十六発を撃ち終わるまでの三秒ほどの間に行う。

弾丸によるチェス、空中の弾丸の動きも含めて刹那の間に考察し、相手の弾丸を受け止めつつ、相手に攻撃する。

経験とセンス、推理と本能、その応酬。

@

だが、驚愕したことだろう。躱したそのとき、目の前から獣市郎の巨体が消えたのだから。

「そ～らーを自由にっ飛ばせてやりたいのぉウっ♪」

全裸のジャグラーと化した獣市郎の連続コンボ。

止まらない、歩いたり呼吸するのと同じような要領で、技が繰り出され続け――。

@

「勉強の時間だぜ。

全てのウイルスはタンパク質から成り、そのタンパク質とはアミノ酸という酵素で構成されている…サプリメントなんかで取るヤツだ。

俺は生まれ着いて、一般人より多い種類のアミノ酸を作り出せる…特異体質だ」

誰かに聞いたものを繰り返しているような、取ってつけたような説明だった。

@

「毛髪すらも兵隊とする…そう、彼こそは史上最古のクローン戦士、斉天大聖なのです」

「面白いッ！」

杉谷全銃坊は、甲賀のエンブレムである卍の刻まれた重火器を引き抜いた。

「貴様が可算無限に増えていこうとも、私は非可算無限の彼方にまで殺戮を繰り返すのみよッ！」

@

それは獰猛なまでに大きく、地球上ではありえない存在だった。

しかし、宇宙の壮大で果てない歴史は、それを構成し、地球の静止軌道に押し運んでいた。

「あれが…日本政府の隠れ金山的天然プルトニウム彗星…梁山泊かっ」

序文　作品紹介（後書き）

新連載、空想科学忍法帖　泥覧試合編。
８月１日、深夜２時から２時間おきに７話まで公開。
８月２日からは毎日早朝５時更新、早起きして、学校や会社に行く前にチラっと読んでから一日の活力にしてくれよな！

第1話　愛宕橋と丸橋

【８４ｇ】

広場の中央にはふたりの男。
ひとりの細身の男は開放された天蓋の隙間からサングラス越しに空を見上げてタバコを吸って粋がっている。
もうひとりの大きな男はその姿を眺めながら皮も向いていないパイナップルを丸齧りしていた。
「蝙也ァ、お前の吸ってるの、何ミリじゃあ？」
「…十六ミリだ」
「タールじゃない、ポロニウムの方を聞いている」
今現在、肺を開けて洗浄すればなんとでもなるタールやニコチンを問題視するのは、汚れが落ちなくなるとぼやくクリーニング屋くらいのものだ。
それは二十一世紀よりも多く添加されだした。その名は放射性元素、ポロニウム。
昔から喫煙者を僅かずつ被曝させてきたが、他の毒素が強すぎて注目されていなかったが、他の毒素の解毒方法が確立されてからはポロニウムだけが注目され、取り除こうとする動きが強まり、完全除去に成功し、味の悪いタバコを続出させた。
むしろ、ポロニウムを人工添加するとタバコが引き立つという事実も浮上、いまやタバコは放射能と依存症を撒き散らしていた。
「…だから十六ミリだ。ポロニウムが、な」
その言葉に、細身の男はサングラスを投げ捨て血走った眼でのハミングを添えた。
放射能の影響か、無関係な持病か、それはわからない。
「長生き、できんぞ？」

「お前はしたいのか、獣市郎」
「いいや、全然」
なら聞くな、と細身男が付け加えたところで、時計を見ていた壮年男性の声がマイク越しに響き渡る。
〔それではご両人、名乗りの声明を〕
とても大きな声だったが、取り囲んだ町民たちの歓声がそれをかき消す。
このすり鉢状の闘技場の広さは東京ドームひとつ分、客席数も東京ドームひとつ分、熱狂も東京ドームひとつ分、それはそうだ、東京ドームなのだから。
「宝蔵院流槍術、丸橋　獣市郎。十四勝無敗一分け、三連勝中」
「我流、愛宕橋　蝙也、十一勝無敗三分け、三連勝中」
このふたりを端的に表すならば太と細、黒と白といった対比にしかならないような比喩がよく似合っていた。
黒く太い獣市郎は熊ほどの体格と体毛があり、担いだ槍は持ち主の身長の倍近い丈がある。
方や白く細い蝙也は蝙蝠柄の羽織りを纏い、蜘蛛の足のように細い指を太刀に絡めている。
対照的なふたりに共通するのは、その刀と槍の異質さだけ。
刃が備わっていないのだ、両者ともただ柄があるだけで続きがない。
だが、誰もそんなことに気にも留めず、司会がまたも声を張りあげる。
〔それでは皆様、三十秒後の推察承ります、獣市郎が勝つか、蝙也が勝つか、決着付かずの引き分けか…張った、張ったァ〕
町民たちは既に三択の富籤を買っている者が多く、席から離れる者は僅か。
ギャンブルの常。小銭を賭けて楽しむ町民も居れば、千両箱で人生ごと賭ける町民も居て、それぞれがふたつの眼でひとつの殺し合いを待つ。

「ぶち殺せぇー」
「蝙也ぁ、今日も稼がせてもらうぜーっ」
「宝蔵院流見せてやれぇっ」
「死ぬこたぁねぇ、引き分けろ」
口々に自分の都合でふたりの命を野次る老若男女の町民たちだが、そんなことは戦うふたりにはどうでもいい。このふたりも自分のためだけにここにいるのだから。
「蝙也よ、お前…タバコを吸う前…小さいころ、ひみつ道具、なに欲しかった？」
「…あ？」
「ひみつ道具だよ、ひみつ道具。ネコえもんなアレじゃ」
「それは遺言か、獣市郎」
「儂、タケコプター一択。他にも空を飛ぶひみつ道具はあるがのォ、やっぱりタケコプターじゃ」
「人の話、聞いてないだろう、お前」
そんな指摘に意を解さず、獣市郎は自前の穂先のない槍を振って講釈を続ける。
「この槍はのぅ、儂の“タケコプター”じゃ」
日本語としてガタガタだが、それより変なのが獣市郎がタケコプターと呼んだ槍。
穂先がないというのもひとつだが、輪を掛けて珍妙なのが荒縄でしっかりと結わえてある発動機、これではタケコプターというよりヘリコプターのエンジンだ。
「…よっぽどイカれてるようだな、獣市郎」
「なら教えてくれや。儂を斬って報酬を得ようとしている…蝙也、お前はマトモな人間なんだな？」
「学歴で云えば国立大卒、ＩＱで云えば百六十七、体調で云えば健常者」
「なんだ、儂と同じか」
獣市郎は何が面白かったのか、底抜けの陽気さで笑い出した。こ

のまま笑いすぎて戦わずして死ぬんじゃないか、そんな調子で。

〔受付終了、集計結果が出ています。一番人気は引き分け、二番人気は蝙也勝利、三番人気は獣市郎勝利…最大倍率は概算で五倍超となっております〕

勝負となれば盾代わりにされることも有り、審判の壮年男性は妙にコミカルな様子で走り去っていく。

〔それでは各自、十歩ずつ下がったところで、抜刀承認です〕

勝負は三十秒、引き分けもあるがファイトマネーは勝利の十分の一以下。

両者の戦績が無敗なのは人に命がひとつしかない以上当然だ。一敗でもした人間は墓の中にいなければならないのだ。

「い～ち」

「にぃ」

「さぁん」

一歩下がるごとに観客席が静かになっていく。万が一にも声を戦いへのカウントアップを聞き逃さないために。そして。

『じゅう』

蝙也の姿が消えた。観客たちの目には影も形も映っていないが、獣市郎は姿を逃しても影を逃さなかった。

「上かっ」

ライトに照らされ、跳び上がった蝙也の蹴りが降り注ぐ。

それは雨だ。蹴撃のスコールだ。その鋭さに圧倒され、獣市郎は集中豪雨の中でも差す傘を持ってはいない。

自分の血で獣市郎はズブ濡れだったが、雨が止むのを待つわけにはいかない。晴れとは待つものではない、笑って呼び込むものだと獣市朗は知っている。

蹴の雨はそうやって止めた。

「獣市郎…それは…さすがに…っ」

蝙也の苦悶に獣市郎が言い返すことはない。言い返す代わりとばかりにその大きな口に頬張った蝙也の足首を砕きに入る。

噛み付いている。ガッツリ行っている。攻撃は最大の防御というが、コロッセオ闘士は攻撃以外では防御しない。

「判った、判ったから。仕切り直しだ。蹴りは止めるっ、だから離せ！」

獣市郎は答えない、ただ顎の力を強めていく。

「おい、なんとか云えっ、会話しろッ、話せっ、口を離せ、口で話せ、はなせええええっ」

「…ふ」

獣市郎の唇から粘ついた赤い汁が垂れた。蝙也の踵骨（しょうこつ）が割れた。絶叫する代わりとばかりに蝙也は獣市郎の顔面を踏みつけ、脱出してみせた、だが。

〔これは痛々しいっ、蝙也の右足から夥しい出血があるっ。蝙也は脱出するために自ら踵を捨てた模様ッ！〕

踵に…というより、踵が“有った”場所にくっきりと残る獣市郎の歯型。一生消えない傷をまたひとつ増やしながらも蝙也は爪先立ちで不敵に笑う。

「ダメージは五分といった所か、お前も私の蹴りが効いていないわけではないだろう？」

「効いたがの、お前のカカトで腹が満ちたからのう、元気一杯・腹一杯」

〔残り十五秒ッ〕

「さて、次は儂が飛ぶとするかのゥ。儂のタケコプターで！」

カウントダウンに獣市郎は例の“大槍タケコプター”を振るい、“刃”を具象させる。

炎と同じ蒼で灯ったそれは“えれきてる”の応用、荷電光子の収束によって形成されたリーズナブルな武士の魂。

ビームサーベル、ライトセーバー、光の剣、シャイニングソード、レーザーブレード、用いる流派によってその名は異なるが、商標としてはこの装備を火屯鉄刃（ふぉとんえっじ）＝Ｐｈｏｔｏｎ　Ｅｄｇと呼ぶ。

「…ああ、“抜刀”するとタケコプターっぽいな、それ」

「格好良いじゃろ？」

火屯鉞刃の槍というのも珍しくもない、それこそ槍術の名門である宝蔵院では標準的であるが、獣市郎の槍は珍奇・神妙。

光子発生装置（フォトンジェネレーター）で発生した二本の光刃を前ではなく横に向けている丁字型の槍。

「うォウ、飛ぶぞのび太ぁっ」

プロペラは実際のそれと同じように回転し、周囲の空気をプラズマジェットのように放出して…実物のプロペラとは全く異なる原理で獣市郎の巨体を浮かせるだけの揚力を得ていた。

「飛んでどうするっ」

「飛ばんでどうするっ」

ただ飛んだだけ。江戸コロッセオでは初年度から天狗を名乗る剣士が、空中殺法を実行してからちょくちょく登場する技であるため、大して珍しい芸ではない。

だが、凡庸な芸でも夜空の月を打ち落とせないのと同じで、蝙也には今の獣市郎に抗う手段はない。

傷ついた足を引きずって蝙也は江戸コロッセオの外周、野球をしていた頃なら左翼と呼ばれた部分まで走って逃げる、それしかできない。

そこに落ちてくるのは流れ星でもレフトフライでもなく獣市郎。

そのプロペラは歯車的にフェンスを巻き込み、シュレッダーのようにくずとして撒き散らす。

客の眼前まで刃が迫ってはいるが、フェンスと観客席を分かつ境界に張られているのはこれまた火屯鉞刃の幕、往来のＳＦではバリアとでもいうべき技術。

光の刃はいかなる金属をも切り裂くが、同じ火屯鉞刃ならば受け止められる。光を止められるのは光のみ。

「うふぇぁぉっ！」

かろうじて身を捻って落下してくるプロペラをやりすごした蝙也だが、彼がいた地面はハンドミキサーが通った後の生クリーム、獰

猛なまでに空気が混じって捻れている。
「土だけ混ぜさせるな、赤が好きなんじゃよ、赤が」
獣市郎は槍を構え直し、その切っ先…と呼んでいい形状ではないかもしれないが、とにかく槍の穂先を蝙也に向けた。
上に向ければ空を飛び、横に向ければ主を引きずって地を走り轍(わだち)を刻んで敵へと向かう。これが獣市郎の槍、巻き込まれればハンバーグ用人肉の出来上がりだ。
「早いっ」
「そりゃあそうじゃ、タケコプターじゃもんなァっ！」
普段ならいざしらず、踵を引きちぎられた足で逃げられるわけもなく、蝙也はここにきて火屯鉞刃を発生させた。
コンパクトな取っ手に直線の刃を発生させるだけ。獣市郎に比べれば驚きも何もない“ただの刀”だ。
刀を青眼に構え、蝙也はタケコプターと獣市郎を待ち構える。
「今更、刀一本で戦える気かっ」
「刀一本でなんとかするのが剣士だろう」
互いの凶器の激突時、衝撃によって蝙也の刀が弾き飛ばされた。
しかし蝙也自身は飛ばされていない、彼自身はむしろ前進していた。刃が交わる一瞬、刀を噛ませて高速回転するタケコプターの回転に便乗してその内側、獣市郎の懐へと飛び込んでいる。
刃自体は火屯鉞刃でも、発動機そのものは普通のエンジン、ならばその回転速度自体は光速どころか音速にすら達していない。

歓声、どよめき、怒号。観客席の大合唱、そして。

「やるじゃないか、さすが国立大卒」
「右に同じじゃのう」
タケコプターの内側で、ふたりの男は予備の武器として持っていた火屯鉞刃の匕首で鍔迫り合いをしながら三十秒の時間切れのコールを聞いた。

獣市郎の武器を持っていない方の腕は蝙也の細い首をしっかりと握り、蝙也の同じく開いている長い指は獣市郎の眼球に届いている。あと一秒でも有れば、獣市郎は頚椎を捻じ切り、蝙也は眼球から脳髄にまで穴を開け、互いに対戦相手を抹殺することができただろう。

「四連勝できんかったのぉ」

「左に同じだ」

観客席からも様々な声が飛び交う。良い勝負を見せてもらったというエールから、どちらかの死に賭けていて大損したという罵声まで。

勝っても負けても、生きても死んでも、その違いはカネだけだ。

ＮＥＸＴ　ＳＡＭＵＲＡＩ　西郷流星

第2話　西郷流星（前）

【８４ｇ】

「店長さん、あの乱痴気騒ぎ、なんなの？」
「騒ぎ？　ああ江戸コロッセオの泥覧試合（でいらんじあい）ですかい？」
時間なのか、流行ってないだけか、午後三時を過ぎてこのラーメン屋には、カウンター席でチャーハンのピーマンを選り分けながら食っている女しか居ない。
彼女の風体も奇妙で、どう見ても小中に通う学生といった風だが、そんな人間がこんな時間にこんな店でこんなメニューを食べているだろうか？
それに荷物もまた奇妙、ツギハギや泥汚れだらけの登山用リュックサックはともかくとし、傍らのカウンター席に立てかけてある荷物にいたっては、それが何かすらわからない。
ブルーシートでグルグル巻きになっており、傾けて置いていなければ天井まで届きそうな、バカに長い何かだ。
店主も退屈を満喫し、自分用に丁寧に焼いたギョウザとチャーシューでビールを飲みながら雑談に付き合っている。
「それっきゃないでしょ、ね、説明してよ。なんてったってあたしのガイドブックではあそこは東京ドームって名前になってるからさ」
予想外だったのか、店主はギョウザを盛大に吹きだした。鼻からニラかネギの緑が覗いている。
「汚ないなァ」
「お嬢さん、かなり古いガイドじゃありませんか、それ。東京タワーは何本載ってます？」
「…東京タワーが何本もあるみたいな言い方だよね」
「ええ、量子通信用タワーとかで増設されて…何本だったけな、

なんか七本目と八本目作るとかいってたんですけど…結局中止したんでしたっけ？　お嬢さん」

今も昔も地球も火星でも、こういう頭の悪い質問をする人間はいるものだ。

「訊いてんのはタワーじゃなくてドーム、江戸コロッセオ。なんで斬り合いとかやってるの？　昼間から堂々と」

「それはもちろん、ギャンブルですよ。ヤクザの…ああ、これも説明が必要スか？　今の日本では赤字経営の政府よりもヤクザの新鮮組が顔をでかくして経営してんすよ」

世間体さえ考えなければ、人間同士の殺し合いほど儲かる商売はない。

競艇や競馬のようなものは設備維持だけで金が飛びすぎて黒字なんて神頼み、運営している方がギャンブラーでなくてはやっていられない。

だが、いつの世の中でも金に窮している人間というのはいるもので、それをふたり揃えて殺し合わせればいい。

給料は破格といえど一人分だけ、あとはせいぜい裏方のアルバイトくらいのもの。死体片付けの仕事も時給千三百円でまかり通るのだから、本当に安上がりだ。

「馬より金が掛からない馬の骨をふたり用意して、刀持たせて殺し合い、ってわけね」

「上手いねお嬢さん、座布団は出ないけどチャーハンお代わりします？　値引きとかはしませんけど」

少女がピーマン抜きはできるかと問い返せば、店主は手間が減るくらいだと応じて狭い調理場でベジタブルミックスを入れていないチャーハンを作り、少女に差し出した。

チャーハンにはピーマンどころか野菜が皆無、具はタマゴだけでさりげなくハムも入っていない。

これで同じ値段を請求するつもりか、少女も気付かないわけもないのにツッコミもしないが。

「にしても、よく食うねお嬢さん、なにか部活とかしてるの？」
「…あたし、二十代なんだけど」
またまた、と手を振る店主に彼女は小さな財布からカードのようなものを取り出し、店主に見せてやる。
大型宇宙バイクの運転免許証、地球では十八才から、火星では十六才から取得できる免許だが、名前は西郷流星、明記された生年月日から逆算すればどう考えても二十五才。
「あのさあ、店長さん？　普通間違えるかな、そういうこと？　確かに背は小さいし、胸だってないけどそれは火星の低重力のせいで…いや、同じ火星育ちの子たちより小さいけど…そりゃ…とにかく、背だけで年齢を判断しないでもらいたいんだけど」
「いや、だってお客さん、すごく童顔だし、態度も子供みたいだからさ…それなら、お客さん、何の仕事してる人なの？　学生さんじゃないんだよね？」
よくぞ聞いた、とばかりに流星は傍らに立てかけられた荷物に視線を飛ばしてから得意そうに答えた。
「人斬り」
「は？」
「だから人斬り、だって。用心棒とか傭兵とかやってるよ」
これも冗談だと思ったのか、それとも人斬り屋なんて珍しくもないのか、店主は変わらないそぶりだった。
残念なことに人斬りに免許なんてないし、証明する方法はないが。
「へえ、どんな火屯鉞刃使ってるの？　剣？　槍？　薙刀？」
「これだけど…こんなに大きくて、他になんだと思ってたわけ？」
先述したが、彼女の荷物はリュック以外ではこの刀しかない。巻き付けている泥で汚れたブルーシート、刃渡り七尺五寸…メートル法では二メートルちょっと。彼女の唯一の商売道具だ。
「いや、そんな大きさの刀もないと思うよ？　火屯鉞刃あるしさ。そんなに大きくても関税上がるだけだろ？」
「関税…？　ああ、それなら払えるないから密航してきちゃった

よ」

やはり冗談だと思ったらしく店主は目を平らにしたが、次の瞬間、ドアベルを鳴らして入ってきた団体客には目を丸くした。

そろそろ来る頃だと流星は予想はしていたが、期待としてはもう三十秒必要だった。そうすればチャーハンを全部胃袋に入れられた。

「オぅラァっ、一週間前にうちの税関を破ってくれた西郷とかいうボケがいるのはここかァッ！」

入ってくるだけで店が狭くなるような大人数、ほとんどのメンバーがノーネクタイでプレスされていない背広を着ている。

カタギにこんな人間は居ないし、かといって警察なら尚更ありえない、ならば答えはひとつだけ。

「…まあナイスタイミングってヤツなんだけどよ、おたくら警察の人？」

顔を見合わせ、団体さんはそれぞれに顔を見合わせ、図ったように大爆笑。

こいつら、スライムとかと同じで集団無意識とかで同調してるんじゃなかろうか。

「っふっは。ンなわけねーだろ。警察なんて採算取れなくて江戸から居なくなってんだよ。

だからよぉ、今江戸を取り仕切ってるのは俺たちに決まってんだろうが、なあ、オヤジィッ！」

ラーメン屋の店長は言葉もなく、ただうなずいて見せた。威を借りようとなんだろうと、脅えられるというのは他のリアクションとは別種の快感ともなるらしい。

「…で、あんたたち、誰？」

あたしの発言に何人かが懐から何かを取り出した。火屯鉞刃のドスだ。

どちらにしても柄だけ持ち運ぶんだから日本刀サイズの火屯鉞刃を持てば良いと思うのだが、それでもドスに拘るヤクザの皆さんのプライドには頭が下がる。

「バカにしやがって…っ、もうテメーは…」
「…あのさァ」
連中が喋っている間に食べ終わったチャーハン皿をカウンターに置き、流星は動いた。
誰からも気付かれないような、僅かな、それでいて確かな体重移動、即座にある方向へ飛び込むための。
「ケンカを売るならさァ、喋る前に切り掛かった方が速いわよ？」
言い残して流星はブルーシートの巻いてある塊に手を伸ばし、一足飛びに窓ガラスに飛び込んだ。
散るガラス、叫ぶ店主、唸る極道連中。
窓の外には、店内に入ってきたのと同じ服装の皆さんが勢揃いしていたが、どの組員さんも自分たちの出番があると思っていなかったらしく火屯鉞刃を構えていない
「ボサっとしてちゃダメ。あたしは火星から不法入国した極悪犯なんだからね？」
「あ…う…？」
「てめぇら！　ドスッ！　押さえ込め！」
司令塔の命令を受けてから火屯鉞刃を起動してももう遅い。並んでいる人間ほど倒しやすいものはドミノくらいしか存在しない。
流星は、ブルシートに包まれたままの獲物を握りこみ、思いっきり連中の足首のあたりで横薙ぎにする。
ブルーシートを取って刃を晒せば足首を斬り飛ばすくらいはできるはずだが、出さなくとも足を叩き砕くくらいはできる、それが流星の獲物の硬度と重量だった。
「ま、待て！」
待つと思っているからこういうことを云ってるんだろうが、極道に待てと云われて待った根性があるんだかないんだか分からないヤツって存在するんだろうか、日本の歴史上。
「テメぇ、速すぎだぞコラァッ！」
「ちょっと止まれアマァッ！」

「殺されろォー！　俊足クソ女ァー！」
褒めてるんだかなんなんだか、背後からオリジナリティのない罵声を流星は無視する…が、ひとりだけ気になる気配があった。
どんな人間かはわからない、強いかどうか性別も敵味方もわからない、だが気になる気配だ。その気配は背後ではなく真横、猛スピードで走る流星に併走していたのだから。
「話には聞いていたが本当に速いな、そんな刀を背負って」
気のせいではない。背後の三下とは比べ物にならない端正な顔面が流星の真横を走っている。流星と同い年か年下くらいの線が細く、冷たい眼をした美青年。
「――西郷流星、止まれ、止まらなければ撃つぞ」
「建前はともかくさ、極道さんのお兄さん、あんたは撃ちたいの、撃ちたくないの？」
「撃ちたいに決まっている、実弾が発砲できる機会なんて私たちの稼業でも多くないからな」
「ナイスフィーリング。　あたしも実弾を発砲される機会なんて多くないのよ」
流星と併走し、口元に笑いを浮かべつつ美形極道は、貴族みたいに手袋を投げ捨てた。その下のシルバーメタリックの拳には指先がなく代わりとして銃口が備わっている。
どうやら人工細胞人間（バイオボーグ）…いや、機械人間（サイボーグ）らしい。
「あたしは示現流の西郷流星（サイゴウリュセイ）、お兄さんは？」
「人造理心流（サイボーグしんりゅう）、沖田総治（オキタソウジ）。新鮮組の始末一番隊の隊ちょ」
流星にはここまでしか聞こえなかった。
続きは沖田の手先に備え付けのマシンガンの銃声で掻き消された。
聞き返そうにも弾丸を全身に受けて口が回らなくなっていた…撃たれた流星ではなく、いきなりバランスを崩した沖田の方が、だが。
「沖田の兄貴ィーッ！」
「また持病スかっ」
「労咳はサイボーグ化したときに治っているっ」

「ではなぜ倒れたのだ」
立てなくなった沖田は、足腰の差で取り残されて後方で騒ぎ立てているだけの部下たちと同じ顔をしていた。なぜ自分が倒れているかがわからない。
無傷であるはずの流星も立ち止まり、ブルーシートを剥ぎ始めた。
「山至示現流の…技とも呼べない宴会芸ね、ただ弾の通り道に刀を置いて、運が良ければ…っていうか、相手の運が悪ければ跳弾するだけだから」
種を明かされ、むしろ総治は表情を曇らせた。
「バカな…私の弾丸はウラン合金弾だぞ、それを…弾くなんて…！」
「地球のヘタった金属なら無理かもね、だけどあたしの…火星合金（マルスニウム）を配合した超々硬合金（オーバータングステンカーバイト）なら…できるのよね」
それは、ダイヤモンドがブラシにもならない理不尽な強度と水や風よりも軽やかに衝撃を受け流す理不尽極まる火の展性、大理不尽なその刀は火星の赤い砂で生まれた甲虫と同じ輝きを放つ、故にその名をアカムシ。
「大蛮奔（だいばんぼう）、あたしの愛刀、蛮一文字なわけよ、オッケー？」
「…ああ、わか…った」
全身に弾丸を受けたはずの沖田は返事をして見せた。これで沖田が生身なら根性かド根性か、気合といった言葉で説明しなくてはならない、だが彼はサイボーグ。
跳ね返った弾丸というのは弾道が真っ直ぐではないので着弾時にメチャクチャな銃創を作り、強い対人効果があるはずだが、沖田をよく見れば血が一滴も流れておらず、代わりに歯車が散らばっている。
全身サイボーグの剣士、必ず彼は傷を治せばまたも立ちはだかるだろう、その再戦を思えば流星の腕が鳴る。ついでに指を鳴らす。肩を鳴らす。腹が鳴る…満腹のはずの、腹が鳴った。
「…アレ…？」

腹は空いているわけがない、むしろ喰いすぎたくらいだ。
店構えは汚いし、店長が適当そうとはいえ、チャーハンを食い逃げしてきたばかりだ。
悪い予感と腹痛に苛まれ、流星の意識は痛みの中に没していった。

第3話　西郷流星（後）

【沖田総治】

私は清掃局に属さない掃除屋を自称している。
社会的に適応できない自身の無能を棚に上げ、社会の責任だと喚いて粋がる…そんなどうしようもない粗大ゴミを片付けるのが私の仕事だ。
そんな無能は、分解清掃しなければリサイクルできない型落ち電化製品とどう違うというのだ。
ここは物理的なゴミを敷き詰めて、その上に犯罪者（ゴミ）を押し詰めてい。東京都江頭区の人工島、第八夢の島。
我々新鮮組が、様々な事情から処分できないが野放しにできない人間を収容するために、東京都の恥ずべき豊富なゴミを集積して作られており、本土からは十キロも離れていない刑務所専用の人工島、鬼が鬼を管理する別名は鬼ヶ島。
鬼ヶ島に着き、急ぎ足で私は刑務所の管理棟へと急いだ。時間に余裕は有るがこの鬼ヶ島には仕事以外にすることがない。
「新鮮組の沖田だ、西郷流星の件で来た」
「伺っています、どーぞ」
喋っているのか欠伸なのか、寝ぼけるように受付官は私の提示した身分証を読まずに返し、入り口の扉を開けた。
ゴミと付き合っていてこうなったのか、それともゴミみたいな態度だからここの配属になったのか。
私にはこの受付官と同じ組織の構成員であることを密かに恥じていた。
塵ひとつない火屯鉞刃の柵で区切られた面会室までの真っ白の通路にも清掃が行き届いていたが、その清潔さとここがゴミの島であ

るという事実とのギャップが云い表せないむず痒さを生じさせていた。

先ほどの受付官よりはまだ目が覚めている看守に引き連れられて、その女は面会室に入ってきた。

「こんちは、総治さんっ」

「覚えていたか、西郷流星」

この不法滞在の食い逃げ犯、西郷流星と私が出会ったのはもう半月前。

私の部隊が到着するまで食べていたチャーハンで食中りを起こし、そのまま雁字搦めにし、病院送りとなった女だ。

「結構早く体治ったみたいだね、総治さん、具合はどう?」

「人造理心流のサイボーグ剣士を侮るな。あの程度のダメージならば三日で治る…お前のほうはどうだ。刑務所の中は慣れたか?」

「結構楽しいよ。よくわからない機械を組み立てたり、炊事場で丸一日料理したり。ゴハンの量以外は充実してる…これ、ここで作ったヤツね」

流星はどこから出したかオニギリを押し付けてきた。押し付けた小さな腕には真新しい火傷や裂傷が数多く刻まれ、そのどれもがここが鬼ヶ島であると私に実感させたが、当の西郷は金メダルを取ったばかりのアスリートのような笑顔だった。

囚人から荷物を受け私は許可されていないし、そもそもサイボーグの私は食事を取らないのだが…。

「…ありがとう」

「どういたしまして」

粗大ゴミの中には稀に新品以上に価値の高い資源ゴミが捨てられているときがある。

私の勘にすぎないが、この西郷流星という女も間違いなくそれで、探している人材の前提をクリアしていた。

「で、総治さん、傷も治ってるってことは…そういうことよね?」

「…ん」

臨戦態勢に入ったのか、獣がそうであるように西郷の毛は逆立った。
刀などは持っていないが、そんなことを理由にはしない。戦えるときに戦う、素手であろうと勝つ、そんな西郷の挑発は言葉にせずとも伝わってきた。
「あンときのケリを着けに来たって解釈でいいのようね、総治さん」
「それはない」
流星がズッコけた。
「…違うの？」
挑発した手前もあるのだろう、西郷は顔を背けてパイプ椅子に腰を下ろした。
戦い以外の経験がないのか、遊びに誘う言葉がわからない子どものようにモジモジして黙ってしまった。
「単刀直入に云う、一週間後に行われる“祭り”に参加してくれ」
「…はあ？」
「ＹＥＳと云えば、恩赦扱いで出所できるぞ、西郷流星。他にも刑務所の賃金とは比較にならない報酬があり、二十年という刑期もなくなる、どうだ？」
「いや、ＮＯだけど」
「なぜ？」
聞き返しはしたが、私は驚いてはいなかった。なんとなくこの女ならそう答えると思っていたのだ。
「意外と刑務所って楽しいわよ、ライバルも居るし…今は西棟のコサンジョウってヤツだね」
あっさりと私たち新鮮組が苦労して確保したテロリストの名前が出てきたが、この女の言動に関して驚いていたら話が先に進まない。
「決着が着いたらどうする？　懲役二十年、ヒマだろう？」
「出たくなったら出るから良いよ」
「…この会話は記録されているんだが、それを分かった上での脱

獄予告だな」
「もちろん」
「脱獄というのは云うだけで看守たちの憂さ晴らしのサンドバックにされるんだが」
「入るときに聞いたよ」
「…頼もしいな。明日の今頃まで私はこの島に居る。気が向いたら連絡しろ」
特に説明しなかったが、この島から本土を行き来する定期便は一日一本、来たら明日までは帰れないのがここだ。
「待ってよ総治さん、あたしからも質問させてちょうだい」
ドアノブに手を伸ばしたままの体勢で、私は振り返った。
「その祭りって、あんたも出るの？」
ここに来て、初めて見た西郷の本気の目だった。
闘志を燃やし、他のゴミを燃やし尽くすような愚直な眼、こんな視線を投げられる奴がゴミだと思う人間は刑務所に入れて貰ったほうがいい。
「私は運営側だからな出られないさ…ただ私と同門…人造理心流の剣士はひとり、このあと誘おうと思っているがね」
「ちなみに、その人はあなたとどっちが強いの？」
私は上着を脱ぎ、上半身を流星に見せ付けた。
かつて研鑽した筋肉はもうありはしない、今あるのは鍛造した放射能向き出しのストロンチウム合金の胴体。
体内の消化器を取り除きブドウ糖供給ボトルを詰め、省スペース化した胴体の中には可燃ガスボンベや弾丸が詰め込まれている。
「私はその男に刀以外の武器を使わせたことがないよ、私の方はマシンガンや火炎放射機を駆使したのに、ね」
「結果はもちろん、あなたの負けよね。刀だけ使っても負けるだけなら難しくないしね」
「…あまり答えたくないことを訊くな」
そう回答したあとの西郷の嬉しそうな様子を私は殉職するまで忘

れないだろう。

次の定期便が来るまでに、やらなければならない仕事がある。

面会室から出た私が吐き気がするような白い通路を歩いて向かったのは、旧式化しているワイヤーエレベーター。

それは上には行けないし、地下へと降りていくだけ。降りている間、私は自分がこの第八夢の島を構成するゴミの中を進む虫か何かのようになったように感じる。

そして、いつ水圧で潰れるかもわからない地下にある虫の巣では、虫たちが自分の巣を食いつぶしていた。

エレベーターの真ん前に陣取り、その虫食い作業を見物する男…新鮮組の近藤は降りてきた私に軽く手を振った。

「近藤さん、お久しぶりです。最近どうです？」

「最高だ。太陽さえ見えればな」

地下では、我が新鮮組が囚人たちを使って小遣い稼ぎをしている。この第八夢の島はもちろん埋め立てられたゴミで構成されており、その中には再利用できるものも多く、囚人に発掘させている。

「っつーか沖田、何しに来たんだ？　お前、ここ嫌いだろ？」

「私にはあなたがゴミの分別していることの方が信じられませんよ。

子どもの頃から私は、あなたがタバコの箱を分別しているところも見たことがありませんからね…今日は局長命令で、取ってこなくちゃいけないゴミがあったんですよ」

私は資料を近藤さんに手渡そうとしたが、それが無意味であることを思い出した。

近藤は、字を読めない。

「…局長から、囚人の引渡しの要求です。囚人番号でいうと“て・２０３１９”百池弾牙」

「ああ？　伊賀忍者のガキか？　他の忍者にしろよ、あいつは仕事の覚えもいいし、今、うちの稼ぎ頭で…」

「きょ・く・ちょ・う・の、命令ですっ」

不満そうな表情で近藤さんは、ビームで広範囲に声を拡散する火屯鉞刃メガホンを手にし、それを見た私は脳内回路の操作で人工耳を閉じる。

《弾牙ァー、すぐにこっちに来い！　さっさと来い！　作業は中断していい！　その辺りもほったらかしで！　今すぐ、来いッ！》

地声の時点で大きい近藤さんの声が火屯鉞刃メガホンを通されれば、無改造の人間の鼓膜は耐えられない大音量になる。

現に間近にいた囚人たちはもれなく耳を塞いでいるが、それでもなお、耳から血を流している。

「近藤さん、その忍者の耳まで潰さないでくださいよ。こっちで使うんですから」

「…大丈夫だよ、僕は」

その声は、私の背後…私が降りたエレベーターの中から聞こえてきた。とっさに振り返ると、そこには青年、写真の男に間違いなかった。

「おじさんのそれ、、食べないなら…ちょうだい」

間違いなくエレベーターには私以外に乗っていなかったし、近藤さんと喋っている間も近づいている姿は見なかった。

何が起きたのか判らないままの私をよそに、近藤さんは私の手から西郷のオニギリを奪い取り、その青年に投げてよこした。

伊賀は“あのイベント”のために、この男の釈放を要求していたが、本当にいいのか、この男を解き放っても。

「近藤さん、こいつは…どんな男なんですか?」

「戸籍上の名前は百池弾牙、現在十九才だが…もしかしたらハタチかもしれないな。十九年前、火星から送られてきたゴミの中で、俺が見つけた。

火星では使い道がないクズ素材でも、地球ではレアメタル扱い、ってのも多いからな…知ってるだろ?」

もちろんその計画は知っている。当時はまだ力があった日本政府

が失業者対策でやっていた企画のはずだ、だが、だからこそありえない。

「ちょっと待ってください、あの計画では…ゴミは全て真空保存されて送られてくるはずではッ？」

火星と地球では大気の組成が異なり、その工程で金属の腐食を防ぐための処置。

だが、その中に人間が居たとしても、人間は完全真空には耐えられない。

「だが…現実にそいつは生き残っていた。どうやったのかは誰にもわからない…弾牙自身も覚えていないんだからな」

伊賀忍者の最終兵器…いや、最終兵士　それは今、オニギリを貪っている。

「…これ、美味しい…」

無邪気な笑顔を向ける彼に、私は捉えどころの無い感情を抱いていた。

「すぐに伊賀の服部半蔵が迎えに来ます。それまでに帰り支度を済ませてください」

「お前も休めよ沖田、今日は上で一番良い部屋を取ってやるからよ」

今の私は、確かに疲れている。

大人しく向かった部屋は予想通りだった。

最初から期待はしていなかったが、この鬼ヶ島刑務所には来客用の部屋こそあるが、その内装はホテルとかそういう次元ではなく、畳に机、テレビが置いてある少し広い民宿といったところだろう。

テレビを付けて見るが、うるさいだけだ。

サイボーグ化して食欲も性欲もなくなり、私のような仕事が最大の趣味という人間が暇潰しとしては睡眠はなくならない方が都合がいい。

睡眠に関する機能は現代科学でも謎が多く、半ばブラックボックス化し、現実が素晴らしくとも辛くとも、それでも脳は夢を見たがる。

私は睡眠用のスイッチを押す。人工の自律神経系を柔軟化して緊張をほぐし脳をリラックスさせて眠るのだ―…

…何時間眠ったかは分からないが、うるさかった。

「総治さん、さっきの祭りだけど、まだ参加できる?」

彼女に起される前に私は目を覚ましていた、頭の中に走った信号の痛みによって。

緊急事態が発生すれば全自動で脳髄に幻肢痛と同じ原理の痛みが走り、即座に起床できる。

とても楽しい夢を見ていた気がするが、それを思い出すよりも目の前にいる客人が来てくれた事が何より嬉しかった。

「…コサンジョウとの決着は?」

「もうやったよ、急ぎでね」

鳴り響く騒音の中、西郷はギプスの付いた足首、そして頬から首に掛けて一直線に走る生傷を見せ付ける。

「…結果は?」

「答えたいことを訊いてくれるわね」

先ほどとは真逆の立場の、真逆の回答。同じ笑顔。

「で、参加できるの?」

「参加はできるが…ちょっと待っていろ、あまりにもうるさいからな」

私は騒音を止めるべく部屋に備え付けられた黒電話型アンティーク無線機の受話器を上げ、この刑務所の責任者に繋がせる。

保留ボタンを押すのを忘れるほどに混乱しているらしく、所長に繋がるまでにその混乱がよく聞こえてきた。

「所長か? 新鮮組の沖田だがサイレンを止めさせろ、脱獄囚は私の目の前に居る。

…捕まえたかだと？　ああ確保した。この西郷との戦闘で死傷者は？…わかった…手助けは不要だ。サイレンを止めて通常業務に戻るように部下に指示してくれ…お前の質問に答えるほど暇ではない、切るぞ」

数十秒後、やっと脱獄を伝えるサイレンが鳴り止んだ。西郷流星はサイレンなんて関係ないとばかりに冷蔵庫からコーラを取り出し、栓を歯で開けて飲んでいる。目の前に栓抜きが有るにも拘らず。

「クアあ、コーラはペプシだよね、やっぱり」

「…一言、参加すると云ってくれれば、すぐにでも出したんだがな？」

「あなたのケータイ知らなくてさ、電話もないし…それよりも総治さん、あなた、あたしにあの質問してないわよね？」

幼く温和な彼女の言葉に、私は覚えがなかった。

彼女から私に質問すべきことならば思いつくが、彼女のことは資料で読み込んでいるのだが。

「あたしがフリーかどうかよ。彼氏とか、気にならない？」

「いや、別に」

「…ああ、もう、そういう…総治さんって彼女居ないでしょ？あたしはお断りだもん」

いきなりこの女は何を云い出すのか、そもそもサイボーグ手術の際に生殖器も取り外した私には性別すら無意味なんだが。

「総治さんが訊かないから答えちゃうけど、あたし彼氏募集中…後継者も欲しいし、結婚を前提に、ってヤツね。あと強い人限定」

「…それなら、最初から私は既に候補落ちですがね」

弾丸を跳ね返されて負けたことを持ち出し、その言葉に彼女は抑えもせずに笑った。

「そうだね、そうじゃなきゃ…ああ、そうだ、沖田さん、火星で行方不明になった子供の行方とか、知らない？」

「…いえ、知りませんが、なぜ？」

「ちょっとうちの馬鹿親父がさ、生まれたてのあたしの弟を賭け

事に使って、しかも負けてさ」
「…何年前ですか？」
「十九年前。奴隷市に流れたまでは突き止めたんだけど、そのあとがよく判らなくて。そのあとはよくわからなくってさ」
とある可能性が脳をよぎる。
私の第六感はそれが事実だと確信しているが、私はサイボーグだ。そんな非科学的なことがあるわけがない、確率的にも現実的にも。
「知りませんね、申し訳ありませんが」
「まあ、そりゃそうだよね、ありがとね」
そんな直感を押さえ込むようにして、私はこの西郷流星という女に期待を寄せていた。
刀が無くともいつでも入獄でき、いつでも脱獄できる火星育ちの女ならば間違いない、組長の勅令には応えることができそうだ。

ＮＥＸＴ　ＳＡＭＵＲＡＩ　　松崎仁

第４話　松崎仁

【沖田総治】

火屯鉞刃ＬＥＤの表札には松崎の文字が表示されており、ドアの横の郵便受けにはピザ屋や脱毛屋のチラシが溢れている。

…そもそも、この家に住んでいる人物にはピザも脱毛も不要なはずだが、そんなことはチラシ配りをする人間には関係ない、客が来ることではなくチラシを配って時給を貰うのが彼らの目的なのだから。

今日は事前連絡なしで来たが松崎さんは生来の電話嫌いで、郵便物は郵便受けに溜まったら捨てるだけなのでアポイントメントの取りようがない。

だがそれでも松崎さんにコンタクトを取ることは難しくない。会いに行く前に江戸コロッセオで行われる泥覧試合の日程を調べ、松崎さんの対戦カードがなければ必ず家に居る、それが彼なのだ。

チャイムを一度鳴らせば、何拍か置いて彼は現れた。

「こんにちは、松崎さん」

「…よお」

松崎さんの全身には抜けてゴミになるような人工体毛は一切なく、人工皮膚も汚れが目立たないように日焼けをしたような黒いものを使用。

それでもセラミック製の眼球は、ダイヤモンドよりも強く貴く光っている…私と同じくサイボーグ剣術、人造理心流剣士の松崎仁だ。

「突然の来訪をお許しください、松崎さん」

「ああ…」

「長い話になるので、外で話しませんか？」

私の誘いに松崎さんは無言でドアを全開にして室内に戻っていっ

た。
「家の中で聞く、と？」
「…うむ」
「それでは失礼して、お邪魔します」
草鞋を脱いで上がった松崎さんの玄関には靴は少ないが靴べらの掛けられた下駄箱があり、向かって右手側のバストイレには洗濯機と乾燥機が置かれ、部屋の奥には机や冷蔵庫が見える…普通だ、フリーターかサラリーマン、ただの一人暮らし男の安アパート、そんな印象を受けた。
「冷蔵庫…なにを冷やしているんですか？」
松崎さんは無言で扉を空け、その中には紙パックの牛乳や使いかけの調味料、肉や野菜、健常者が食べるような日用品が詰まっている。
「…消化器を戻したんですか？」
「まあ…な」
説明が必要かもしれない。
私を初めとする新鮮組のメンバーが学び研鑽する人造理心流は、江戸時代から幕末にかけて隆盛した天然理心流を母体とする剣術一派。
だが、中には両腕に火炎放射器を仕込む者、胴体に核兵器を潜める者、頭部から生やした刃で斬り合う男、腕を虫のように増やす者と多様を極める。
実際には流派というより、サイボーグ戦士の総称と云った方が適切だ。
消化器は人体の中で多くのスペースを占領しており、新鮮組では弾丸を一発でも多く体内に収納する為に臓器は濃縮ブドウ糖液や小型透析機に置き換えている。
「食事を取るんですか、あなたが？」
「力が…足りんのだ」
「市販のブドウ糖液にはタンパク質やビタミンが添加されていま

すし、カロリーやエネルギーは足りるはずですが？」
おもむろに松崎さんは冷蔵庫から白い小さなパックを取り出した。プリンだ、プッチンとひっくり返して皿にあけて食べられるタイプのプリンだ。
松崎さんはそれを器用に右手の上にプッチンと出した。
「…なにかは判らんが、こんなものを食べていると…力が沸く、そんな気がする」
私は自分の最新人工耳を疑った。
強さのために戦闘以外の可能性を排斥した人造理心流の男の言葉とは思えなかったのだ。
私が反論を考えている刹那、彼は手の上の物を投げ捨てた。
それはまっすぐにマンションの窓ガラスに突き刺さり、それ自体とガラスのかけらを散らせた。
割ったのではない、貫いたのだ。コルクを抜いたシャンパンボトルのように正確に円筒状に。
「まさか…っ」
それはプリンだったはずだ。一般市販品の卵と牛乳の塊、食欲を失った私には感想もないメーカー品だ。
「内蔵火器を捨て去り、従来食を食べるようになってから…できるようになった」
プリンで窓ガラスに穴を開けるにはどうすればいいというのか。スピードなのかトリックなのか、私にはその原理すら判らない。
同じ新撰組内ですら、今の技術に相対できる剣士は芹沢か近藤くらいしか思いつかない。
「――プリンであれほどの威力ならば、確かに銃の類は無用ですね」
「飛び道具は刀を錆びさせる」
以前と変わらず、松崎さんはこういうときだけ舌の滑りがよくなり、口角が上がる。彼は根からの剣士なのだ、どうしようもないほどに。

「泥覧試合では銃と刀を併用して使う人間も多いようですが、それも邪道ですか？」

「…今、江戸コロッセオに居る人間で…銃士と呼べる人間はひとりしかいない…」

『雑賀凶華』

饒舌になった松崎さんと言葉を重ねるのは難しくはなかった、火屯鉄刃を使わずに江戸コロッセオで何ヶ月も生残っている銃使いは彼女以外居ないのだから。

「松崎さん、あなたは…なぜそこまで鍛えているんですか？」

「…さあな」

何年か前にした質問に、松崎さんはまたも同じ返答をくれた。

彼は戦いが好きなわけでもなく、スリルを楽しんでいるわけでもない、あくまで泥覧試合は修行のための場なのだ。

新鮮組時代から給料も生活費で使うだけで、募金するわけでも遊ぶわけでもなかったが、その生活態度が変わっていないことはテレビすらない彼の部屋から容易に窺い知れる。

己を高めることにだけしか興味のない求道者、それが松崎仁という男だった。

「…安心しましたよ、松崎さん、あなたならばピッタリだ」

私は、西郷流星に続く“ふたり目”を松崎さんに決め、資料を手渡した。

松崎さんは終始無言で表情にも動きがなかったが、時折細部を読み込んでおり、答えは考えるまでもない。

「この祭り、引き受けて貰えますか？」

「…ああ、出よう」

その回答に私は玄関まで戻り、郵便受けから取り出したチラシの番号を携帯電話に打ち込みだした。

「ピザランドさん？　なんでもいいからピザとサイドメニューを高い順にバイクに詰めるだけ。一秒でも早く持ってきてくれ…ああ、酒も忘れずにな」

大飯食らいの元同僚は、私の言葉をやはり無言で聞いていた。

ＮＥＸＴ　ＳＡＭＵＲＡＩ　　雑賀凶華

第5話　雑賀凶華

【沖田総治】

「チケット代、高かったんじゃないの？」

「この江戸コロッセオの運営陣は、私たち新鮮組の身内みたいなものですから、金は掛かっていませんよ」

「サービス良いんだ、新鮮組って」

西郷は遠慮は無用とばかりに深々と腰を掛け、自分のリュックサックを足置き代わりにしている。数日前まで刑務所にいた人間とは思えないふてぶてしさだ。

「で、あの凶華さんって人も誘うの？　例のお祭りに」

「ええ。祭りにはあと五人必要ですから。この試合、三対一とはいえ、私は雑賀が勝つと思っています」

「なんで」

西郷の問いは足置きにしている荷物の位置を微調整するついでに寂しくなった口の体操にすぎない。

そうとは判っているが私も回答する。私の会話も試合が始まるまでの暇つぶしを求めているのだから。

「やはり雑賀は別格ですよ。最多勝記録保持者ですからね」

〔雑賀凶華ッ！　百三十七勝無敗一分、連勝九十九はもちろん江戸コロッセオの最高記録！今日勝てば大台の百連勝となります。対戦相手は…〕

私の言葉にかぶさるように、スーピーカーからはアナウンサーの声を響いていた。

江戸コロッセオでの泥覧試合は全世界へ量子通信放送によって放送され、選手たちには多くのファンが付いている。

雑賀は、家族の借金を返済するために戦う少女とか、妖美な血染

めの美剣士など、ファンの多い剣士を射ち殺している。
それら全てのファンが、憎い雑賀の死を見るために江戸コロッセオに足を運び、集客力もトップクラス。
「次の祭りでは最大の人気選手である雑賀は外せません、それに…」
「ところでさ。総治さん、あたし、コーラとサラミ欲しいんだけどさ」
彼女が視線を送る方には、ビールサーバーを背負ったアルバイトが駆け巡っている。
「…買えばいいじゃないですか」
「いや、あたしの財布ってこの荷物の中でしょ？　出すのが難しくてさ、ちょっと貸してよ」
ここで貸した金は返ってこないな。またもや第六感的な実感と確信があったが、私は自身の非科学的な直感というものが嫌いだし、そもそも何千円かを惜しむ理由もなかった。
「構いませんよ、ここは電子マネーが使えるはずですから…これを使ってください」
私の手渡した携帯電話を受け取り、西郷は売り子の青年呼んだ。
「スミマセーン、ペプシコーラ一リットル、あとフランクフルトと枝豆ーッ」
…別に構いはしないが、普通のコーラとサラミではなかったのか。
そんな状態でありながら、西郷はとにかくコロッセオの中央、グラウンドを見据える。
江戸コロッセオ史上初、ひとりで三人を相手にする雑賀凶華という女は浅黒く、肥満というわけでもないのに鈍重そうだった。
テンガロンハットからブーツに至るまで編みこむようにガンホルダーが据えつけられ、その全てに鎧のように回転拳銃（リボルバー）が入っている。
本人自身の体重を含めて百数十キロ、これで早く動けるはずがない。
「…話、戻すけど、あたしは凶華さんの負けって結構あると思う

のよ」
　西郷は、雑賀の対戦相手である三人組の外国人、ザルツァ一家を目で指した。
　日本家屋に入れば鴨居にあごでもぶつけそうに長身で、それぞれがマントを羽織り　一家は同じ火屯鉞刃の馬上槍と大振りな盾を構えているが、それぞれ装備が異なっている。
　壮年のスキンヘッド、家長たる父親の装備は共通の槍と盾だけだが、双生児の息子たちは顔立ちこそ同じだが、兄の方は槍や盾の他に古風なライフルを担ぎ、弟の方は馬並の下半身…というか、銀色の馬の胴体に人間の上半身が生えている見るからにサイボーグ剣士。
　只者ではないように思えるが、それでも凶華に勝てるとこの火星女が云うならば、その根拠を聞かねばならない。
「それは…なぜ？」
「倍率が百二十倍なんだよ、ザルツァ一家の勝ちって」
「…は？」
「こんなに買っちゃってさー、勝てばちょっとした財産よ？」
　そういって西郷は両手のザルツァ一家の富籤を見せ付けたが、既に私の視線と意識はコロッセオへと向かっている。
〔それでは、五分間一本勝負。三対一変則試合、開始ですッ〕
　開戦宣言と同時に、ザルツァ一家、父と二人の息子は火屯鉞刃の武具を構えて走り出している。

うおおおおおおおおおおヲオおおおお！
　ザルツァと観客の雄叫びが重なる。
　歴史的な話をさせてもらえば、騎士というのは馬の速さと高さ利用し、敵を駆逐する職業軍人を指す場合が多い。
　侍以上に騎士という職業は定義が曖昧なのでイコールではないが、少なくともザルツァ一家の先頭に立っている双子の息子の弟の方は例外ではなく、その戦術を使っていた。

鋼鉄馬の下半身が生み出す跳躍力を利用した突撃戦術、相手の攻撃は盾で防ぎ、接近して槍で刺し殺す。

雑賀も弾丸を叩き込んでいるが、馬形のサイボーグ部分は弾丸を通さず、上半身は火屯鉞刃の盾で弾丸を蒸発させて防いでいる。

〔さあ、雑賀凶華は戦いは全てカネのためと断言するマネーファイター、重火器を使う選手も多い中で火薬代を節約するために使う火器はほぼ拳銃のみ。倹約家の死神、雑賀凶華！〕

「いけェッ！　そのクズをブチ殺せッ！　ザルツァッ」

「吉村さまの仇を討ってぇーッ！」

「銃使いのクソ女になんかにデカイ顔をさせるんじゃねーっぞッ！」

多角的に三人に襲い掛かられ、追い詰められているというのに雑賀への激励はほとんど聞き取れない。

雑賀が逃げ回る一分ほどの間にその風潮は強くなり、これ以上のヒールとしての証拠はないだろう、ブーイングがヒートアップする。

「…あーあ…損しちゃった」

サイボーグである私の改造された耳で辛うじて聞こえるような小声だった。

周囲の熱気に掻き消されて隣にいても聞きとれないような声で、今押しているザルツァの富籤を買ったはずの西郷はそう云った。

「凶器を持った三人で詰めに入って一分でしょ、それを凶華さんはステップワークだけでなんとかしてるもん」

「…あ」

云われて見てみれば、雑賀は繰り出された槍を紙一重で避けつつ、残りのふたりをその向こう側に置くように移動している。

これでは攻撃しているひとりが邪魔で残りのふたりは何もできず、一対三ではなく、一対一×三にしかなっていない。

決して早く動いているわけではない。だがＤＦやＭＦたちをひとりで抜きさってハットトリックを決めるサッカー選手のような動きで、雑賀は上半身やジャンプも駆使して三人を操っている。

「だが…ザルツァ一家には火屯鉞刃の盾がある。火屯鉞刃のない雑賀には突破する方法はない」

「盾が邪魔なら、捨てさせれば良いだけなんだよね」

この絶叫と歓声の中で、生身の西郷には私の言葉が聞こえたのだろうか？　その答えが出るより前に西郷の予言通り、ザルツァ弟が盾を取り落とした。

〔…うそ〕

実況の無意識の呟きを無視し、弟はそれでも馬上槍を繰り出すが、雑賀はその動きを見切っているように避け、槍型の火屯鉞刃を空中へと蹴り飛ばした。

ザルツァ一家の兄と父が何かを叫びながら走ってくるがもう遅い、すでに雑賀はナイフを抜き放っている。そして。

〔うおぁあああああ～ーッ！　雑賀のダマスカスボウィがザルツァ弟の首を引き裂いたぁあああー！〕

大振りで奇妙な柄が浮かび上がった雑賀の象徴的ナイフ、それがダマスカスボウィ。

その切れ味は手首の使い方ひとつで鉛筆削りから牛の解体までできる優れもの、もちろんザルツァ弟はは喉を鉛筆のように削り取られ、牛のように息絶えた。

「バカヤロォーッ！　なんで盾なんて落とすんだよ！」

観客の誰かが場内全員の気持ちを代表して言い切る中でも、やはり流星の意見は違った。

「アレは頑張った方じゃないかなア、もう意識もなかっただろうに」

「意識が…無かった？」

弟の死によって生じた観客たちの一瞬の沈静を縫うように、私たちは会話していた。

「あれ鉛の弾丸だろうし、火屯鉞刃の盾は鉛だろうとなんだろうと蒸発させる…んでしょ？　だったらその気化した鉛はどうなんの」

蒸発した鉛は、もちろん気体だから比重の違いから拡散して空気

と一緒になって呼吸で…やっと意味がわかった。
「鉛中毒、ですか」
鉛は本来食品などにも微量に含まれていて少量ならば無害だが、蓄積されると重大な健康障害を発症する。
ドイツの偉大な音楽家、ルードヴィッヒ・ベートーベンの死因もこれではないかという意見は未だに根強く、彼の難聴の原因のひとつとする研究者も居る。
「…ならば、雑賀が連射していた理由は…」
「もちろん、鉛を“投与”するためでしょ。総治さんもだけど、サイボーグの人って呼吸が大雑把なのよ。だから彼を狙ったんでしょ」
西郷の解説を聞き終わる頃には、既に観客席は威勢を取り戻し、雑賀殺害への大合唱が再開しており、今更ながら私は気が付いた。

雑賀の全身に備え付けられていたはずの拳銃の多くがコロッセオ内に投げ捨てられており、残りのふたりを鉛中毒で倒すには弾丸が足りないであろうことを。

それを知ってか知らずか、発狂したように…本当に息子の死によって狂ったのかもしれないが、ザルツァ父が叫びながら盾を投げ捨て馬上槍だけで雑賀へ斬りかかって行く。
〔無謀だァァー、自ら盾を投げ捨てて生き目を潰したぞー！　ザルツァ一家家長、アインラッド！〕
「ううん、それで良い、それがＢＥＳＴッ。頭は構えた槍で防げるし、胴体や手足なら数秒ならシャウト効果でカバーできる」
「ＳＴＥＲァーＢＥェＮッ！」

なんと云ったかは判らないが、雑賀への呪いの言葉であることは理解できる。

気迫に押されたのか雑賀も何歩か下がるが、それよりも早く興奮した馬のような突撃が雑賀を襲う。

思うに一家の中で弟だけが下半身を改造していたいのは、この突撃力を得るだけの筋力を持ち合わせなかったからではなかろうか。

この父親の速度とキレは、サイボーグ化した息子に勝ることはありえても、劣ることはありえない…それほどまでにすばらしい攻撃でも、雑賀は止めた。

「貴様がそれを…使うなぁァーッ」

受け止めたのは、その辺に落ちていた火屯鉞刃の盾…もちろん、ザルツァ一家の弟が持っていたビームシールドだ。

形見を使われて、さらに父は熱くなっていき、馬上槍の柄を操作して槍を収束させる。薄く伸ばした盾よりも収束した槍の方が強い、ちょっとした算数だ。

弟の敵を討つべく繰り出された兄の執念を込めて盾を貫き、雑賀の脇腹の辺りを掠めた。

「っち…」

鍔のない盾と槍だが、その攻防は鍔迫り合い。雑賀とアインラッド、お互いに火屯鉞刃の出力を微調整して動きを封じあっている。

一対一ならばこのまま時間切れだが、これは変則マッチだ。

「今だ、ツバイラッド！　俺が抑えている間に…こいつを刺し殺せ！」

観客の間にざわめきが起こる。

「違う、逆だ。離れろ親父、そこに居ちゃダメだ。ここからじゃ間に合わないんだ…」

「何を云っている、今動けるわけがないだろうっ、だから早くお前が…」

「…悪いわね、あたし、父親っている人種には手加減できないんだ？」

おそらく、ザルツァ父は最後まで自分の死因を判らなかったことだろう。

火屯鉞刃の武器は重量が持ち手の部分しかなく、空き缶よりは重いが中味の入ったジュースより軽く、先ほど雑賀が蹴り上げた三男の槍は未だに空中に有った。

雑賀に落下地点に誘導され、動きを封じられ、結果としてザルツァ父の身体は昆虫標本のように落下してきた槍に焼かれた。

「…息子さん…どうするの…？」

喉を裂かれて死んだ弟、槍で貫かれた父を見て、兄は雑賀凶華には火屯鉞刃では勝てないということを思い知ったのだろう、槍と盾を投げ捨て、背中に担いでいたライフルを構えて見せた。

「あ、あああ嗚呼ァアアァっ」

だが、彼が引き金を絞る間もなく、雑賀凶華の手元の拳銃が火を吹き、ザルツァ兄は額から血を吹いて倒れ伏した。

あっさりと、ほとんど何もできずに。

「――失敗したわね。時間がまだ二分以上もあるのに」

〔キ、キマッタァーッ！　雑賀凶華の勝利です、試合時間は二分十七秒、オッズは画面をご確認ください〕

そういって東京ドーム時代から使われている江戸コロッセオモニターに事細かな倍率表が提示されるが、私は賭けていないので関係ない。

「あー…大損だよ、もう」

西郷は手元の富籤を破り捨て、雑賀を祝う紙吹雪のように撒き散らす。

〔外国の視聴者には悪いけど、花咲か爺さんっていう話があるのよ。ジャパニーズ・ストーリー。

色んなことが有ってタダで拾った犬の死骸が小判になるんだだけど、アレよ。あたしにとっては同じ。死骸がお金になる〕

投げ捨てた銃を回収しながら百勝を記念するインタビューに雑賀は言い切り、私たちは出口へと向かいながらそれを聞いていた。

〔小判が欲しければあたしを殺しにいらっしゃい、あたしは犬よりしぶといけどね〕

いつの間に食べたのかフランクフルトの串や枝豆の皮をゴミ箱に投げ込み、西郷は残っていたコーラを一気に飲み干した。

「総治さん。例の祭りに参加する七人…絶対入れるべきよ。凶華さんともうひとり」

「…もうひとり、ですか？」

「凶華さんの戦跡って、今日勝ったから百三十八勝無敗一分でしょ？　そんな死神相手に…死なずに引き分けた野郎を、ね」

「それでしたら、この人ですよ」

私が云いながら指差したのは、江戸コロッセオ中の売店に並んだポスター。

それは雑賀を相手取って戦い、唯一生き延びた戦士のピンナップ写真やフォトデータだ。

「…マジで？」

「マジですよ。雑賀と一対一で戦い、一分間の試合で攻撃を受けなかった…小娘です」

ＮＥＸＴ　ＳＡＭＵＲＡＩ　伊藤幽鬼

第6話　伊藤幽鬼

〔84g〕

正しい人間は正しい考えなのだから、間違いだと疑念を抱く必要はない。

かといって、本当に間違っている人間は、自分が間違っているということにすら気付かない。

それが正しい考えならば信念、間違っているならば妄信と日本語では区別するが、それを区別することになんの意味があるのだろう。

〔本日も引き分け。不殺の巫女、伊藤幽鬼っ、これで連続引き分け記録を十七にまで伸ばした～ッ！〕

決着は引き分け。ファイトマネーはふたりとも勝利した場合の十数分の一、一ヶ月の生活費程度にはなるが、筆者の主観では死闘の報酬としては不釣合いな金額。

それでも、江戸コロッセオのちょうど中央、野球をやっていた頃ならセカンドとセンターの守備位置のような位置にいるふたりのコロッセオ闘士の様子は大違いだった。

「…ァ…ッウォォ！」

ひとりは声にならない苦しみに咽び、口元に蓄えた乱雑なヒゲを涙で湿らせている。

周囲には鈎針のような形状の火屯鉞刃が無数に転がり、世界中に中継されていながら彼は赤ん坊のように啼いていた。

「立って下さい、塚原さん。あなたほどに強い人が…泣いてちゃおかしいですよ？」

本当に白い小袖に袴、仮装のような格好をしているがその手にはサムライソード型の火屯鉞刃が握られ、息ひとつ切らしていない。

今回の試合のルールは七分間一本勝負で、勝敗はもちろんどちらかの死亡しかない。この塚原と呼ばれた剣士は鈎針型の火屯鉞刃を駆使したが、それを幽鬼は避けきった。一度の反撃をすることもなく。

「俺は…怯え続け、逃げ続けてきた。泥覧試合に出て腕を試したくても…死ぬのが…殺すのが怖くて、気付いたらこんなジジイになってて…」

「それが普通ですよ、塚原さん」

祖父と孫ほどの歳の差のある老人の涙に、幽鬼は母のように笑いを手向けた。

心を解かすような優しい声で、休んでしまいたくなる慈愛を覗かせて、男の男としての部分を叩き折るほどの母性で。

「それが、やっと決断できたんだ。末期ガン…大昔、原子力事故での被爆で…死ぬリミットが見えて、やっと…決断できたんだ」

「希望を捨ててはいけません、明日死ぬとしても、こんな見世物の戦いで…命を捨ててはいけません」

幽鬼には、その老成たる剣士の心は理解できていなかった。命を諦めないための真剣勝負であったことを。

「…殺してくれ…伊藤幽鬼…ッ！」

「引き分けは恥ずかしいことではありません。あなたは勇ましかった」

諦めてしまいたくなるような包み込む声。

「違う、違う…ッ！　違ゥァア！」

引き分けがイヤだったんじゃない、むしろ望んでいた。誰かを殺したかったわけじゃない。

ただ、一度だけ、一度だけ、自分が鍛えてきたそれをぶつけたかった。自分のしてきた修行という方法論を試したかった。

「…俺は…俺には…殺す価値もない、そういうことか…ッ！　伊

藤幽鬼…」

「殺人に価値なんてありません。死ななきゃいけない人なんているわけがありません…生きてください、塚原さん」

何を云っても通じない、この女には。

命知らずではあったが、塚原は死にたがりではなかった。生きるために参加していた。

自分が生きた証を確かめるために、命以上の価値をこの試合に見出していた。

ランダムに組まれたこの試合によって、幽鬼の優しさによって、塚原の目は涙で白濁していた。

試合も終わり、後楽園駅の構内には今日も彼女の歌が響く。

特定の人物が鳴らしているわけではない。彼女とは無関係な着メロを使っている人間が居ないだけだ。

十万人に名の知れた人間が曲をリリースすれば十%が買ったとしても一万枚売れるが、誰も知らないような人間が聞いた人間が全員買いたくなる名曲を出しても、千人しか知らなければ千枚しか売れないのだ。

だが、彼女は十億人に名を知られ、その歌は百人中百人が欲しがる曲。

今、この御茶ノ水駅を彼女の試合を見るために江戸コロッセオに向かう人々が埋め尽くし、そんな中、ひとりの男が青年の肩を叩いた。

「なあ、あんた、明後日の入場券。持ってるんじゃない？　十五万出すぜ？」

周りには聞こえないように、小声での誘いだった。

「…持っていません」

人がごった返している状況で値段を云えばパニックとなり、相手

が持っていたとしてもオークション状態になって値が釣りあがってしまう。

だが、そんなことはどうだっていい、青年はこのチケットを売る気はない、売る気がないんだから持っていると云うわけがない。

「本当に？　本当にアンタ、持ってないの？」

「ええ、あなたが二枚入手したら私に売ってほしいくらいですよ」

今まで何度もの泥覧試合を演じ、自身は重傷を負わず、そしてひとりの対戦相手も殺害していない剣士、伊藤幽鬼。

それもそのはず、彼女は命を見世物にする泥覧試合そのものに反発しており、不殺の自分が勝ち残ることで無意味さを訴える、自他共に認める正義の味方。

「いや、あんたは持ってるよ、絶対に持ってる」

「は？　なんでです？」

「持ってない人間が、あんたみたいに笑ったりしねえよ」

云われて初めて、青年は自分の口角の位置に気が付いた。

泥覧試合はファンにとっては全ての試合が見逃し厳禁、その試合が応援する選手の最後ともなりかねない。

こんな大勢の人の中で、彼女の試合を見られる感動に酔っていた。

「なあ譲ってくれよ、二十万…いや、二十六万までなら出すからよ」

「嫌ですよ、諦めてください、もう電車も来ますから」

その男は両腕を私に絡めてきた。その上で私のショルダーバックにまで手を伸ばしてきた。

バックの中にはチケットが入っているのだ、今日の試合の入場券が。

「離して下さい、諦めてくださいよ」

「あんたもしつこいな、売ってくれよ！　カネは払うって云ってるだろ」

「しつこいのは…お前だろうがっ」

青年は体が浮いた気がした。青年の主観では電車が急にゆっくり

になった気がした。
整備がされていないのか、欠陥商品だったのか、彼らが体重を掛け過ぎたのか。
予算もないのに落下防止柵を普及させようとしたのが間違いだったのか、そんなことはどうだっていい。
線路に落下していた。頬に突撃してくる電車の風を感じる今、叫ぶこともできずに居た。

「大丈夫ですか？」
「…だ、大丈夫です」
「こっちも…」
何が起きたのか、青年達には理解できなかった。
青年たちは彼女に抱きかかえられるように電車の屋根の上に居た。
彼女は、観客席から見るよりも透き通った声と優しい眼差しで青年たちを案じていた。
「あの…あなたは、その、伊藤幽鬼さんですか」
「ご存知なんですか、私のこと」
変装なのか、試合中とは違って和服でもなく、白いワンピースに同じ色のニット帽を目深に被り、サングラスをしているが、青年たちが見間違うわけがなかった。
圧倒的な剣力を持ちながらも、十七回の試合では全て引き分け。自身も雑賀凶華との戦い以外では傷一つ受けたことがない。
彼女の名前は伊藤幽鬼、名門一刀流の全時代通しての最強の剣客。
「気を付けて下さいね、あなたの命は世界の命…あなたと世界に本当の平和が訪れる日を祈っています」
足元から状況を理解したらしい駅員やファンの声が聞こえ始めた頃、彼女は電車の上から飛び降り、数十メートル先に見える車へと走っていった。

「…なあ、オイ、あんた、さっきは悪かった」
「いや、気にしてない…むしろ、落としてくれてありがとう…ありがとうついでに…チケット買わないか？　二十六万円で」
「なんでよ？」
「あの人は…伊藤幽鬼は絶対に負けないからさ、見なくても分かる」
相手に情けをかければその隙に逆転されて自分が死体、それが泥覧試合。
そんな中でも伊藤幽鬼は制限時間中、休むことなく相手の攻撃を避け続け、それでいて相手を傷つけないように配慮までする…そんな剣術でも、今青年たちを助けた芸の正体はわからない。
轢かれる直前の男ふたりを抱きかかえて電車の上に跳ね上がった、それは分かる。
だが、いかに超人的な身体能力を持っていても、電車より先に彼らを助けるには“彼らが落ちる前から”車から降りて駅に向っていたとしか考えられないのだ。

「…それでは、出してください」
幽鬼は何事もなかったように後部座席に座り込み、ほんの数十秒だけなのに眠っていた運転手の男も目を覚まし、エンジンを点火する。
〔…さんの遺体が発見されました。新鮮組の発表では、試合終了直後に試合でも使用した鈎針状の火屯鉞刃で心臓を貫いた模様です〕
運転手の男は、無造作にチャンネルを回して音楽番組にチューニングした。十数年前のどこかで聞いたことのあるような曲だった。
「また…誰も救えなかったんですね、私は…」
その呟きを運転手は聞いておらず、楽しそうにラジオから流れてくる曲を口ずさんでいる。
「…どうすれば終わらせられるのでしょう、この悲しみを、泥覧試合を…」

自分の優しさが他人を傷つけていることを知ってか知らずか、彼女の頬を一筋の涙が伝う。

ＮＥＸＴ　ＳＡＭＵＲＡＩ　飯篠土輔

第7話　飯篠土輔

〔飯篠土輔〕

「こちらです、飯篠様」

建てられてからどれほどの年月が経っているのだろう。

案内されるまま、岩清水に松がよく似合う庭園を抜けて招かれたのは二十畳ほどの座敷。僕が最後だったらしく既にUの字に六人の男女が座っている。

「よォ、あんたが七人目だな、待ってたよ」

僕から見て左側の畳は男の席、細長い愛宕橋蝙也、大柄な槍使い丸橋獣市郎、サイボーグの松崎仁…どの顔も江戸コロッセオで見覚えがある。

右側には女たち、コロッセオ最多勝の雑賀凶華、引き分け専門アイドル剣士伊藤幽鬼。そして僕に挨拶をした見覚えのない顔の女だ。

「あたしは西郷流星、彼氏なしフリーの二十五歳、よろしくね！」

サイゴウリュウセイ…やはり知らない名前だ。いきなり襲ってくることはないとは思うが、警戒は必要だ。絶対に必要だ。

「合同コンパみたいじゃの。男がひとり多いようじゃが…儂は男も女も選り好みはせんからのう、なんなら六人全員お持ち帰ってもよいぞ？」

ギャグか本気かは分からないが、とにもかくにも下品な男、丸橋獣市郎。

これで槍術の名門である宝蔵院流屈指の使い手の仏僧というのだから、存在そのものがギャグのようだ。

「あたし、好き合うなら強い人しかダメなんだけど…獣市郎さんって、強いの？」

「もちろんじゃ。儂の試合を見たことはないのか、西郷嬢」

「そこに居る蝙也さんとの試合なら見たけど…ちょっとパッとしなかったよね」

「――もし挑発のつもりなら獣市郎だけにしてくれ、俺まで巻き込まないでくれ」

「ノリが悪いのう、蝙也。儂はこの場で三人で乱交乱戦、というのもウェルカムなんじゃがのゥ」

「…乱戦は嫌いじゃないが、カネにならない戦いはパスだ」

こんな奴らが相手では、絶対に警戒は必要だ。いつでも動けるようにしておかなければ不安だ。

人生とは、カネや時間というポイントを消費し“不安”というクリーチャーから逃げ回るゲーム。

病気になるという不安から逃げるには、カネを消費して健康診断を受けるか、時間を消費して健康法でも実践する。

カネがなくなるのが不安なら時間を消費して働く。時間が足りないのが不安ならばカネを消費して自由を得る…そんなことをしても不安は薄くなるだけでなくなりはしない。

時間もカネも、どちらかのポイントも尽きると死ぬしかない。死ぬまで不安と戦い続けなければならない。

「皆さん、そうやって誰かを傷つけることだけを考えてはいけません。

戦いとは硬い心と硬い心との衝突…ならば、心を緩やかに、柔らかくしておけば衝突しても互いに傷付く事はありません…。

もっと心身をリラックスしてください」

空気も読まず、喋りだしたのは伊藤幽鬼。張り詰めた中で彼女だけは自身の言葉を実践しているらしく嫌味なまでの笑顔を浮かべている。

緊張しないというのは大事なことだと僕も思う、だがどうやっても人間は不安というストレスで緊張し続ける。

この不安を紛らわすために家族を作ることも強い効力があるが、多くのカネと時間を消耗する上、家族が居るせいで新たな不安も生

まれる。僕には人生の悪手としか思えない。
だからこそ僕は短い時間で大金が稼げる泥覧試合に参加している。
不安から少しでも逃げるために。
「――雑賀、起きろ…来るぞ」
「…サンキュ、松崎」
そこまで黙っていたふたりが言葉を交わすと、障子の向こう、庭から気配。
私は急いでU字に敷かれた七枚の座布団の中央、一番の下座に腰を下ろした。どんな人間が現れるかは判らないが、とりあえずひとりだけ立ってると気恥ずかしい。
「んー、七人、揃ってんな」
「そのようですね、今が十一時四十一分…急ぎましょう」
障子を威勢よく開け放ち、入ってきたのは四人の男たち。
全員が青と白の鉢巻きに羽織り、その背中には〔鮮〕の文字。極道に生きる処刑部隊、新鮮組の正装だ。
「俺は新鮮組、組長の芹沢火門。
江戸コロッセオの経営者で、お前らにファイトマネーを出してる金ヅルだ。
こっちの老け顔が副長の近藤、後ろのイケメンが一番隊隊長の沖田、しょうゆ顔の方が二番隊の永倉だ。
別に覚えなくても良いからな、俺たちはただの狂言回しだからよ」
その四人の顔には見覚えがある、名乗ったとおりの経歴の新鮮組のメンバーだ。
それぞれがサイボーグ剣術の人造理心流や、バイオボーグ剣術の振動無念流の達人、重心で判る。
「でよォ、お前ら、ここに居るってことはルールは合意の上、もう殺しあう気満々、ってことだよな？」
「ハーイ、大丈夫でーす」
西郷が軽い調子で云。僕を含む他のメンバーも異論はないらしい。

「オッケ。んじゃあ永倉…確認でルール、行っとけ」
「うす、任されました。今回の泥覧試合は明日の零時からスタートす。今が二十三時四十三分すから、あと少しスね。開始後、二十四時間逃げ回っていただきます、こちらの三名の皆さんから」
出入り口から一番遠い隅の畳が天井まで跳ね上がった。
畳は落ちるより早く細切れに裂かれて綿毛のように宙を舞う。割けた畳の中に現れた人物はチェーンやファーで装飾された黄色い頭陀袋を覆面のように被り、胡散臭く薄汚れた中肉中背の男だった。
「根来が紀伊組頭領、一十一人居士がひとり、霞心居士（かしんこじ）」
霞心居士の登場に大道芸人にそうするように拍手を送っているのは、もちろん西郷流星と丸橋獣市郎。
だが何をするのかとずっと見ているわけにもいかない、霞心居士を見続けているわけにもいかない。彼が現れた畳とは逆の部屋の隅にもうひとり、男が現れているからだ。
「伊賀、隠衆（なばりしゅう）…ええっと…百地弾牙（ももちだんが）」
音もなく姿もなかったはずの青年はそう名乗った。この和室には不釣合いな洋装、フォーマルなスーツに身を包み革靴。就職活動中の大学生にも見えるが黒いネクタイが、それは僕たち七人に対する喪服なのだろう。
続いてどんな登場をするかと不安にかられている間に、閉めた障子が開いた。普通に手で開かれて。
「甲賀、万衆（よろずしゅう）、中忍、猿飛重三」
トレーナーにジーパンで芸も見せずに現れたが、勤め人という出で立ちではない。
服の上からでもわかるほど鍛え抜かれた筋肉と、さらに特徴的な体毛。頭髪はもちろん、眉毛もまつげも総じて針のように突っ立てている。そうやって揃った三人に永倉が声を張り上げる。
「この根来、伊賀、甲賀の三派三忍から明日の深夜二十四時まで逃げ回っていただき、生存している方を勝利とし、賞金がでます」

「…その賞金の値段も教えてもらっていい？」
「資料に明記したはずスよ、雑賀さん」
「値段が値段だからね、あんたらの口から直接聞いておきたいのよ、万が一にも書き間違いじゃ済まされないからね」
私は以前に読み込んだ資料の内容をなぞる。
制限時間二十四時間は泥覧試合でも最長、七対三というマッチメークも泥覧試合の歴史では初、そして賞金額も史上初。
「一億円。七名の内、逃げ延びた方々で一億円を山分けしていただきます」
その金額を聞いた瞬間、血の温度が変わった気がした。熱くなったのか冷えたのかは判らない、ただ肌がざわめいた。
「一億円、云ったからね？　一億ペソとかそういう冗談は聞かないからね？」
「貧乏な日本政府じゃないんだ。俺たち新鮮組はそんなケチ臭いことは云いませんよ」
「安心したわ」
一億円。七人全員で分けるにしても、一千四百万以上。
それだけあれば、大分安心できる。安らげる。逃げ回るだけで多くの安心感を得ることができる。
これほどすばらしいことがあるだろうか。
「…ということは、俺たち七人はその三人に必ず殺される、そう思われてるわけだ。芹沢さんよ？」
蝙也に言い返そうとした部下を手で制し、芹沢火門が一歩前に出た。
「ある程度は放出覚悟だな。　この三人のレンタル料を合わせてもそれぐらいならまだまだ黒字見込みだしな。
…見たくないか？　日本政府様の秘蔵部隊と俺の江戸コロッセオの人気メンバー。毛唐連中への動画配信だけで採算は合うんだよ」
その言葉に、僕は少し安心していた。確かにそれなら不渡りということもなさそうだ。『戦う平和』である忍者が極道のイベントの

泥覧試合に参加するともなれば、いくらでも儲かるだろう。
「それなら、もうひとつの一億円の方も間違いないのね」
「ああ、忍者を返り討ちにすれば殺したヤツに一億円ボーナス。だから三人全員を殺して、かつ他の六人が全員死んでれば最大で四億…分かりやすいだろ？」
一億円ボーナス、それも魅力的だが、国防のプロである忍者と戦う不安のほうが大きい。遭遇したらそのまま逃げればいい。
「というわけで、こっちの三人組と斬りあって…いや、斬り合わずに逃げ延びてくれよな」
「ん、でも火門さん？これから江戸コロッセオに移動すると、三十分くらい掛かるよ。二十四時に始めるのは難しくない？」
この西郷という女、ルールブックを読んでいないらしい、なんとなくそんな気はしていたが、不安にならないんだろうか。ルールも知らないで命懸けの試合に挑むというのが。
「江戸コロッセオじゃ狭いだろ、この江戸二十三区、全部だ」
「え、あたし聞いてないけど」
繰り返しとなるが、ルールブックにはしっかりと明記されている。僕たち七人は二十三区内を自由に移動し、それを三派三忍が独力で追跡。忍者及び新鮮組が追跡しつつ試合を録画する。
「…いいの、一般の人に迷惑掛かったりしないの」
「なんで一般人の迷惑なんぞ俺たち新鮮組が気にするんだ。俺たちは新鮮組、ジャパニーズマフィアだぜ？」
「組長、カッコよすぎです」
「だべ？　一生着いてきていいぜ、一生利用してやるから」
「ウッス、組長」
どうでもいいが、羨ましくもある。
芹沢火門を中心として、他の新鮮組のメンバーは不安を感じているように見えない。
ただ近くにいるだけで他者の不安を取り除くスキル、それをなんと呼ぶのか知らないが、そんな人間を多く周囲に置くのも人生の目

的の一つ。
人間関係を構築するにもカネや時間が有った方が良い。
「今が四十九分だ、五十分になったらこの屋敷から抜け出て解散、適当に生活しててくれ。あとは忍者が勝手に襲うから」
最初から資料で云われていたことだ。僕たちは立ち上がって想定していた隠れ家を思い描いた…明日は長くなりそうだ、人生で一番長い日に。
そのとき、驚くほど冷たいそれは僕の後頭部に押し付けられた。
「あんたに明日は来ないのよ、これがね」
拳銃使いの雑賀の言葉とともに放たれたそれは、そう僕が感じることもできないほど熱かったのだろう。

ＮＥＸＴ　ＮＩＮＪＡＭＡＮ　百地弾牙

幕間（前書き）

小説を読めればいい人はこのスペースはスルーして大丈夫です。
本編には何の関係も有りません。

幕間

小説を読めればいい人はこのスペースはスルーして大丈夫です。
本編には何の関係も有りません。

愛宕橋（あたごばし）　蝙也（へんや）
流派：我流
戦績：十一勝　無敗　四分
備考：蹴り技を組み込んでいる剣士。他にも隠し技があるとの噂。

飯篠（いいざさ）　土輔（どすけ）
流派：天真正伝香取神道流
戦績：十二勝　無敗　六分
備考：最古の剣術とも呼ばれる天真香取神道流の皆伝剣士、金持ちニートを目差す。

伊藤（いとう）　幽鬼（ゆうき）
流派：一刀流
戦績：無勝　無敗　十七分
備考：未だに人を殺したことがない“清純派剣士”。

松崎（まつざき）　仁（じん）
流派：人造理心流
戦績：二十二勝　無敗　十五分
備考：元新鮮組の隊士で、独自の戦闘哲学を持つサイボーグ剣士。

西郷（さいごう）　流星（りゅうせい）
流派：山至示現流
戦績：―

備考：火屯鉞刃ではなくＯＴＣの大剣を持ち、泥覧試合も初参加。新鮮組沖田の推薦。

雑賀（さいか）　凶華（きょうか）
流派：雑賀流炮術
戦績：百三十七勝　無敗　一分
備考：メンバー唯一の銃士、他にも多くの武器を使いこなす倹約家の死神。

丸橋（まるばし）　獣市郎（じゅういちろう）
流派：宝蔵院流槍術
戦績：十四勝　無敗　二分け
備考：ほとんどプロペラにしか見えない槍を使いこなす巨漢坊主。

以上、七名の腕に覚えの有る者たちが丸一昼夜、三人の男たちから逃げ回ります。
たったの三人、されど追う男たちは甲賀・伊賀・根来の名門からそれぞれ派遣された三人の忍者。

百地（ももち）　弾牙（だんが）
流派：伊賀忍者
備考：忍者の中では最年少の無気力な優男。特徴がないのが特徴。

猿飛（さるとび）　重三（じゅうぞう）
流派：甲賀忍者
備考：甲賀の要人護衛の専門チーム、真田獣幽士のリーダー。筋肉質で大柄な中年。

霞心居士（かしんこじ）

流派：根来忍者
備考：根来を纏め上げる怪僧軍団、一十一人居士の一員。年齢・性別・人格、全てを仮面に隠す。

三人の忍者に追われ、この七人はあるいは逃げ回り、あるいは迎え撃つのです。
これから始まる七対三の鬼ごっこ。明日の午前零時に命を残すものは居るのでしょうか？
それでは皆さん、双方の生残る人数を予想し、賭けをお楽しみください。

…というわけでですね、この小説は普通に読んで頂いても良いんですが、ちょっとしたゲームとしても使えます。
この作品の続きを読む前にざっと誰が生き残るかをメモっておいて、実際の展開で誰が生き残るかを予想してね！
別に完全正解とかしても何も無いけどね！　楽しむのが一番だから！

以下、テンプレート、コピペして使ってねっ。

主人公側生存者：〇人（蝙也、獣市郎、流星、仁、凶華、幽鬼、土輔）
忍者側生存者：〇人（伊賀、甲賀、根来）

※〇のところに生存する数を書いてください。死亡する名前を消して、生存すると思う名前を残してください。

以下、約束事。

1：十人全員の死亡及び生存はありません。

2：お互いに人数は増えません。

第8話　鏡祭り

あたしが振り向いたとき既に彼は遺体となっていた。
そして、彼が畳に倒れ伏した頃には…彼女は、笑っていた。

【西郷流星】

「なにをしているのですっ、雑賀凶華っ」
「ああ、銃が暴発した。ただの整備不良よ」
「戯言をっ。どうしたら後頭部に押し付けた状態で暴発するというんですかっ」
吼えた女は雪のように真っ白な着物、声もとても綺麗だったけど…その叫びは吹雪のように獰猛だった。
真っ赤な返り血の似合ってる方の女の方は、血液と同じように妙な温もりがあった。
「だけど…あんたにとっても都合が良いでしょ？」
「なにを…っ」
「もし忍者たちがフヌケでひとりも殺せなかったら、ファイトマネーは一億÷七…千四百万くらい？　だけど飯篠が死ねば千六百万まで底上げよ？」
「あなたはおカネなんかのために…飯篠さんを殺したというんですかッ、あなたは、あなたという人はッ」
「暴発だと云ってるでしょ。事故だって」
ふたりとも真っすぐだ。だからお互いにぶつかり合う。
見守る他の参加者――もちろんあたしも含めて――たちは、他人ごとのように見守る中、ふたりだけが一触即発の緊張感の中に居た。
だが、勝手に参加者だけで話を進めていれば止めに入らなくちゃいけないのが運営の新鮮組のみなさん。
「あー、別に良いよ。事故なんだろ？　ちゃんと今のも録画でき

てたし、こういうファンキーなのも盛り上がる。だけどさぁ」
火門さんを含む四人全員、懐から愛用の火屯鉞刃を覗かせる。
柄だけで一mはある大型のもの、光刃の発生装置が二股になっているもの、そして“一見”しただけでは普通の火屯鉞刃にしか見えない芹沢火門さんの刀。
「シナリオを変えるのはここまでにしろ。そうじゃねえと次の企画は新鮮組によるコロッセオ闘士の斬殺ショーだ」
「――そっちの大会も呼んでちょうだいね、一番隊から十番隊、全隊長を倒して十億出るなら悪くない」
「…今のは聞かなかったことにしといてやるぜ、行くぜ、野郎ども」
号令に付き従い、新鮮組の人たち、そして参加者の皆さんも屋敷から立ち去っていく。
あたしも出て行こうとしたとき、ふと振り向けば土輔さんの遺体の前で屈んでいる人が居た。
弔っているのかとも思ったが違う、記録映像で見たタスマニアデビルがちょうどこうだったかもしれない、美味しそうな部位を探し出す能力がある。
その人は身包みから火屯鉞刃を取り出し、続いて財布は現金を抜き取ってから死体に戻した。
「臨時収入があったから飯ぐらい奢るぜ？　流星ちゃん？」
枯れ木のようなと形容するのがベターなのかもしれないが、私が最初に抱いた彼への思いは『スゴイ』だけだった。
野太い血管が浮き上がった今にも折れそうな細い四肢、だがそれは切断に筋力を必要としない火屯鉞刃を扱うには理想的な身体。
ただ軽量化に軽量化を重ね、俊敏さだけを追求し肉を抜いた身体…名は体を表す、蝙蝠のような剣士、愛宕橋蝙也だ。
「ゴチになります」
そのとき、何の気なしにあたしもタガが外れている人間なのだと実感した。

目の前で死体から現金を抜き取ったことも、そもそも自分のために他人の頭を打ち飛ばす人間を見ても、畏怖も嫌悪もない。

無法の火星で育ったということもあるかもしれないけど、あたしは凶華さんや蝙也さんにはむしろ親近感すらあった。

「さてと…もう五十八分。急ぐぜ？　花火に巻き込まれたくないからな」

「？　花火？」

「…本当にマニュアル読んでないのかよ…走るぜ」

蝙也さんは火屯鉞刃で壁を壊し、あたしに続くようにジェスチャーしてから跳び出した。

あたしもそれに続くが、蝙也さんの駆け足には信じがたいものがあった。

ビーム兵器しか持たない蝙也さんより、質量の有る蛮一文字を持つあたしの方が重量的なロスがあるとはいっても、蝙也さんの速度は見たことのないものだった。

右足を前に出せば次に着地するのは一メートル先、次に足を出せば着地するのは二メートル先、次に出せば四メートルと一歩の歩幅が伸びていく。

蝙也さんは十歩も掛からずに屋敷の外へと飛び出したが、あたしはさらに数秒を費やしていた。

「今が…なんだ、まだ五十八分か、余裕を持ちすぎたかな」

息も切らさず、蝙也さんは今出てきた屋敷を指差し、カウントダウンを始める。そして蝙也さんがゼロの宣告と同時に屋敷が爆ぜた。

夜風を抱き込んで、爆風があたしたちの頬を撫でる。立派だったお殿様でも住んでいそうな豪邸は、剣士の命のように燃えている。

「さあ、深夜零時…あと二十四時間、着いてこいよ？」

「とりあえず、俺は俺が明日まで生き残る単生に全財産…流星、お前はどうする？」

「そうね、あたしは…デミグラスと和風おろしバーグの八百グラム、チキンドリア、あとはポタージュスープのM、ドリンクバー付きでいいわ」

何回来ても地球のファミリーレストランには胸が躍る、腹が鳴る。他の食べ物やさんにはない、スタイリッシュさがある。

まあ、スタイリッシュだとしてもナニするわけじゃないし、蝙也さんはあたしの注文にカプチーノだけ加えてウェイトレスさんに伝えた。

「――さっきの花火は開幕を告げる余興だろうな。一般告知は今始まったところだ」

蝙也さんの連れてきてくれた二四時間営業のファミレスのモニターには、あたしたちの名前とめまぐるしく動くグラフが表示されていた。

「なに、それ」

「今日一日の試合を収録しながらオッズを集計して金を稼いでんのさ。んで明日は試合自体を有料で放送する。

この選手は生き残るだろうっていう単生（たんしょう）、最終的にどっちが何人生き残るかっていう賭け方もある…何時間以内で死ぬとかって細かい賭け方もできる」

モニターの読み方もよくわからないけど、とにかくあたしが死んだら儲かると思っている人が少なくないことは判る。

「ところで、忍者、ってなに？」

回線が重いと呟いていた蝙也さんは、質問の意図を聞き返すように首をかしげた。

「日本の人じゃないの、お前」

「火星生まれで。日本っていうか地球に来たのも初めてです」

「なんつったら良いかな、忍者ってのは新日本帝国の国防戦力なんだよ、噛み砕いて云うと」

「…？　日本って国防って…自衛隊とかいう軍隊があったんじゃ？」

「経済破綻した日本は元々少なかった自衛隊も維持できなくなった…っていうか、旧日本は憲法上軍隊持てねえから」

あたしの住んでいた火星、ケルベロスとエリシウムの間辺りにあるドームでは人種に拘るほどの余裕はなかったが、それでもあたしは爺ちゃんに日本の話はよく聞いてたけど…よく分からない話だ。

「…憲法って国民の生きる権利を認めているんじゃ？」

「認めてるよ」

「国民の生きる権利があるのに、軍隊で国防する権利はないんですか」

「そうだよ」

「じゃあ、親や先祖が築いてきたものを踏みにじられて、友人や兄弟の夢を壊されて、恋人や姉妹がレイプされても何もしないんですか」

蝙也さんはあっさりと首肯してくれた。随分シンプルで複雑なルールだこと。今日一日この話をしていても、頭の悪いあたしには理解できるとは思えない。

「まあ、そんなわけで最初から国防するには少なすぎる人数だったのを、ひとりずつにカネを掛けて全員が一騎当千、っていうのが自衛隊の方針だったわけだ」

それは火星でも聞いたことがある。平均的な自衛隊員は他国の特殊部隊員と遜色のない戦力があると推察する専門家も少なくないとか。そんなスペック比べなんて戦ってみなければ判らないし、それを判りたいからあたしは人斬りなんてやっているわけだが。

「不思議だよなァ。同じホモサピエンスなのに各国家でこんなに国の有り方が違う。不自然ここに極まる、って感じだ」

「自然じゃないといけないんです？」

「…それは自然の方がいいだろ？　生茂る大自然、動物たちの生命の営み…」

そういって蝙也さんは白く、鋭利な歯…牙を覗かせた。生まれつきか尖らせているのかは知らないが、吸血鬼のように尖った歯だった。

「人間は不自然すぎる。過度の森林伐採、生態系の恣意的な改変、過度な放射能…自然環境をこれだけ破壊しながら、まだ火星や月を地球化してる始末…」

「…その火星で生まれてるんですけど、あたし」

だよな、と蝙也さんは驚きもせずに頷いた。

「科学ってヤツは生産的過ぎるんだよ。何をしても破壊といっしょに何かを生産するし、自然ってヤツはもっと…混沌としているべきだ」

…ん？

「自然は良い…知ってるか？　霊長類は例外なく同族を殺す習性があるんだよ。

他の雄猿が生ませたガキを殺したり、他の縄張りの同族を拷問したり…それが霊長類だ。

人間もその習性があるのに、文明と科学が邪魔をする。俺は平等とか平和とか、そういう不自然な状態が嫌いなんだよ」

興奮する蝙也さんは、勢いに任せてノートパソコンを倒した。

表示されていた“お気に入り”の表示スペースには、森林復活などの自然回復法人が、胡散臭いほど大量に表示されていた。

「…つまるところ、動物になりたいもんだから、蝙也さんは動物園みたいな檻の中…コロッセオで戦ってるわけですか？」

「――いいや、逆だよ」

そのとき、テーブルとテーブルの間の狭い通路を歩いてくる、可愛いミニスカートのウェイトレスさんが持っているデミグラスとおろしバーグ。

ここで『可愛い』が付くのはミニスカートでもウェイトレスさんでも構わないが、あたし本来の意図としては、当然ハンバーグに付けている。

「ねえ、それ、このテーブル？」
あたしの質問には、嬉しいことにウェイトレスさんは頷いてくれた。
料理を落とさないように胸を揺らしてテーブルに向かってきてくれた健気なウェイトレスさんだが、その笑顔が突然曇った。その健康的な白い太ももに、曇った不健康そうな白く五指が食い込む。蝙也さんだ。
「お、お客様、は、離してくださいまし…料理が…」
「江戸コロッセオ以外が動物園なんだ。人間が互いを見世物にして何も生み出さない」
太股に食い込んだ爪が柔肌に傷を付け、痛みに屈みこんだウェイトレスさんの乳房に蝙也さんはもう片方の手を掛けるが、それでも彼女は健気にハンバーグを落とさないように持っている。
「引ん剥いて見世物にしてやろうか？　伊賀忍者」
「――大丈夫、自分で脱げる」
その寝ぼけたような声は、明らかに男のものだった。
続いてウェイトレスさんの口から、何かが蝙也さんに打ち放たれた。
蝙也さんは半秒前まで太股と胸に減り込んでいた両手でその棒手裏剣を受け止め、両手が離れたと同時にウェイトレスも大きく後ろに跳躍して逃れている。
もちろんその手にハンバーグを乗せたまま。
「…毎度毎度、そいつはどんな仕組みになってんだ」
「僕も…よく知らない」
蝙也さんがメジャーリーガーのキャッチボールのように投げ返した棒手裏剣を、ウェイトレス＝伊賀忍者はハンバーグを盾にして受け止める。
温和すぎるふたりに、他のお客さんや店員さんも何が起きているのか、付いていけていないらしい。
「二対一で殺したんじゃボーナスの一億は出ない、譲ってもらう

ぜ？　流星ちゃん？」

あたしがどうぞ、と手を差し出すとそこに伊賀忍者が棒手裏剣は刺さったままのハンバーグを投げて寄越した。

「食べながら…見…る？」

ウェイトレスの口から二本の腕、続いて頭と肩、お次は胴体。

足まで脱皮するまでに三秒と掛からずに出てきたのは数分前に屋敷で出会った喪服の青年。

空気の抜けた風船のようにしぼんでいるウェイトレスのときは女の声に女の身の丈だったが、現れた弾牙さんは男の中でも長身といえる。

スーツのポケットにウェイトレスの“皮”を折りたたんでしまい込み、入れ替えに取り出したふたつの紙箱。ラップかクッキングシートをホイルした箱のように見える。

何が出るかと見ていれば、スルスルと伸びていくのは銀色に光る紙…アルミホイルにしか見えない。

「…眠い」

ホイルをヌンチャクのように振り回し、椅子やモニターに引っかけっていく。よく見なくともそれは銀色に輝いており、それを弾牙さんはシワひとつなく張り巡らせていく。

こっちにも飛んできたが、あたしと蛮一文字はハンバーグを落とさないように避ける。

何をしたいのかは分からないが、とにかくあたしはハンバーグ食いながら見物するだけだが、当人である蝙也さんまでそんなわけはない。

「退屈なんだよ、他人の準備動作ってのは」

蝙也さんが飛び掛り、アルミホイルで周囲と自分自身をグルグル巻きにした弾牙さんに向けて火屯鉞刃の刃を振り下ろす。

火屯鉞刃は光熱によって手応えもなく弾牙さんを切り裂いた…はずだった。

「鏡？」

切り裂かれたのは鏡だけで血飛沫もなく、ただ氷のようにアルミホイルが舞う…いや、あの光は…っ

「あれは…形状記憶超硬合金（オーバー・タングステン・マルテンサイト）ッ！？」

「…？　なんだそれ、流星ちゃん？」

今までの諸々の解説の代わりとばかりに、あたしは食べかけのハンバーグを床に置いて自分の知る限りの情報を思い出す。

「えーっと…あたしの蛮一文字に使われてる超々硬合金（オーバー・タングステン・カーバイト）と同じく、火星特産の合金です。

形状記憶超硬合金は、強度では超々硬合金に劣りますが、ある特性があります」

――ここで『その特性とは？』とか聞いて欲しかったんだけど。

蝙也さんの視線の先では狭いファミレスの中とは思えない光景が広がり、あたしに言葉を掛けられる状況でもない。あたしは反応を待たず続きを口にした。

「形状記憶超硬合金は特定の温度以外では非常に硬くなりますが、ある一定の温度になると絹布のように柔らかくなります」

「…なるほど。絹みたいに柔らかくして投げて固めるだけ…ね。それで“こういう”風にしちゃうんだ」

釣り下がる百地弾牙さん、宙に浮く百地弾牙さん、半身しかない百地弾牙さん…周囲を見渡せば、弾牙さん祭り。

弾牙さんだけじゃない、あたしもいれば蝙也さん、遠慮もせずに携帯電話でシャッターを切っている他のお客さんも大量増殖。

鏡は全てを映し出す、全てを写す鏡をも別の鏡が映し出し、その鏡をやはり別の鏡が映していて…あたしは…。

「…キレイ…」

お客さんの誰かがそう呟いた。

夢幻にして無限、さっきまでの大衆食堂からは変わってそこは鏡の国となり、あたしはその光景にサラダバーのお代わりも忘れて見惚れていた。

鏡に写った弾牙さんの手元にはあたしが今使っているものと同じ

フォークやナイフを蓄えている。
どこにいるかはわからないけど、重心からして高めに投げようとするその構えは長身細身、蝙也さんをターゲットに据えているのは間違いなかった。
「…避けないでね」
「避けるわっ！」
実際には一本ずつフォークかナイフを投げているだけなんだろうけど、視覚的には鏡に写った無数の弾牙さんが同時に投げて居るようにしか見えない。
他のお客さんやふたりが目まぐるしく移動しており、あたしにはあたし以外のホンモノを鏡像の中から見つけ出す方法は思いつかなかった。
そんな鏡の大迷宮でも、張った本人である弾牙さんには蝙也さんの位置は判っているらしい。
なぜかといえば、弾牙さんが投げた三本目と十八本目のナイフは、いつの間にか鏡像の蝙也さんの肩と腰に突き刺さっているからだ。
「なんで…弾牙さんに蝙也さんの場所が…っ？」
「さあな。自分で張ったんだ、何か対策があるんだろうが…ッチ、俺にも手があるぜ」
蝙也さんは面倒そうに舌打ちしてから火屯鉞刃を懐にしまい込み、もう一回舌打ちする。
そして楽しげに身体をゆすり、立て続けに舌打ちし、口笛まで吹き、カラカラと下駄でタップダンス、両手で指を鳴らすスナッピング。
舌打ち、口笛、下駄、左右の指、全てが異なった拍子で鳴り、音楽というより、何か、空想上のモンスターの鳴き声に聞こえた。
鏡に映っている弾牙さんは意にも介さずに寝足りないような目とおぼつかない手先で、どうやら厨房から取ってきたのだろう、火屯鉞刃の包丁を構えている。
「みんな、聞こえるっ？　伏せてっ、次は火屯鉞刃をくるよ！

身体を小さくして、丸まって！」

懇願や罵声が聞こえるが、それでもあたしの声にしたがってみんな身体を小さくしたのが鏡越しに見えた。

もちろん、あたしも食べ終わった食器をそのままにし、その場で姿勢を低くして勝負を見守る。

「…そういうの…云った方が良かったんだ」

「無関係の人を巻き込みたくないならね」

「次は気をつけるよ…覚えてたら」

全く気をつけず、弾牙さんは投げる、投げる、無造作に包丁を投げ続ける。

包丁はあっさりと形状記憶超硬合金の鏡を蒸発させ、お客さんや店員の悲鳴に包まれるが、当の蝙也さんはまだ口笛やスナッピングを演奏中。

その間も火屯鉞刃の包丁が降り注いでいるが…あたしはあることに気が付いた。

「…一本も…蝙也さんに…当たっていない？」

自分の奏でる曲で踊るように…というより、たんぽぽの綿毛が風に身を任せるように鏡に映る様々な角度の蝙也さんは最小限の動きで、しなるように避ける、避ける、避ける。

気がつけば、あたしにはお客さんたちの悲鳴が、蝙也さんの踊りに対する喝采のように聞こえていた。

それから何秒が経っただろう、蝙也さんの動きが止まったのは弾牙さんの手元には一本の刃物がなくなってからだった。

「…セイフティ外した火屯鉞刃はなんでも蒸発させるから、投げた先に誰かいれば立派に殺人犯だぜ？」

「…それが？」

何が悪いのか、そう云わんばかりの応対だった。

先ほど土輔さんを事故と言い切って殺した凶華さんとは別の何かを感じた。

凶華さんは自分の目的のために明確な悪意を持って土輔さんを射

ち殺したが、この弾牙さんは善でも悪でもなく、他人の命にただ興味が無いんだ。

「あんた…コロッセオ闘士になった方がよかったな　向いてると思うぜ？」

「…そっちも…忍者に向いてる…それだけのエコロケ…使える人は伊賀にも少ない…」

蝙也さんは云い終わると再び口笛を吹き始めたが、下駄でのタップやスナップピングは行わず、その両手には先ほどしまった火屯鉞刃が握られていた。

「少なくてもいるのかよ、苦労したんだぜ？　これ覚えるの」

エコーロケーション…あたしも火星で使い手に出会ったことがある。

火星ほどじゃなくとも地球にも山はあるし、ヤマビコという現象は知っていると思う、ヤッホーと叫べばヤッホーと帰ってくる、アレだ。

声は人間と山との距離によって返ってくる時間が異なるが、逆に考えれば声が返ってくるのに掛かる時間によって対象物との距離を図れる。

蝙蝠（コウモリ）は同じ原理で暗闇であろうとも前方の障害物を確かめられるし、犬でも使えることが報告され、優れた聴力があれば人間でも修得することができる。

「お前の鏡も苦労して覚えた技だっただろうに…無駄な努力だったなァ、弾牙ァっ」

この技術は盲者が用いることが多いが、健視者でももちろん使える。指や口笛など複数の音源を使用する戦闘用のソナーとして。

あたしにはどの蝙也さんが本物かは判らないが、全ての蝙也さんは火屯鉞刃を青眼に構え…おそらく、弾牙さんを見つけて跳んだ。鏡全体に赤が広がった。

「…いいよ、別に」

その赤は血ではない。火屯鉞刃同士が激突したときに発生する光

のドップラー効果による赤。蝙也さんの光刃による文字通りの一閃を弾牙さんは逆手に持った火屯鉞刃の包丁で受け止めていた。

「…な…っ？」

「別に苦労なんか…してないからさ…」

云うまでもないが、剣は片手で振るより両手で振ったほうが早く正確になる、それは万国共通、地球でも火星でも月でも常識だったはずだが、蝙也さんが両手で打ち下ろした戦刀は、弾牙さんの片手振り調理用包丁に容易く止められていた。

火屯鉞刃の出力でも取り回しでも蝙也さんの刀の方が圧倒しており、それでも、それでも弾牙さんは表情も崩さずに受け止めた。

「…ねえ、そっち、遅くない？」

「が、アアアアアッッ！」

蝙也さんは一度刃を引き、続けざまに火屯鉞刃を繰り出していく。そのスピードは決して遅いわけではない。火星でもあれほどの使い手はそうは居ないだが、弾牙さんはそれ以上の速さで受け、何合か交えた後、二本の刃が噛み合って動かなくなった。

鉄剣ならば鍔迫り合いと云うのだろうが、これは火屯鉞刃なので光迫り合いとでも云うのだろうか。蝙也さんには蹴り技もあるが、刀と刀が噛み合った状態で足を地面から離せば重心が崩れて斬り殺される。

両手持ちの蝙也さんに比べて——鏡越しだからどちらの腕かはわからないが——片手で包丁を握る弾牙さんの逆の手は開いている。

「…くそ」

弾牙さんは例の形状記憶超硬合金のケースを指先で操り、こよりを結うように尖らせた。

「ガっーあぁ、くそおおおおッ、負けたァー…」

軽い調子で喋りかけていた蝙也さんとは懸け離れた、泣きそうなほどの叫び声だった。死にたくないだけなら、あたしに助けを乞えばいい。だが蝙也さんは死にたくないのではなく負けたくないのだ。生きたいという“自然”すぎる感情よりも、蝙也さんは弱肉強食と

いう文明的な発想をしていた。
「…じゃあね」
弾牙さんの無感情な声に続き、蝙也さんの首が胴から離れたのが周囲に映し出され、その像を飛沫が曇らせる。
さっきまで伏せていた客のケイタイのフラッシュだけが、跳ねられた首を照らしていた。
「…次は…キミ？」
喪服の黒についた赤を拭いもせず、弾牙さんはあたしを指差す。
四方八方の鏡越しに無数に増えながら。
どうやらあたしの位置や反射も計算に入れているらしく、背中や上から見た鏡はひとつもなく、全てがあたしに向いている。
「そうだけど…弾牙さん？　あなた、年齢はいくつ？」
「…十九だけど」
十九才。生きてればあたしの弟と同い年くらいか。
「あたしはね、もう二十五なの。アダルトなお姉さんなの。キミとか呼ぶの、やめてよね」
彼は驚いたそぶりもなく、少し考えてから不慣れに頭を下げた…頭下げてもあたしより目線高いんだけど。
「…ごめんなさい、お姉さん」
「判ればいいの、弾牙くん」
鏡の中の弾牙くんは、蝙也さんの持っていた火屯鉞刃を拾って構えた。
蝙也さんとの戦いを見た限り、弾牙くんには例のアルミじゃないアルミホイル以外には武器を持ち合わせていない、と見た。
伊賀流のルールか何かなのか、単にファミレスに張り巡らせるほどのアルミホイルを隠し持つために他に持てなかっただけなのか、そこまでは判らないが。
「まあ…そんなことはどうだっていいわね。別に」
弾牙くんは、いつの間にかどの鏡にもその姿が映らなくなった。
逃げ去ったわけじゃない。あたしから姿を隠しながらフォークや

ナイフを調達しているだけだろう。
あたしには蝙也さんのようにエコーロケーションはないし、弾牙くんの攻撃が始まれば避けきる自信は無い。
「…お姉さんは…ソナー…ないんだね」
やはりバレている、だがそんなことはどうだっていい。あたしは刀に巻きつけていたブルーシートを剥ぎ取り、刀を露出させる。超々硬合金で作られた刀身は鏡よりも深く鈍い光を放ち、独特の鉄臭さを漂わせる…蛮一文字は今日も変わらず、あたしの全身をその重量で釘付けにする。
「うわ、大きいっ」
蝙也さんの死を見て落ち着いたのか、いつもの殺し合いだと認識し、周囲のお客さんたちは平静を取り戻してビール片手に料理を食べながらの観戦ムードに入っていた。
「アホか。火屯鉞刃が強いのはビームはビームじゃないと止まらないってだけじゃない。実体剣だと重量分動きが遅くなる。接近戦では速さ＝戦力…クソ重い砲丸投げで二十五メートル投げたら奇跡だが、野球で二十五メートルなんて弱肩だ。あんな大きさだったら、まともに振り下ろしたら二ノ太刀は上げられないよ」
あたしも異邦人だが、江戸はそういう町だということは判る。刀に狂う、とうきょう状態。
「おじさん、いい解説、ありがとっ、でもね！」
「え、俺！？」
「でもね、山至示現流では、重い方が速いのよっ！」
蛮一文字の空気抵抗を取り除くタービュランサー、遠心力を生む長尺と長重量、そしてあたしのカラダ。あたしを幼児体系に留めている、物心を付く前からつけ続けた高密度筋肉…それら一点、一撃に注ぎ込まれるためだけに。
「流星ちゃん、振り上げましたぁっ」
左耳の辺りまで、蛮一文字を振り上げる。数十秒与えれば、弾牙くんはあたしを殺せる数の飛び道具を揃えるだろう。

「脂臭いこの店で、それだけ胡散臭いのは…キミだけなんだよっ、弾牙くんっ」

鏡張りの迷宮に隠されて彼の姿は見えないし、もちろんエコーロケーションなんてあたしにはできない…それでもあたしは音を出した。蝙也さんとは違ってリズムも無く、ただ大きいだけの金切り声。

肉体のリミッターを外すべくあたしは叫ぶ。相手を威嚇し、肉体のリミッターをシャウト効果で叩き壊すために。それが山至示現流奥義、猿叫（えんきょう）に身を任せ、あたしは蛮一文字を畑を耕すくわや何かのように振り下ろす、手応えはない。

「…へえ、お姉さんの技…そういうの…なんだ」

「ええ、ちょっといいでしょ？」

「うん…ちょっとだけね」

いつも手応えはないのだ。巻き藁を斬っても、コンクリートを斬っても、火星で巨大化繁殖したクマムシを斬っても。

その強度と重量、音速並の速度で振り下ろされる蛮一文字は、フアミレスの机やカーペットに床、形状記憶超硬合金の鏡、人間を切ったとしても手応えはいつもの空気抵抗だけだ。

上段からの振り下ろし。地球が重力で引っ張ってくれる一撃。刀が重ければ重いほど、扱いにくければ扱い難いほど。ＯＴＣの刃の切っ先は人間が知覚し、躱せる速さではない。弾牙くんの腕を肩口から切り飛ばしていたことを、あたしは割れた鏡の中から覗く弾牙くんの姿を視認して知った。

「…なんか、動けないや…俺の…負けだね」

手首の血管を切っただけで死んじゃうのが人間、それが科学。

血管をもろもろ巻き込んで肩から切り捨てれば、失血でショック死してもおかしくない。

それで意識を保ち、自分の足で立っているだけ、弾牙くんは超人的体力と人外的根性の持ち主だと云えるだろう。

「この場はね。次に期待するわ」

「…殺さない…の？」

無邪気な顔で、随分とトンチンカンなことをいう弾牙くん。
「あのねえ、なんであたしがそんなことしなきゃならないのよ？」
「…試合中だし…一億円のボーナスとか…さっきの人のカタキ討ちとか…」
なんだその理由。そんなことで戦う人間は居ないって。今、この勝負はあたしの勝ち、それなら他になにをしろっちゅーんじゃ。
「…あなたも死にたいわけじゃないでしょ？」
「…どっちでもいいんだけど」
「あー、どっちでもいいが一番困るのよ？　ハッキリなさい」
青白い顔で少し考えてこんで、ガクンと首肯してから、
「…じゃあ、生きたい…かな」
「ン――素直でよろしい」
そのとき、ちょっとだけ弾牙くんが笑った気がしたけど、見間違いかも。
弾牙くんは受身も取らずにこけしみたいに倒れこんで、表情は一瞬しか見えなかったから。
「えーっと…スイマセン、地球でも救急車呼ぶときって一一九番ですか？」
結局のところ、あたしは救急車が来るまでの間、弾牙くんの後片付けとして鏡を壊しまくっていただけだった。

ＮＥＸＴ　ＮＩＮＪＡＭＡＮ　猿飛　重三

第8話　鏡祭り（後書き）

五対三

選抜七人
死亡・愛宕橋　蝙也（我流）
死亡・飯篠　土輔（天真正伝香取神道流）
生存・伊藤　幽鬼（一刀流）
生存・松崎　仁（人造理心流）
生存・西郷　流星（山至示現流）
生存・雑賀　凶華（雑賀流炮術）
生存・丸橋　獣市郎（宝蔵院流槍術）

忍者三派選抜
生存・霞心居士（根来）
生存・猿飛　重三（甲賀）
生存・百地　弾牙（伊賀）

現在の賞金：一億÷五＝ひとり二千万円
現在時刻：零時七分

第9話　裸祭り

【８４ｇ】

「おい、代わりを急げ」

わんこそばを頼むように気軽に明るく獣市郎は言い切ったが、ここは蕎麦屋ではないどころか食べ物屋でもない。

この商売が失業者対策として東京都で法的に認可されてから早くも干支は二周半。

ノンキャリアの若者が高給取りとなれるこの一帯、その通称はネオ吉原遊郭。

アダルトな読者にはこれで伝わるだろうし、それ以外には深く説明してはならない、そういう歓楽街。

その店内個室にて、獣市郎の巨体は見合うだけの下の大槍を振りまわし、ノックアウトされた男娼・遊女を量産している。

「食放題（バイキング）コースなんぞ…男のやることではないのう」

獣市郎の熱い野性は自身を暖めるより早く相手の身体を溶かしてしまう。

溶かされた身体はふやけたプリン、男女を問わず半数が気絶し、残る半数が目覚めながらも夢見心地。

「…つまらんのォ」

獣市郎にとっては遊郭での交合も電子ゲームの一人遊びと大差ないらしい。

退屈そうに裸体布団に寝そべり、周りの裸体たちは飢えるように獣市郎の全身に自分たちの全身をあてがうが、獣市郎の大槍は一向に反応しない。

「おのれらの芸は飽きた、暇潰しにもならんわ」

そんな罵倒のような言葉も何処吹く風、裸体の固まりは獣市郎だけを欲してすがりついたが、その中で一対、溶けていない豪腕があった。

「それならば、これでどうだ？」

深くて力強い壮年男性の声に続き、二本の腕が獣市郎に抱きついた。首に。

「…ッァッ…？」

裸で裸を攻め、正確に頸部に肘と腕を差込む文字通りの裸締め。

そういうサービスを提供する店もこのネオ吉原には存在するが、こんな殺しのプロがそういうサービスを提供する店が存在するわけが無い。

「抵抗できるならばやってみるがいい…首だけでなく両肩の関節も同時に極めているがな」

その声が云うとおり獣市郎の腕はほとんど動かず、周囲の裸体たちも未だに正気を取り戻しておらず、まだ獣市郎の全身にこびりついている。

そのまま逆流した血圧に耐え切れず、顔面中の毛細血管が次々と断絶。

獣市郎の眼は充血し、口や鼻からは色々と入り混じった汁が垂れる。

助っ人が来るような状況ではないし、獣市郎は手も足も出ない。

そんな状況に気付きもせず、男女は状況を理解しないまま下半身にすがりつき、ヒートアップする。

それはそうだ。獣市郎の大槍は首から血液が押し戻されているせいか、かつてないほど膨張しているのだから。

どんどん大きくなる。五才児並に…いや、なんといえばいいやら、五才児のモノという意味ではなく、五才児の身長並に肥大化していた。

「…はッ！？」

忍者が気付いたときにはもう遅い。

鉄の棒のようになった下半身の肉槍をピストン運動で耳の横を通して忍者の顔面につき立てる。

溜まらず忍者が離れたところで投げ捨ててあった大槍を拾った…念の為断っておくが、ここで云う大槍はホンモノの大槍のことで、獣市郎のヘリコプター火屯鉞刃だ。

「槍を使って長いが…下の槍で目玉を潰したのは初めてじゃのォウ」

「…俺もだ。そんなもので攻撃できるとは」

そういった男の顔面は額から頬にかけて左半分が大きく陥没し、左目は完全に押し潰されている。

声よりは若く三十台、ガラスのように磨き上げられたその身体は他人を慰めるためでなく明らかに他人を殺すためだけに研鑽されている。

「中々興奮する技だったがの、ここからはもっと面白い遊びをするとしよう」

「望むところ。場所を変える」

人が多すぎて戦いにくいという認識に違いはないらしく、獣市郎はプロペラ状の火屯鉞刃で遊郭の壁を器用に切り開き、ふたりの全裸マッスルは、大街道に飛び出した。

悲鳴が上がる。普通の悲鳴から、男娼とは造りが違うふたつの裸体へのピンクなものも含めて。

「皆の衆ゥ、場所を開けてくれたまえっ、ここに居るのは江戸コロッセオで勇名を浮かせる丸橋獣市朗ッ！　ここにて私、猿飛重三と斬り結ぶッ！」

ここに来て、やっと獣市郎は自分を殺そうとした男の名前を知った。

もっと前に顔合わせの段階で名乗られては居たが、そんなことを覚えているわけもない。

それに名前よりも大事なことがいくつかある、それは未だに重三が全裸だということ。

「…猿飛よ、お前の得物はどうする。忘れたなら持って来るまで待っても良いぞ」
「心配無用、私の武器は目の前のこれよ」
重三がビルドアップポーズを取れば大胸筋が、大臀筋が、ひらめ筋が、上腕筋が、煮えたぎるように揺れる。
「相手にとって不足なし。ならば儂は遠慮なく、空を自由に飛ぶぞ」
「ご自由にどうぞ」
予告どおり、獣市郎は飛んだ。上にではなく前に。
二十一世紀的ＩＨミキサーとでも云うべきか、獣市郎の大槍の刃の超速回転は歯車的小宇宙。
空気との反発による浮力として使えば揚力は五十貫を超える獣市郎を持ち上げ、それが横への移動へ使われた今、アスファルトをえぐりながら進む猛牛のごとき突撃力を実現していた。
回転刃は確実に重三を捉え、手応えも無く切り裂いた…はずだった。
「…いい手品じゃのう、タネも仕掛けも判らんが」
光刃に断てないものは光と影と心のみであるはずだが、すり抜けたはずの重三の身体には傷一つない。
獣市郎の槍の故障ではない…現に逃げそびれた…というか駐車してあったトラックは原型を留めず粉微塵。
「必殺武器を封じたままで攻撃することもできるが、それは男の戦い方ではない。解説させろ」
「解説させてやろう」
「メルシィ。サンキュー…俺の身体は筋密度による天然ヴァンデグラフ発電機であり、その電力を呼吸法によって超伝導体となった血液を通して表皮に送電、ファラデーケージ化しているのだよ」
「なるほど。さっぱり判らん」
「それはそうだろう。説明している俺もよくわかってないんだから。とりあえず静電気を操る。それこそが我が忍法」

意訳すれば、月光に心を動かされることがあっても、月光は辻斬り魔にはなりはしない。

表皮に這わせた電力を電磁シールド代わりに使って拡散すれば、火屯鉞刃の光もただの懐中電灯に成り下がる。

とはいえ、それには視認によって火屯鉞刃の出力を推察し、共鳴させられる電磁バリヤーの電気抵抗数（オーム）に調整しなければならず、機械以上の精度を必要とされる。

つまり、とにかく難しい技なのだ。

「理屈はわからんが、火屯鉞刃は通じないというわけじゃのう」

「いかにも」

「…こう、地味な芸じゃのう」

必殺武器が封じられた男の発言とは思えないセリフだった。

封じられた男は焦りもせずに平然とタケコプターから火屯鉞刃発生器を取り外し、二十一世紀の剛速球投手・田中将大ばりのフォームで振りかぶる。

「ピッチャー、丸橋獣市郎、投げるぞォ」

「…背番号も無いピッチャーか」

「ハダカは男のユニフォームじゃァッ」

「同感だ」

それと同時に剛速球は投げ放たれた。

マウンドとバッターボックス以上の距離があり、野球のボール以上に重く、野球選手以上の反射神経を持つ重三が逃げられないわけがなく、あっさりと殺人球（デッドボール）を避ける。

だが、重三は驚愕したことだろう。躱したそのとき、目の前から獣市郎の巨体が消えたのだから。

「そ〜らーを自由にっ飛ばせてやりたいのォウっ♪」

見失うはずがなかった。数十秒前の両目があった重三ならば。獣市郎の下の大槍による目潰しで隻眼となり左側が死角になっていなければ。

「はいっ、鉄パイプ〜♪」

振り上げた無刃の槍は重三の下顎を捉えて大地から引き離す。
飛んだ。重三が飛んだ。
立った。クララじゃなくて獣市郎の下半身が立った。
獣は唸る。ただの鉄の棒きれに成り下がったタケコプターを振り回し、火屯鉞刃以上の輝きをその瞳に携えながら。
棒振り上げ、棒横薙ぎ、棒突き抜け、棒突き落とし、棒柄返し…宝蔵流にある技や型、我流も含めて獣市郎の腕は止まらない。
「はいっ、はいっ、はいっ、はいっ、はいっ、はいっ、はい、ハイィッッ！」
今、重三はケンダマやピンボールと同じだ。上下を行き来させられ続けるが、それでも地に伏すことは許されない。
「オルァっ、せい、ドォっ、ヲをっ、トォ、フンっ、ぜえっ、ドルォ、ぜりゃァッ、ケェっ、蛾ァ、是ァ、オラオラオラオラ男ラオ羅男羅男羅男

まならない。
「さて…それで次は何を見せてくれるのだ、猿飛よ?」
「…静電気とは、その静けさ故に地面に触っていればそのまま地面に逃げてしまうと聞く」
「…それが?」
重三の眼には明確に死を見据えていた。
自身のではない、目の間の好敵手の、だ。
「お前の負けだ、丸橋獣市朗」
いきなりだった。獣市郎の膨れきった生殖器は射精でもするように内側から青い炎を吹いた。
火炎放射器のような、激烈・強烈な青だった。
「人体自然発火現象。十八世紀から伝統のある古典的な怪奇現象。その原因は様々だが、そのひとつが静電気着火よ」
大槍自体が炎になったような奇妙な光景だった。他部位に延焼するでもなく、ただそれだけが燃えている。
「嬉しいのう、立てなくなっても儂のを立たせるとは…じゃがのう!」
燃え盛る自分の下半身を雑巾でも絞るように捻り、獣市郎は燃え盛るそれを引き裂いた。
勃起によって血袋となっていた大槍を引き裂いたことで、ジェット水流のような出血は炎を押し流すように消し去った。
傷への苦痛からか、勝利の確信か、性的なものか、とめどない興奮を内包した獣市郎の雄叫びがネオ吉原に響き渡る。
「さあ、どうするッ! どうするゥ! 重三ッ!」
何かのサバトなのだろうか。観客となっていた遊女や男娼たちのボルテージも燃え上がり、そして獣市郎の頭部も出火した。
「そこを燃やすだけだが?」
重三が静電気を振り絞って放った二度目の人体発火。獣市郎の口や目からも炎が出る、断末魔すら焼き尽くす業火。
ただ死んでやる獣市郎ではない、先ほどの男根と同じく対抗策は

有る。出血部位の近くを引きちぎり、血流で鎮火するのだ。
火傷なんて気にして入られない。獣市郎は早急に火元の近くに手をやり、一気に引きちぎって思惑通りの大出血。数秒後には消火完了。
――男根と頭部のない獣市郎の全裸死体を夜明けの光が照らし出していた。

ＮＥＸＴ　ＮＩＮＪＡＭＡＮ　霞心居士

第9話　裸祭り（後書き）

四対三

選抜七人
死亡・愛宕橋　蝙也（我流）
死亡・飯篠　土輔（天真正伝香取神道流）
生存・伊藤　幽鬼（一刀流）
生存・松崎　仁（人造理心流）
生存・西郷　流星（山至示現流）
生存・雑賀　凶華（雑賀流炮術）
死亡・丸橋　獣市郎（宝蔵院流槍術）

忍者三派選抜
生存・霞心居士（根来）
生存・猿飛　重三（甲賀）
生存・百地　弾牙（伊賀）

現在の賞金：一億÷四＝ひとり二千五百万円
現在時刻：四時三十三分

第１０話　サイボーグ祭り

【８４ｇ】

九時を回った頃、その忍者は退屈していた。
換気扇の中でカメラを回すだけ。トイレにも行かずにマイクが拾わないように息も殺して当然断食。それでも普段に比べれば退屈すぎる業務だった。
憎いヤクザ連中から撮影を命じられ、カメラを回す名前も明かせない根来流忍者。
今は松崎仁というサイボーグ剣士を撮影しているが、その男はサイボーグである前に昼行灯だった。
「…もう…食えん…」
もう試合が始まってから大分時間が経つが、この男は試合開始とともに三階建ての二四時間営業カラオケボックスにフリータイムで入り、ピザやオムライスを毒の警戒もせずに食べてから、音消した部屋の中でひたすら眠っている。
しかも危険物持ち込み禁止ということでフロントに愛用の火屯鉞刃を預け、丸腰である。
こんな状況で忍者に襲われたらどうするつもりなのか。そう思っているときに、換気扇にもうひとりの人間が現れた。
「…よお、下っ端、元気か？」
換気扇の裏に身体を潜めていた忍者に声を掛けたのは、黄ばんだ覆面をかぶったヒッピー風の男、今回の泥覧試合の根来代表、霞心居士。
「あいつが松崎仁だよな、下忍くん？」
「私は撮影担当です、手助けはできません」
「なんだよ、ケチ臭ぇな、下っ端のくせに」
撮影担当の忍者は、この上役と初めて口を利いているが、随分と

声や口調が若い。二十代…ひょっとしたらまだ十代かもしれない。
命をささげた根来の頭領は確実に年下で、しかもこんなに軽い人種だったことは。
「じゃあ、まあ…いいや。挨拶代わりだ」
霞心居士はボロボロのコスチュームから真新しい紙袋を無数に…大特価と書いてある業務用小麦粉を取り出した。
その袋を遠慮もなく引きちぎり、換気扇から無警戒に軽快に投げ込み、そして根来の至急品、圧縮酸素ボンベも入れていく。
「帰ったら粉塵爆発でググれや」
とっさに撮影担当忍者は換気扇を這い上がって離脱したが、天井が抜けて彼もカラオケボックスまで落下した。
「反撃が来ないな、死んだかな」
撮影担当がカメラを向ければ、霞心居士の姿は既に焼け焦げたカラオケボックスの中にあった。
爆発に晒された松崎は微動だにせず、衣服は焼け焦げ、顔面の人工皮膚がただれて鉄色の内部が垣間見える。
カラオケルームの特性か、大きな音が鳴ってもすぐには人が来ないのだろうか。
「ハイ、ひとり死亡…どうよ、俺の鮮やかなアンサツはよ?」
「…コメントを求めないでください、私は空気として扱ってください」
「忍者のくせに派手な技使ってカッコイイ、とか思ってるんだろ?」
「…別に」
「崇拝していいぜ? 下忍ちゃん」
聞いてもいないことをベラベラと喋り、大げさに身振りをしてみせる。撮影担当の忍者は内心では呆れていたが、そんな日和な感情を跳ね飛ばす声がカラオケルームから生まれた。
「…ああ、延長でお願いします」
能天気な声の主は、爆発に巻き込まれたはずの男、松崎仁…ひょ

っとしてカラオケの時間切れだと思っているんだろうか？
「…ん？　敵か？」
「敵に決まってるだろうッ！　俺は一十一人居士がひとり、霞心居士。根来の代表ッ！」
「…なるほど、では…」
なんで忍者がそんなに堂々と名乗るんだよ…撮影担当はそう思うより速く、反射的にカメラのフォーカスを動かしていた。松崎の残像すら見えない前触れのない攻撃に合わせて。
撮影担当が気が付いたときには、霞心居士は部屋の中に居なかった。
壁に開いた穴を覗き込んだ先にもいない、その先の部屋の壁にも穴があり…いくつ部屋を貫通したんだ。
サイボーグ格闘家というのは多いが、そのパワーやスピードはフルチェーンしても二～三倍程度の出力にしかならないはずだが、今の瞬発力は十倍といっても足りない、速すぎる。
「…それならば、戦うとするか」
松崎はゆったりと自分があけた穴を通り、撮影担当忍者もそれに続いていく。
その先で生まれたての仔馬のモノマネをやっている霞心居士の周りには、既にギャラリーが集まり始めていた。店員やカラオケを楽しんでいた客たちだ。
「っがっは、グア、ッゲッフ…くは、効いてないぜェ～ッ！　吹っ飛ぶってのは…ダメージを運動エネルギーに変換してるってことだからよぉ、全然…効いてねえんだぜッ！」
元から薄汚れていたコスチュームは既に喀血と内臓損傷で漏らした尿で汚れており、やはり生まれたての仔馬のモノマネにしか見えないのだが。
「そうか、ならば…俺も本気を出そう」
いつの間に拾ったかと云えば、先ほどカラオケ内のキッチンを通り過ぎたとき。松崎の手中には既に火屯鉞刃の包丁が用意されてい

る。

「っふ、フハ。そうだ、本気で来い。なにせ俺は…根来の…霞心居っ、わっ！」

能書きを垂れる中、先ほどと同じ瞬発力で接近し、包丁を横一閃。霞心居士はとっさに後ろによけた。

だが、今の一撃、包丁ではなく日本刀だったならば…間合いが足りていれば、確実に霞心居士は死んでいた。

「まあ…こういう…作戦…なんだけどな」

兆（きざし）…“何か”を感じ取ったのか、撮影担当の忍者は懐から圧縮酸素ボンベを取り出して咥え込んだ。

「勉強の時間だぜ、松崎ぃ。

全てのウイルスはタンパク質から成り、そのタンパク質とはアミノ酸という酵素で構成されている…サプリメントなんかで取るヤツだ。

俺は生まれ着いて、一般人より多い種類のアミノ酸を作り出せる…特異体質だ」

誰かに聞いたものを繰り返しているような、取ってつけたような説明だった。

元々人間にはアミノ酸を生み出す機能が備わっているが、生成できないものは食物などから摂取しなければならず、俗に必須アミノ酸と呼ばれる。

霞心居士は先祖返りなのか、生まれ着いて他人よりほんの数種だけ多いアミノ酸を体内で作り出す特異体質を持っていたいが…それ自体は、ミュータントの多い根来では注目にすら値しない屑能力。

「…だから？」

「鈍い野郎だな。アミノ酸ってのはタンパク質の原料。で、その

タンパク質はウイルスの原材料。アミノ酸を操れるってことは新型インフルエンザでも作り放題ってわけだ」

楽しげにケイタイでシャッターを切っていたギャラリーに異変が起きたのは、このときだ。

「…良いのか？　無関係な人間を巻き込んで？」

「俺がウイルス使いなのは事実だが、このウイルスが俺のものだという証拠は？　そもそも風邪を他人に移してそれが犯罪になるのかァ？」

霞心居士は長年の苦行・修行の末、その特異体質の枝に『ウイルス』という花を咲かすことに成功していた。

その話は収録担当の忍者も知っていたが、故にここまで軽い男だとは思っていなかった。

「…なるほど、正論だ」

松崎自身は相も変わらずのマイペースだが、周辺の観客たちは次々と倒れ、絶叫が周囲を包み込む。

他人を巻き込んでも一向に霞心居士には呵責もないようで、むしろ楽しげに忍者的な残虐さを見せている。

「お前は体力があるから発病が遅いようだが…それもいつまで持つかなぁ、気管支なんかが泣き出す頃だぜぇ！」

「…ひとつ、質問があるんだが…」

「冥土の土産は持たせる主義でね。なんでも答えちゃうぜェ～？」

「サイボーグの俺も…風邪なんて罹るのか？」

松崎は先ほどの粉塵爆発で損傷した人工皮膚をカサブタでも取るように剥ぎ取り、自身の時計仕掛けの内腑をさらす。

もちろん、アミノ酸を組み合わせただけのタンパク質で炎症を起こすような、ナイーブな部位は存在しない。

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」
「…」
「お前…本当にバカなのか？」
撮影担当が酸素ボンベを噴きそうになったのを、辛うじて耐えた。
「があああああッ！　俺を…俺をバカにするなぁァああッッ！
俺が、俺を誰だと思ってやがる！　俺は！　俺はッ、俺はァーーッッ！」
懐から火屯鉞刃の斧を二挺取り出すが、霞心居士はへっぴり腰に高すぎる重心の、驚くほどの素人構え。
「…もう眠れ」
松崎は、初動の見えない加速で間合いを詰め、易々と手刀で斧を持つ霞心居士の両手首を粉砕、その流れで肘をアゴに掠めて脳を揺らす。お前など殺す価値もない、そう云わんばかりの簡単な攻撃だった。
「カメラ担当、お前、救急車を呼べるか？」
「私は居ないものとして扱ってください。そのあたりの事後処理にも携わりません」
それ以上に言及はせず、松崎はしょうがないとばかりに苦悶する一般客たちに視線を戻す。
「お前ら、誰かケイタイを貸せ…呼んでやるから」
ほとんどの客が咳き込むゼロゼロ音の中、折り重なった人々の中で、ひとりの中年男性が苦しげに上半身を起こし、自分の携帯電話を差し出した。
「人数分呼べるかは判らんが、とにかく借りるぞ」
倒れた人々を踏まないようにしているせいか、単に松崎の性格かは分からないが、スローモーな動きで松崎が歩み寄る。
だが、それだけゆっくり歩いている間に気力が尽きたのか、その中年男性は倒れこみ、松崎はとっさに受け止める…それがいけなかった。
「…ッ？」

抱きとめて分かったのは、服越しに感じる細身の肉体に凝縮された肉と骨、戦士の身体。

松崎は抱きとめた直後、反射的にサイボーグの腕力で突き飛ばす。撮影担当が疑問を感じる間もなく、中年男性は悠然と着地して見せた。その姿はインフルエンザで苦しむ一般人のそれではない。

「…伊賀か甲賀の代表か…？」

「いいえ、根来ですよ…ご挨拶が遅れましたね、私が一十一人居士がひとり、霞心居士です」

いいつつ、先ほどまで松崎と戦っていた頭の悪い男から覆面を剥ぎ取り、自分が被ってみせる。

剥ぎ取られた男はいかにもチンピラといった風体で、半笑いの表情で意識を失っている。

「…ふたり居たのか？　根来代表は？」

「僭越ながら講釈をお許しいただけるならば、松崎様。

レトロウイルスの中には、腫瘍を発生させるものがあり、それがもし脳ならば様々な弊害が出ます。

例を挙げさせていただけるならば、人格障害…自分が根来忍者の霞心居士だと妄想することもあるのです」

気付くべきだった。

先ほどまでの男の身のこなし、言動は明らかに忍者のそれではなく、ただの気狂いの男だった。

「無関係の人間の頭の中に腫瘍を作り…洗脳…そういう寸法か？」

「これはこれは。元新鮮組の隊士とは思えぬ言葉。証拠がなければ…罪と罰という言葉も発生しえないのですよ？」

忍者的すぎる物言いだった。

「…ならば…ここからが本当の勝負というわけか」

松崎は立ち上る興奮を抑えられないといった風で、倒れた店員を踏みつけながらカラオケに預けていた愛用の火屯鉞刃を取り戻し、青眼で構えて見せる。

「ウイルス使いと戦うのは初めてだ。手合わせ…頼むぞ」

己を高めるためだけに生き、生身の暖かさを捨て、冷たい鋼鉄の肉体を得た男は静かに刀からコードを引きずり出し、手の平にあるプラグを繋いだ。

その使い方は泥覧試合においては一度も披露しておらず、霞心居士も見たことがない。

「…なんですか、それは？」

「雑賀との戦いで使おうと思ってた…ちょっとした奥義だ」

云ってから、松崎は愛用の火屯鉞刃を腹部に押し当て、そこで刃を発生させる。ハラキリ、切腹のように見えた。

「…え？」

光刃が松崎の胴体を貫いているのは間違いないが、それでもサイボーグである松崎は死なない。

こんなことをしても、さっき食べたピザやらなんやらが火屯鉞刃で蒸発するだけだ。

腹の中で租借されて噛み潰されたピザは火屯鉞刃の熱によって気化し、それで留まらずにプラズマ化、消火する前に昇華する…それだけのはずだった。

だが発散されたプラズマは消えることはなく、静かに松崎の周囲に留まり、蓄積していく。

「この現象は…まさか…火屯鉞刃で、レーザー核融合…発電…ッ？」

「ちょっとした奥義だと、云ったはずだな？」

核融合とは水素などの軽い元素を合体させてエネルギーを生み出す理論。

プルトニウムといった重元素から核を取り出して発電する核分裂をも超える。究極的には太陽並のパワーを得ることもできる宇宙最大の発電方法のひとつ。

だが、核同士を融合するには膨大なエネルギーが必要であり、原子力発電全盛の二十一世紀では核分裂で生み出したエネルギーで核融合する、という面倒な方法を使っていた。

そんな遠まわしな方法から、簡略化したのが我らが日本のレーザー核融合…だがしかし。

「ありえない、火屯鉞刃の光とレーザーとでは根本的原理が違う、違うはずです」

「…俺が科学者なら原理も知っているんだろうが、俺は剣士だ。これが技で、これが強さになる…それだけ判ってればそれでいい」

人間が飲食するものには多少なりとも水素が含まれている。

松崎は食事によってその水素を抽出して腹の中で圧縮して重水素を作り出せる…この時点で人間技、というかサイボーグでも出来る技ではない。

その重水素を火屯鉞刃の、もっともレーザーと近い性質を持つ先端部分でナノセンチ単位の誤差もなく貫くことで核融合を起こし、その電力を太陽の紅炎（プロミネンス）のように纏っているのだ。

ありえない事実に霞心居士が我を忘れた一瞬、周囲の空気と化学反応によって松崎に後光が差した。その姿は鋼鉄の仏。

「コォオオオオ、ロォオオオオ、ナァアアアアッッ！」

「ここ、笑うところですよね…？」

「…笑えないですよ」

あまりの出来事に我を忘れて尋ねた撮影担当の忍者の質問に、霞心居士が苦笑いをしているのは声だけでわかった。

松崎が腹から抜き取ったときには、既に火屯鉞刃はどんどん長さを増していた。

刃の大きさ＝発生させているビームの量に等しい火屯鉞刃は、日本刀の大きさを越えた辺りから急激に消費バッテリーを増す。

包丁大なら乾電池で何年か持つが、十メートルを悠々と振り切り、抜き放っただけでカラオケの壁は大きく蒸発するほどのその刃の消費電力は既に一個人が持ちうる武力ではない、それは既に一国家を脅かせるだけの軍事力だ。

「…お前がインフルエンザをばら撒いていて助かった…人間が全員伏せているから…振るえるぞ」

戦闘の高揚に比例して、松崎の口数が増えているのが判る。そしてそれは手数にも対応している計算式であることを忍者たちは事前に調べたデータでわかっている。

「やるぞ、獅子明王（ししみょうおう）」

コード越しに自分と繋がった文字通り一身同体、人刃一体の愛刀を振るう。

触れれば両断、いや肉体そのものが蒸発されて消えてしまうだろう。なにせ刀の身幅が松崎の肩幅よりあるのだから。

「やるぞ？」

返事も待たずに、松崎が刀を振り上げた瞬間、カラオケボックスは左右でちょうど二分割、空まで見える開放感のある見通しのいいお店に変わった。

辛うじて霞心居士は跳んで避けきっていたが、松崎は返す刃で切り捨てる。するとなんということでしょう、先ほどの両断と合わせて“卜”字の劇的なビフォーアフター的に開放感たっぷりの大穴がカラオケボックスに開いた。

「コォオオオ、ロォオオオオ、ナァッ！」

松崎の雄叫びに続いて、電撃が地を這って飛んで行く。剣に注ぐだけでなく電力をコントロールしている…甲賀の猿飛重三は生身で静電気を操作していたが、原理的には似た技術なのだろうか。

「電撃に大刀に剣術…今のあなたは…雑賀凶華であろうと誰だろうと対抗はできないでしょう」

「…諦めたのか？」

残念そうに松崎は落胆をあらわにした。

「ええ、今のあなたには私では勝ち目がありません…もう終わらせていただきました」

重厚な音を立て松崎がを包み込んでいた光が霧散した。

消え去ると同時に、膝を突き、四つんばい…そのまま豪快に仰向けになった。

「…なんだ？　なにをいっているんだ？」

「“溶けて”きているんですよ、あなたが」
松崎はブレイクダンスを踊るように手足をバタつかせて床や天井、インフルエンザに冒された一般人に手足をぶつけていく。
その目はギョロギョロと動き回り、口と鼻からは吐瀉物が湧き水のように垂れ流しになっている。
「先ほど触ったときに松崎様にお譲りしたのは、ウイルスともいえない低次元のタンパク質、その名をプリオンといいます。
レプリカとはいえ実物以上の対人効果を発揮すると自負しておりますが、松崎様の唯一の生身である脳を溶かし…月並みな表現を許していただけるならば…スポンジのようにスカスカにしてしまいます」
「がふ、ガは、べへ？」
陸に打ち上げられて死に掛けている魚のように、松崎は腹を天井に向け、視線は定まらない。
「来世は脳も鉄製にしておくことをお奨めし、今生ではこれでお別れです」
その定まらない頭部に霞心居士は踵を押し当て、空き缶を潰すように容易く、頭部を踏み潰した。
「救急車は私が呼んでおきますよ、あなたの代わりに…あなた以外の分を…ね」

NEXT　STAGE　裏路地

第１０話　サイボーグ祭り（後書き）

三対三

選抜七人
死亡・愛宕橋　蝙也（我流）
死亡・飯篠　土輔（天真正伝香取神道流）
生存・伊藤　幽鬼（一刀流）
死亡・松崎　仁（人造理心流）
生存・西郷　流星（山至示現流）
生存・雑賀　凶華（雑賀流炮術）
死亡・丸橋　獣市郎（宝蔵院流槍術）

忍者三派選抜
生存・霞心居士（根来）
生存・猿飛　重三（甲賀）
生存・百地　弾牙（伊賀）

現在の賞金：一億÷三＝三千三百三十三万三千三百三十三円
現在時刻：九時十三分

第１１話　真昼祭り

【８４ｇ】

猿飛重三は太陽に誘われて、体と心に重さを感じつつも眼を覚ました。

眠る前、丸橋獣市郎に折られた骨は自らの手で、麻酔なしで切開、樹脂リベットで接合し縫合、破裂した眼球や内臓はボルタレンで痛みを止めて放置。

そして、衰弱した体力を取り戻すために馬肉を喰ってからひたすらに眠る…そう、眠っていた。処置をしてから今まで…東に有った太陽が真上に来るまで。

「…左足は…やはり無理か」

完全骨折ならば繋ぎ合わせれば動きはする。だが不完全骨折の類はそうもいかない。

全体的に脆くなっており、リベットやボルトを打ち込めばそこから割れることも有り、満足な補修はできない。

だが、それでも重三の行動には変わりはない。満身創痍、戦う準備なし、死合うには問題あり、用意は不万全、されど行かねばならないときがある。

「…待たせたな、伊藤幽鬼」

背後に感じる剣士の気配。

姿は見えないが、この気配は伊藤幽鬼だ。神道巫女を髣髴とさせる小袖に袴姿の引き分け専門の女。

ちなみに重三は獣市郎と戦ったときのまま半裸×半裸、とどのつまりの全裸で、武器は体内に隠し持った火屯鉞刃が一本だけ。

重三も剣は使えるが、使える程度の剣力では、一刀流を修めた幽鬼には文字通り太刀打ちできない…時間を稼がなければならなかっ

た。

「伊藤幽鬼、ここで戦えば一般人に被害が出るやもしれん、場所を変えるわけにはいかんか？」

その問いかけに、静かに幽鬼は姿を現した。いつもコロッセオで着ている白装束。

「ご安心ください、私には戦う意思はありません。私はこの戦いを終わらせるために来ました」

「…理由を聞かせてはもらえるんだろうな？」

伊藤幽鬼が引き分け専門に戦う穏健派のコロッセオ闘士剣士であることは周知の事実。

そのことは重三もテレビで幽鬼の試合を見て知っているし、事前に交付された資料でも裏付けている。

だが、忍者一人を殺せば一億円という今回のボーナス報酬は、人間の生き方を簡単に変えるだけのパワーを持つ。

真意はこの際はどうだっていい。まずは話を引き伸ばさなければならない。

「不毛です。研鑽練磨した剣力を暴力として戦う…何の意味があるのですか、おカネになんの価値があるのです？」

「価値とはカネに置き換えなければ客観的とはならない。自転車操業にすらなっていない日本を護るには俺たちは極道に頼るしかないのだからな」

「どうして…救国におカネが必要なのですか？」

眩しいほどに純粋さだった。

美しい花を咲かせるために雑菌だらけの肥料を撒くことを疑うような、無垢すぎる瞳。

「…仮に…日本の領空の先…静止軌道上に、天然プルトニウムを含む…いや、ほぼ百％純度のプルトニウム小惑星があるとしたら…どうだ？」

「え？」

「その小惑星は日本経済を救えるマネーソースだが、破壊に使え

ば地球だけでなく、火星や月といった人類圏を壊滅できるエネルギー…。

それが中国のテロリストどもに占拠され、その衛星には日本政府が設置していた高出力の火屯鉞刃バリヤーが常時展開。

その中に突入するには、同じく高出力の火屯鉞刃バリヤーを張れる宇宙バイクが必要…判るか、宇宙に行くためには極道に尻尾を振り、カネを出させる必要がある」

「…それで…どうして私たちを殺さなければならないのです？」

「簡単だ。伊賀・根来・甲賀、それぞれにコロッセオ闘士を殺した数だけバイクが与えられる。そういう契約になっている。

すでに俺は丸橋を殺しているから一台は内定だが…甲賀忍者とはいえ、ひとりでテロリストを鏖殺できるかはわからん…だから、まだお前たちを殺さねばならん…！」

「…本当…なんですか？」

疑うだけの頭は持っているらしい。

平和であることが当然の権利であると思い込み、他者の犠牲の上に成り立つ平和だと気付きすらしない羊よりはマシと重三は思った。

それと同時に、重三にとっては信じようが信じまいがどうだってよかった。伊藤幽鬼を殺す準備は整っているのだから。

「ん…？　この…気配は…？」

幽鬼も気が付いたが、すでに逃げる時間はない。

『お待たせしました、猿飛様ッ！』

「待っていたぞ、お前ら」

合唱は幽鬼の頭上、電信柱からだった。

二十一世紀からほとんど変わっていない、コンクリートでできた本体に黒い電線。鳥たちの憩いの止まり木。

だが、今の電信柱には鳥ではなく、柿色の忍装束に身を包んだ九人の少女が蝙蝠のように吊り下がっていた。

「舞い散る人命、咲き誇るは刃の華。甲賀忍軍、鎌乃百合（かまのゆり）」

「繰り出す拳は無限・無間の大煉獄。六道に堕ちてゆけ。甲賀忍

軍、望月六花（もちづきりっか）」

「下る天罰、下す随行者。甲賀忍軍、筧十重（かけいとえ）」

「人を穿てば穴二つ、呪いを祝え。甲賀忍軍、穴山小弧（あなやまここ）」

「伊賀から甲賀へ冴え渡る才気煥発。甲賀忍軍、霧隠才那（きりがくれさや）」

「海の底には墓標あり。甲賀忍軍、三好大海（みよしひろみ）」

「海の底には情愛あり。甲賀忍軍、三好空海（みよしくうかい）」

「爆発々々、必殺々々、稲妻重力大落下。甲賀忍軍、海野陸（うみのりく）」

「この乙女、肌を合わせば謡うその歌、四面楚歌。甲賀忍軍、根津心（ねずこころ）」

『甲賀忍軍精鋭、真田獣幽士、ここに登場ッ！』

現れた九人は柿色の忍装束と美女であるということだけは共通しているが、手にする武器や年齢はまちまち。

それら全員、幽鬼に対して攻撃を仕掛けるべく牙を剥いている。

「甲賀の代表は…猿飛さん、あなただったのでは？」

「証拠は残さんさ。今、撮影に当っていた伊賀忍者のカメラは俺が静電気で壊したし…俺たち甲賀の隠蔽工作から証拠を造れるほど伊賀は汚れてはいないからな」

重三の不適な笑みに、幽鬼は泣き出した。

死を目前に恐怖で泣いている、というわけではない、悠然と立って相手に対する同情で泣いているのだ。

「本気ですか、皆さん？　そんなことをしてまで…私を殺したいと云うのですか？」

ルールを破って、多勢で自分を殺そうとする相手の荒んで追い詰められている心に対する綺麗すぎる涙だった。

そんなもので揺らぐほど重三は人間的ではない。幽鬼を光のような純白に例えるならば、重三もまた闇のように原始的なまでの黒なのだ。

「全ては日本と甲賀のためよ…さあ、死ぬがいい、伊藤幽鬼」

鮮血が舞った、何の抵抗もできず、彼女は命を散らした。

「…え？」

突如として、彼女は電線から落ちた。
真田獣幽士のひとりである霧隠才那は糸の切れたテルテルボウズのように裏路地に血を撒き散らした。
「皆さん、逃げてください、狙撃です！」
云われるまでもなく、全員が己の忍術を駆使して防御を整える。
テロメア操作による無限再生、超電磁技術を応用した超加速、歌声の分子振動によるバリヤ、バイオボーグ技術による脳の移動。だがそれらは無駄だった。
独力での大量殺戮（ホロコースト）を可能とする彼女たちは、絶対急所をたった一発の弾丸で打ち抜かれ、大地に散乱する九つの肉の塊と変わり果てた。
「なんだと…」
幽鬼は、ただひとり生き残った重三の前に立ちはだかり、火屯鉞刃を振るっていた。
一振りするたびにするバターが蕩けるような異音がする。それは弾丸が空中で溶けるときに発生する独自の音であることに重三は気が付いていた。
同僚の女たちに開いた穴に目を向け、重三は今現在の信じがたい状況の答えを知った。
「この弾痕はブラックタロン…雑賀凶華か」
「他にいないでしょう、これだけ離れた距離から…人の命を奪おうとする女なんてっ」
着弾の入射角から、ふたりは狙撃手のいる位置を突き止めていた。それは二十キロ先の第三東京タワー、もちろん人間ができる狙撃距離ではない。
だが、それよりも重三の脳内には別の疑問が錯綜している。
そんな長距離の狙撃を、伊藤幽鬼はいかようにして止めているのか、そして、なぜこの女は敵である自分を守るように弾丸を止めているのか。
弾丸を防ぐには弾道に予め障害物を置いておくしかない。

剣で弾丸を叩き落すだけなら三派の忍者にもできる人間は多く存在するが、それは『視界の中に狙撃者がいる場合』に限られる。

今のように、遠距離からの狙撃には対応できるはずがないし、できたとしても重三を守る必要性は全くない。

「雑賀が…ミス待ちにでました。私の夢想剣は完璧ではないことを…雑賀は知っているようです」

「ムソウ…ケン？」

「僅かにタイミングをズラして三丁のライフルを使っています。夢想剣ならば察知はできますが…一本の火屯鉄刃で三発の弾丸を止めることは難しいものがあります」

夢想剣。幽鬼が学ぶ一刀流の奥義で、重三が聞くところによると無我の内に敵意を持つ相手を断つ秘技だと聞くが、いくらなんでも視界の中に居ない相手の殺意まで読むなんてことはありえない。

だが、実際にやれている。止めている。幽鬼は弾丸を察知している。

量子力学的な話をすれば、人間が思考する度に異なる思考をした平行宇宙が発生する場合があり、人間の脳にはその量子レベルでの変化を捉える機能が備わっているという。

幽鬼の夢想剣を噛み砕けば、量子レベルで人間の感情の揺らぎを察知し、それを物理的に避けている…とでも解釈するしかない。

「…敵に助けられる覚えはないぞ」

「助るのは私の勝手です」

「その助けるというのがお門違いだと云っているのだ」

そのときになって、やっと幽鬼は気がついたらしい。重三の腕がコンドームの自販機のコンセントプラグまで伸びていることに。

「甲賀流忍術。アスファルト返しっ」

重三の口からほとばしった雷光は、撃ち込まれた弾丸をアンテナにして蔓草のように地を這う。

電熱は、火屯鉄刃で弾丸を溶かすのと同じような音を立て、アスファルトに大人がふたり通れるほどの穴を開け、そこに大人三人分

はある重三は身体を折りたたんで入っていく。
数秒後、銃撃が止み、攻撃の気配も無くなってから幽鬼は穴を覗き込んだ。
中は真っ暗で見えないが、涼やかな覚えの有る風が吹き出していた。
地下鉄だ。幽鬼が覗き込んだとき、ちょうど真下を地下鉄が通過している。
幽鬼は淀みなく流れるメトロに重三の無事を確信し、静かに第三東京タワーを睨み付けた。

ＮＥＸＴ　ＳＴＡＧＥ　大病院

三対三

第１１話　真昼祭り（後書き）

三対三

選抜七人
死亡・愛宕橋　蝙也（我流）
死亡・飯篠　土輔（天真正伝香取神道流）
生存・伊藤　幽鬼（一刀流）
死亡・松崎　仁（人造理心流）
生存・西郷　流星（山至示現流）
生存・雑賀　凶華（雑賀流炮術）
死亡・丸橋　獣市郎（宝蔵院流槍術）

忍者三派選抜
生存・霞心居士（根来）
生存・猿飛　重三（甲賀）
生存・百地　弾牙（伊賀）

現在の賞金：一億÷三＝三千三百三十三万三千三百三十三円
現在時刻：十二時二十一分

第１２話　風祭り

【８４ｇ】

「おはよう。弾牙くん」
「…おはよう、お姉さん…」
言葉だけを見れば朝目覚めただけの姉弟という風だが、実際には何一つ符合しない。
まず、今は九時は九時でも朝ではなく夜、このふたりも家族ではなく、ここは都立の大病院。十の病棟が立ち並ぶもっとも大きな病院だ。
その病室のベッドの中、弾牙が目を覚ますと隣には、目玉だけやたらに大きい小顔があった。西郷流星だった。
「…ずっと…いっしょに居てくれたの…？」
「一緒に寝てた、ってのが正しいわね。ちょっと眠かったから」
まだ眠たそうな目をこすり、ベッドの横に立てかけていた愛刀と衣類に手を伸ばす。
ちょっと眠かった人間が上着とズボンを脱いで下着姿で深夜から夕方まで爆睡するのだろうか、火星では。
「…ありがと、お姉さん」
「ん？」
「一緒に…居てくれて」
十九才という年齢で公務員忍者ということに流星は驚かされたが、今の表情の年齢的なギャップはそれ以上だ。
小学校にも上がっていない純度百％の少年、そんな笑顔だった。
「あたし、彼氏は募集してるけど…年上限定、あと、あたしより強い人だけだからっ！」
「？…ぼくは年上のお姉さん、大好きだよ？」

流星が自分で何を云っているのか判らない発言を、弾牙も判らないままました意見で、また流星はわけが判らなくなっていた。
「と、年上…年上だから…なにか飲み物買って来るわねっ、何がいい？」
「コーヒー、お砂糖とか牛乳の入ってないやつっ」
点滴のチューブをわずらわしそうにしている右腕を切り落とされた男に笑顔で見送られて、右腕を切り落とした女は紅潮しながら病室を出て行った。
「なんだよぉ、あたしっ」
自販機を見つけるまでに自分が何に動揺しているのかを整理する…そんな考え事をしているときに限って簡単に自販機とは見つかる。そんなマーフィーの法則。
五百円玉を投入口に押し込み、ブラックコーヒーをひとつ押し、オレンジジュースに手を伸ばすが、思いとどまって弾牙と同じコーヒーを押した。
「ねえ、甘えていい？」
回答を待たずに、その声の主は既にオレンジジュースのボタンを押していた。
流星が振り向けば、そこに居たのは黒ずくめの火器使い、雑賀凶華だった。
あとから来た松葉杖の青年に自販機の前を譲り、凶華と流星は入院患者用の椅子に腰を下ろして、それぞれの飲み物を揃って一気飲み。
「ちょっと焦ってるのよね。あと三時間切ってるに、ひとりだけ当った甲賀にも逃げられたから。あなたは？」
「あたしは伊賀とだけ戦いました」
「結果は？」
「殺しては居ないけど、あたしもこの通りです」
満足そうに凶華は飲み終えた空き缶をゴミ箱に投げた。バスケのフリースローのように的確に、吸い込まれるようにゴミ箱にスリー

ポイント。
真似して流星もやってみるが、フチに嫌われて廊下に落ちる。
「ＯＫ。忍者から逃げるのはいいけど、間違っても殺さないでね」
「ああ、ボーナスの件です？　いいですよ、別に」
あっさりと了承した流星に、凶華は目を丸くした。
「…へえ、おカネ、嫌いなの？」
「嫌いじゃないけど、好きでもないですね。必要な分だけあればいいから」
云いつつ、流星は立ち上がって転がっている空き缶をゴミ箱に入れて、カネを入れて二度ボタンを押す。今度は両方オレンジジュースだ。
「人殺しは好きじゃないの？」
「知らない。やったありませんから」
「…じゃあ、約束したわよ？　忍者と戦っても殺さないでね」
「凶華さんは、人殺しとおカネ、好きなんですか？」
「両方、嫌いじゃないわね。あと何か知らない？　誰が生きてるとか、誰が死んでるとか。ネットとかでも流れてるけど信憑性がなくてね」
云いながら自分のケイタイのモニターを見せる。そこには誰が忍者三人を既に返り討ちにしたとか、戸隠流忍者が乱入したとか、誰が誰かをレイプしただの、そんな情報が紹介されていた。モノによっては動画付きで。
エログロ画像を眺めつつ、ふたりは平然とオレンジジュースを飲む。
「それだったら…蝙也さんが伊賀に倒されました、首を刎ねられて」
「へえ。アイツ、死んでたんだ。飯篠はあたしがアレしたし、伊藤は昼までは生きてた…そうなると判らないのが松崎と丸橋だけど…。
あたしが会った甲賀がもうダメージを受けてたし、感じからし

てどっちかは死んでるわね」

「それでしたら答えは明白、松崎さまは私がお相手したので、甲賀の猿飛さまと戦ったのは丸橋さまですよ」

現れたのは、薄汚れた麻の服と仮面を被った怪人。

「霞心居士…ッ！」

凶華にその名を呼ばれ、その根来忍者は深々と頭を垂れる。

「お久しぶりです、雑賀凶華さま」

「――約束よ、この戦い、譲ってもらうわよ、西郷」

流星が一歩下るが先か、凶華の腕の中にはリボルバー拳銃が現れている。アメリカンなメタリックブラックに短い銃身。

その実はスイスとドイツが世界に誇る名門シリーズが出した七番目の八連装リボルバー、ＳＳＳ－７７。

日本ではシザースの愛称を持つ市販拳銃、凶華はその銃軸を一周させ、弾丸を八発とも吐き出しきる。四×二で八、四肢にそれぞれ二発ずつ。

それぞれが肘や膝に肩、関節に刺さる。仮に痛みに耐えたとしても、弾そのものが“くさび”になり、関節は動かなくなる。

「おや、アタマを狙わないんですか？」

「ふざけんな、ウイルスが詰まってる血袋なんか撃つか」

ウイルスによって他者の脳髄に腫瘍を作り、その腫瘍の圧迫によってツボマッサージのように記憶を操作する、それこそが霞心居士の専売特許。

恐るべき能力を前にしながらも、雑賀凶華は知り尽くしたホールを解説するプロゴルファーのように、何の緊張もない。

「おやおや、影武者とは人聞きの悪い」

「今、あなたが倒した方が霞心居士ですよ」

「だけどね、ぼくも本物なんだよ」

「そう、あなたも霞心居士…私も霞心居士です」

「やっぱり、私だねっ」

ぞろぞろと同じ覆面を被った集団。声や体格からして女に子ども、

老人まで。
覆面以外は服装は白衣だったりパジャマだったり、入院患者や医者、看護師に清掃員…どう考えても無関係な一般人だが、それでも凶華は予想していたらしくビビらない。
火屯鉞刃の医療用メス、食器のフォークとナイフ、文房具のハサミ、徒手空拳、クマのぬいぐるみ、各々が凶器を振りかざす。
「当たり前だが、本物以外は何の罪も責任もない一般人だ。盛り上がった客がリングに上がった…よくある話だな？」
「Ｆ１のレースで観客が勝手にコースに入ってきても…それを轢き殺しちゃってもしょうがないわよね。クズ野郎」
雑賀は愛用のダマスカス模様のボウィナイフを下手に構え、霞心居士軍団に向かっていく。
対する軍団は、素人丸出しの構えで各々の凶器で迎撃していく。
「クズってのは心外だなぁ、合理的な戦術じゃないか」
「そのことを云ってんじゃないわよ」
パジャマにオモチャの剣を構えた一番背の小さい霞心居士を足払いで転ばせ、凶華は容赦のない肘打ちで昏倒させる。
もちろん本物ではない、自分が霞心居士だと文字通り病的に信じているだけの子供だ。
「てめえと離婚したことを云っているならお門違いだ。俺たちの息子は死んだんだよ。息をしているだけの物体のノスタルジイに付き合ってられねーよ」
次に迫ってきたのは、工業用の火屯鉞刃のスコップを構えた大柄な男の霞心居士。実体剣では火屯鉞刃は止められない、ならばどうするか。
「別に気にしてないよ、ただ…」
怯えもせず、平然と凶華は足を振り上げた。ビームを発生させている柄の部分を狙って蹴り上げる。
ビーム以外の部分を狙う、ビーム兵器戦闘の基本であり極意だ。
「ただ、あんたのことが嫌いってだけよ」

白衣の霞心居士が左手に医療用高濃度酸素ボンベを構え、右手にはライター。お約束の即席火炎放射攻撃。

それを凶華は避けるでもなく受け止めて、何事もなかったように燃え立つ身体で関節に弾丸を埋め込むルーチンワークを続行する。

燃える拳を、燃える蹴りを、操られている自称霞心居士たちに叩き込んでいく。

「都合がいいわ、これで私はファイヤー・キョウカッ！」

炎を着たまま暴れまわる凶華の蹴りは、頭突きは、鯖折は、焼鏝（やきごて）のように霞心居士たちに消えない傷を付け、ノックアウトしていく。

「な、なんで…！？」

霞心居士のひとりが呟く。ありえない。炎の攻撃というのは人類有史以来の集団を相手にするときの切り札。それはわかる。

だが、燃えているのだ。凶華の身体も炎に炙られ、煙硝を上げて火傷を広げている。

「動けるわけがないだろう、戦えるわけがないだろう、それでッ！」

これで凶華がサイボーグだとか、バイオボーグだとか、耐火能力を持つミュータントだとか、空想科学的な説明のある超人だというならわかる。

だが違う、凶華の肉は食欲と恐怖を刺激する臭いを出しながら焦げていっているのだ。

「…この辺かしら？」

恐怖と疑問に支配されている霞心居士軍団に向け、凶華は着込んでいたジャケットを投げつける。

もちろんジャケットには無数の火器が忍ばせてあり、それは炎の熱で暴発寸前、というか暴発した。

文字通りばら撒かれた弾丸は霞心居士たちを倒し、何発かは凶華の身体を掠めた。

幸運なことに、この戦いを観戦しているギャラリーは居なかった。

他のコロッセオ闘士の戦いは、非現実的で感覚を麻痺させるもの

がありギャラリーの感覚を麻痺させていたが、これが雑賀凶華だ。
戦いを見ているだけで命の保障はなく、現実的に死の臭いをさせ、重傷者を量産していく。
あるときは病室に飛び込んで攻撃をかわし、あるときは病人の居るベッドを盾にする。
巻き添いを増やし、怪我人を量産し、燃えている身体で、文字通り戦火を広げていく。
「…どうしてそこまで戦う！　あのとき、“あの子”は死んだ！　あれはただ息をしているだけです」
弾丸をなんとか潜り抜けた霞心居士が三日月型の火屯鉞刃を振るいながら問い掛け、それを雑賀はガゼルパンチで撃墜。
「あんたが諦めるのは勝手よ。でもあたしは諦めない。あたしは…もうあんたの女（モノ）でも弟子（どうぐ）でもない」

雑賀が色んな意味で火照った身体に医療用の生理食塩水やら飲み薬やらを次々とかぶって消火した頃には霞心居士はたったひとりしか残っていなかった。
普段ならば、待たされている患者が行列を作っている、やたらに広くて椅子だけがゲシュタルト崩壊を起こしそうなほどに直列している待合室。
「安月給の根来じゃ、あの子に息をさせることもできないのよ」
云いながら凶華は顔面をフルフェイスのマスクをかぶる。
現在の病院では、ＡＥＤと同じぐらいの頻度で対ＢＣ兵器用の防ウイルスマスクが置いてある。
完全に雑賀は霞心居士の能力を理解していた。
霞心居士が使えるのは、松崎を殺したように直接触ってウイルスを注入する接触感染、自身の呼吸によって空気をウイルスで汚染させる空気感染のふたつ。
防毒マスクさえしていれば、霞心居士の忍術は封じられる。

「…アレに息をさせるために、あなたは根来を捨て、私からも離れたのですか？」

ただひとり残った霞心居士の声は、松崎を殺したあの中年男性と同じだった。

「あんたが一番あたしをイラつかせるのは、あたしを説得できると勘違いしてる所よ」

凶華と霞心居士、同じ二丁拳銃、全く同じ八連装のシザースの拳銃、同じ構え、同じ闘争本能、異なる戦闘動機で対峙する。

「雑賀流砲炮術をあなたに教え、育て上げたのは私だということをお忘れなく」

互いに相手の銃口を視界の端に捉え、相手の弾道を読んで撃つ――つまり。

「先手は私が頂きますよ」

霞心居士の拳銃が火を噴いた。凶華はその弾道と自分をさえぎる位置に撃ち、弾丸と弾丸を当てる。もちろん人間業ではないが忍者業としてはまあ凡庸といえる。

互いがこの技を使えるならば、肝は弾丸に弾丸を当てた後だ。その弾丸がまだ空中にある内に次弾を撃つこと。

こうすると、弾丸が浮かんでいる位置は、スペースインベーダーのトーチカのように互いの弾が通らない“安全地帯”となる。

浮遊する弾丸に新たな弾丸を掠めさせて自分に有利な位置に動かしつつ、相手を銃撃する。これを二丁拳銃の十六発を撃ち終わるまでの三秒ほどの間に行う。

弾丸によるチェス、空中の弾丸の動きも含めて刹那の間に考察し、相手の弾丸を受け止めつつ、相手に攻撃する。

その応酬の末、膝を折ったのは凶華だった。

「…そんな…？」

「…その程度で、私を…根来を超えられると御思いか」

凶華が受けた弾丸は一発。

頬を抉って右耳にできた大きすぎるピアスホール。もちろん防毒

マスクを貫通して。その弾は弾丸チェスで一度は防いだものの、霞心居士が当て直して軌道修正したものだった。

「まだ他に殺さなければならない相手が居るので、次は拳銃ひとつで行ってさしあげます」

歩み寄ることもせず、次なる拳銃をボロ雑巾のような服から取り出す。弾丸を補充するのではなく銃そのものを取りかえる。凶華も用いる独特の戦い方。

凶華は空ろながら二挺の拳銃を取り出したが、一挺しか拳銃を出していない霞心居士はそれでも余裕然としている。

脳腫瘍で量産した霞心居士との戦いで換気扇が止まり、霞心居士が蔓延させたインフルエンザウイルスを含む空気を吸った凶華の虚ろな視線は、もはや霞心居士を捉えていない。

「あなたは十六発、私は八発…本物のチェスで云うならポーンだけで戦うようなものですが、高熱で目も見えていないあなたなら、簡単に殺せそうだ」

霞心居士は右手の拳銃を静かに構えて引き金を絞る。

「いやぁ、無理でしょ、莫迦師匠ッ！」

凶華は素早く立ち上がり、十六発の弾丸で霞心居士の弾丸を迎撃した。

技量では霞心居士の方が上でも、なんぼなんでもチェスではポーンだけで勝てるわけがない。

凶華の弾丸は安々と霞心居士の弾丸を突破し、霞心居士の両足に叩き込まれた。

「“ファイヤーキョウカ”なんて云いたいために燃えてたと思ってた？」

やっと霞心居士は気が付いた。先ほど凶華が消化のために被っていた大量の薬剤、その中にあったエタノールの存在に。

エタノールはシンプルな消毒剤だが、それ故に効果は絶大、頭から被るついでに口や鼻にもしっかりと含んでいた。

「マスクだけであんたの雑菌攻撃を防げると思えない性質でね。

あたしは」

「お前…分かっているのか、私のウイルスを防げるほどのエタノール…飲んだのかッ？」

その殺菌能力ゆえに、エタノールは人体には有害。

入手難度およびその殺傷能力の高さから、あるミステリー作家は模倣使用を避けるためにあえて使用を控えるほど。

「吸収されるまでには時間が有るわ、あんたを殺してから吐き戻すわよ」

云いながら、凶華は手洗い用のエタノールを霞心居士に投げ掛けた。

すごく大雑把に、文字通り汚物に対してそうするように殺菌を済ませていく。

「希釈してないエタノールだから、あんたがアミノ酸だかを合成するウイルスなんてどうしようもないわよ、いっとくけど」

血とエタノールの混じった池の中で苦しむ霞心居士に向かって、ダマスカスボウィのナイフを構えて迫った凶華だが、突如として発生した下腹部の痛みに再び膝を折った。

対照的に足に大穴が開いたはずの霞心居士は、何事もなかったように立ち上がっている。

「エタノールも体内には届かないんですよ、当たり前ですがね」

先ほど凶華の銃撃で開いた穴は既に直っている。治ったではない、直った・だ。

医学の世界では病を治すために毒となるものを用いることは多いが、ここまでの例はそうはないだろう。

傷口は充血して晴れ上がり、紫色の水っぽいカサブタで覆われている。血流を滞らせるウイルスを部分的に発症させ、痛みは脳腫瘍で消し去る。

不健全な肉体をさらに不健全に修復する、それが霞心居士のウイルス戦法だった。

「種明かしをすれば…今、あなたを苦しめているのはさっきあな

たの防毒マスクを破壊したときの弾丸に付けていたウイルスですよ」
「…う、ウソ…だ…ッ！　高温で発射される弾丸に…ウイルスなんて付着させても…ッ！」
「地球最初の生命は日の光も届かない深海で、三千度の海底火山の中で生まれました…まあ、インフルエンザのように熱の弱いものではできませんが…。
あなたの分かれてから完成したウイルスでね、感染力は弱いが…まあ、足腰立たなくする程度には使えるようですね」
「…みつ…てる…ッゥ」
「その名には用はありません。一十一果心居士衆がひとり、霞心居士です」
静かに霞心居士の腕が、痛みにあえぐ凶華の後頭部に押し付けられる。
倒れ付したその身体で凶華は霞心居士のことを睨みつけるが、霞心居士は意にも介さない。自分が育んだ闘志だ。退る理由がない。
「おやすみなさい、凶華」
「休まないで下さい」
上階から聞こえた微かな声、凶華と同様に明確な闘志に、霞心居士の生存本能は肉体をバックステップさせ、一瞬前には霞心居士の頭があった位置を通過する振り下ろされた超々硬合金の刃を見届けさせた。
「西郷流星か！」
その通り。そう云わんばかりに霞心居士や凶花からすれば天井、上階にいた当人にとっては床を切開いて一人の少女が降ってくる。
脱がない限りは幼児体系、童顔怪力示現流女、西郷流星その人だ。
「…この勝負は…譲ってくれるんじゃ…なかったの…？」
「譲りましたよ、だから凶華さんが負けたからあたしの番です。
…ひょっとして凶華さんって、蝙也さんみたいに生き延びるより負けたら死んだ方がいい、ってヒトでしたか？」
「…複雑だけどね。お礼は云っておくわ」

ここに来て、やっと凶華、そして霞心居士は理解した。
流星にとっては泥覧試合や賞金なんてどうだっていいのだ。ただ強いヤツが居てそいつと戦える手番が来た、それだけだ。
「ならば、お相手しますが…よろしいのですか？　流星さま、今あなたは…私と空気を共有してしまっていますが…」
云うまでもないが、最もポピュラーな感染ルートは空気だ。
喋ることで空気を汚染し、時間を稼ぐ。霞心居士の必勝パターンを知る凶華は痛みに堪えてそれを遮った。
「逃げたいならばどうぞご自由に。ただ私にまだ拳銃があることもお忘れなく」
ウイルスという規格外の攻撃手段に加え、コロッセオ闘士たる凶華と同等以上のガンマン。
そんな人外の相手にバトルマニアの流星は、意外と云うべきか、当然というべきか、冷静そのものだった。
「…いや、あの…ウイルスとか弾丸って…なんとでもなるじゃないですか？」
「…え？」
何の前触れもなく、流星は霞心居士を射程にも捉えていないのに蜻蛉の構えから蛮一文字を大きく振り下ろす、ほとんど西瓜割りの要領だ。
だが、その一振りは刀を寝かせた状態で振り降ろすことで、爆発的な疾風を巻き起こしていた。
疾風は周囲の窓ガラスをことごとく割り、その風は蔓延したウイルスを巻き込んで霞心居士自身へと叩きつけられた。
「山至示現流の火星大帝って呼ばれた人の技でして。ちょっと自慢です」
未知の技への絶叫を上げる霞心居士だったが、そんな声なんて掻き消す轟音、霞心居士はキリモミ状態で窓ガラスに叩きつけられ、院外まで弾き飛ばされた。
「…あたしの勝ちです、霞心居士さん」

瞬間最大風速百メートル越え。はっきり云えば人間の筋力で出せる数字でもなく、人間の骨格がニュートン力学的に耐えられる限界を超えており、そんな衝撃にはさすがの霞心居士も立ち上がれない。潰れかけた爬虫がする痙攣のような動きだが、生きてはいるようだが。

「換気、換気、換気ッ！」

流星はそのまま団扇でも仰ぐように空気を裂き、入れ替えていく。風邪の予防は消毒以外にも換気、基本だ。

「えーっと…それじゃあ、凶華さんと霞心居士さんの救急車…じゃないか、ここ病院だし」

「…トドメは…刺さないの？」

小動物のように大きな眼で、流星は疑問を顔全面に表した。

「さっき…忍者は殺すなって云ったの、凶華さんじゃないですか」

その素っ頓狂な発言を合図に病院の電灯が点滅した。

ひとつやふたつならば電灯が切れただけだろうが、全ての電灯が磨きぬかれた手旗信号のように点滅しているというのはありえない。そしてそれが停電などではないことは窓から見える平和な町並でわかる。

この病院だけに起きている静かなる異常事態。それはもちろん忍者、異常事態といえば忍者だ。江戸的に考えて。

「…凶華さん、さっき倒したのがニセ居士ってことは？」

「あたしとあれだけ撃ち合えるコピーなんて居ないわ、この停電は甲賀か伊賀よ」

「伊賀でもないはず、伊賀の子がこんなことをする必要がないもの」

「…それなら、これは」

〔その通り。俺だ。甲賀の猿飛だ〕

ふたりの会話をさえぎって病院中のスピーカーから仰々しい男性の声が聞こえてきたが、それよりも流星や凶華を驚かせたものがある。

電灯が減って暗くなった部屋を音もなく照らした光の束、上の階からか下の階からかもわからないが、とにかく天井と床を極太の光が貫通した。

その光の束こそ、アインシュタインが提唱して数多の天才たちが作り上げたソビエトの最終兵器、その名もライト・アンプリフィケーション・バイ・スティミュレイテッド・エミッション・オブラジエーション・ビーム。

そうだ。これこそ僕らのヴィクトリーな超電磁兵器、レーザー砲だ。

「地球じゃあ、これで手術とかするのっ、凶華さんっ」

「違う」

左肩に蛮一文字、右肩に凶華を担いで静かな院内を流星が足音を響かせながら流星が走り抜ける。

そして流星の足跡を追うようにライト・アンプリフィケーション・バイ・スティミュレ…とにかく、レーザーが貫いていく。

レーザーがラップの芯ほどの穴を床や天井に開けるたび、電灯が点滅する。

「流星、ゴメン、部屋に行きたいの、お願い」

「ッ…いや、私も…キツイんですけど…っ」

病原菌のせいかエタノールのせいかは知らないが、息も絶え絶えな凶華が呟いている、

「じゃあ逃がすから。ちょっと待って」

凶華は担がれたまま槍型の火屯鉞刃――以前の泥覧試合でザルツァ一家から奪っていたもの――の刃を極薄に発生させ、凶華はさらに自分の拳銃を押し当てた。

火屯鉞刃の光熱により、銃はフライパンに押し当てた氷のように溶け、そして蒸発する。

「当たり前だけど…最近の拳銃って合成プラスチックの部品も使われてる…ちょうど電波欺瞞紙（チャフ・グレネード）みたいにね」

「…ちゃ、チャフ？」

拳銃が蒸発した直後、レーザーの角度が流星から大きく逸れ、あらぬ方向へと貫通していく。

「甲賀流忍者があたしたちの位置が判るのは…多分、電磁ソナー。電気のエコーロケーションっていうか、レントゲン写真みたいなもので位置を探ってたのよ。

空気振動のソナーにしては広すぎるし、床にこんなに穴が開いてたら空気の振動なんて見極められるわけがない」

「…何云ってるのか全然判りませんけど、すごいですね」

凶華の読みの正しさは、先ほどまでは沈み登る太陽のように規則的に撃たれていたものがヘタクソなピアニストの演奏のように不規則かつ、発射ごとの連携もない連打に変わったことから明らかだ。

「本物のチャフじゃないから効果は何秒かしか続かないわ、その部屋に隠れてもらえる？」

凶華が指差したのはひとつの病室の入り口。

霞心居士と凶華の戦いのせいで、壊れていたり焼け落ちているものが多い中で、今描いた絵の様に汚れ一つない扉。まるでふたりしてその扉だけは手を触れなかったようだ。

流星はレーザーに注意を払いつつ扉を蹴り開けて転がり込んだ。

「…これは…説明してもらえるのよね？」

「カワイイっしょ？　あたし専用の癒しツール、息子の凶星（きょうせい）よ」

部屋の中央に置かれたベッドには、むくんでボテボテになり、全身には素人目には用途もわからないチューブやコードで埋められている少年が居た。

凶華は重い身体を引きずりながら、その設備の電源を予備電力に切り替えた。

明らかに科学の力で生かされているその身体、猿飛がこのまま電力を全て吸い上げれば確実に死に至るであろう機材を、予備のバッテリーに換えたわけだ。

「こんなにゴチャゴチャ付けられて…痛いとも痒いとも感じられないし、このまま甲賀野郎に停電にされたら…死んじゃうんだって」

「…おカネのために戦ってる、って聞いてたんだけど？」
「もちろん。この子が一日で使う機器、一日いくらか教えようか」
火星育ちで日本円に疎い流星にでもわかることがいくつかある。
眠っている彼を支えている機器や薬品は多すぎる。
科学の力は脳波もなく、自力で呼吸もできない彼を生かし続けているが、それでも命は廃用性症候群。人間の精神と肉体は動かなければ衰えていく。
「…それ、公表した方が人気上がるんじゃない？」
「あなた、息子に“自分のために母親が人殺しをしていた”って思わせたい？…あたしは殺人狂の変質者、それでいいのよ」
科学的な理由なんて必要なかった。
凶華が生身でありながら炎で焼かれても戦えたり、エタノールを飲み込めたのに、ＳＦ的な理由なんて必要なかった。
凶華はただの母親だ。
息子は心臓を動かすだけで真っ当な稼ぎでは間に合わないような生き方をしており、その息子を必死に支えている。
火を纏って戦い、毒を飲み干して戦うなんて、子供を思う母親ならば科学的にも魔法的にも何の不思議もない。
「起きる、の？」
「…医者は絶望的だって云ったわ。前の夫もそう思ってたみたいだけど…でも、あたしはまだ諦められないから」
絶望と諦めと死というゴールは、人間を強く引きつけ、誰もがそこへと逃げこみたがる。
だが、凶華はゴールを嫌う。根来という仲間を捨て、根来という誇りを捨て、根来という愛を捨て、根来という安らぎを捨てて。
「…ねえ…命って…大事なの？」
痛みに呻きつつも漲らせていた母親らしい笑顔を曇らせたのは、ひとりの青年。
患者らしくスリッパにパジャマ。隻腕になり残る腕にも点滴のチューブを強引に抜いた小さな傷から血が滴っている伊賀忍者・百地

弾牙。
「…ここでキミが登場するわけね、弾牙くん」
「…怒ってるの、お姉さん？」
「んーん、全然。キミともう一回戦えて嬉しいだけだよ？」
嬉しそうに弾牙は笑い、どうやって持ち込んだのか、手元には蝙也を葬った形状記憶超硬合金のホイルが握られている。
そして、いつの間にか既にこの病室は鏡に覆われ、何百体の死体でも収容できそうな広大な死体置き場として果てなく広がっているように見える。
鏡の中は死の世界だ。ただ肉体と影だけを映し出す。
弾牙お得意の鏡分身、形状記憶超硬合金の鏡を用いた眩惑だが、ファミレスでの戦いでは付着した蝙也の返り血は落ちており、流星にはその位置を確かめる方法はなく、上下左右にいる無数の弾牙の中から本物を探し出す術はない。
「位置が…わからん」
無数の弾牙の手には、現地調達したらしい医療用のメスや注射器。それをどこからナイフを投げてくるかすら判らず、流星はとっさに蛮一文字を盾にすべく構えたが、それが無意味であることを直後に悟った。すぐ隣の弾牙の吐息を感じて。
「…え？」
弾牙はファミレスのときとは違って投げてなどいない、鏡像の弾牙たちもメスを振り上げている。ちょうど立ち上がれない凶華の首筋へと向けるように。
そして、そのメスは女の柔肌に深々と突き立った。
「…誰だっけ、お姉さん？」
「これは恐縮です、私の名は伊藤幽鬼…コロッセオ闘士です」
凶華の首筋へと振り下ろされたメスは、別の女の腕に突き刺さって止まっていた。受けていたのは、小袖に袴を纏った巫女さん風剣士だ。
「…あんた、私のこと嫌いじゃなかったの？」

「嫌いですよ、あなたなんて」
云いつつも幽鬼は火屯鉞刃で素振りをするようにし、空間を裂く。
幽鬼は継ぎ目の見えない鏡を破壊し、道を作る。
「お子さんを護ろうとする母親を見殺しにはできませんから…西郷さん、あなたは雑賀さんを安全なところへ」
「…ねえ、僕たちが場所を変えた方が早いよ」
鏡の角度を微調整して全天に凶華の息子を映し出し、そのまま弾牙は出て行った。
「それでは行って来ます。西郷さん、雑賀さん」
「幽鬼…あんた…」
「大丈夫ですよ――もう誰も死なせません」
微笑みを鏡の中に残し、幽鬼は身を翻して弾牙を追う。
呆然と成り行きを見守ってしまった流星を正気に戻したのは、背後に現れた全身を包帯で覆い、車椅子に乗った男。
ただの入院患者ではない、その隻眼には明確な敵意があり、その敵意にふたりは覚えがあった。
「猿飛…重三」
丸橋獣市郎との死闘を演じ、凶華からの狙撃に晒され、慢心創痍の身体で地下鉄まで落ち延びたその男。
「狙撃の借りはレーザーで返した…ここからは二対一、正面対決と行こうか」
車椅子には黒い尻尾が生えていた。床を伝って包帯の中にもぐりこむように生えた黒い絶縁ゴムで覆われている電源コード。
限界を超えた出力にコンセントがのた打ち回り、空焼きしているフライパンのように重三の全身から煙が立ち上っている。
「さあ、ラストバトルだッ」

NEXT　STAGE　駐車場

第１２話　風祭り（後書き）

二対三

選抜七人

死亡・愛宕橋　蝙也（我流）

死亡・飯篠　土輔（天真正伝香取神道流）

生存・伊藤　幽鬼（一刀流）

死亡・松崎　仁（人造理心流）

生存・西郷　流星（山至示現流）

生存・雑賀　凶華（雑賀流炮術）

死亡・丸橋　獣市郎（宝蔵院流槍術）

忍者三派選抜

生存・霞心居士（根来）

生存・猿飛　重三（甲賀）

生存・百地　弾牙（伊賀）

現在の賞金：一億÷三＝三千三百三十三万三千三百三十三円

現在時刻：二十一時二十六分

第１３話　血祭り

【８４ｇ】

病院に併設された専用の大型駐車場。多くの観衆の前で戦いは手詰まりを起こしていた。

弾牙は鏡に隠れつつナイフや劇薬を投げ、院内で入手した医療用火屯鉞刃で斬りかかっているが、それらの攻撃はことごとく幽鬼には通じない。

恐るべきは伊藤幽鬼の夢想剣、攻撃を察知して火屯鉞刃で防ぎ、防げないものはその場から退避する。

かといって幽鬼も決め手に欠ける、鏡に隠れて動き続けるという弾牙のスタンスもあるが、幽鬼には相手を殺すつもりがないのだからこういうことになる。。

「弾牙さん、もう下がってはくれませんか？　あなたの技では私の夢想剣を突破できません」

「…そうかな」

「あなたも猿飛さんのように、戦わなくてはいけない理由が有るのでしょうが…お願いします、諦めてください」

「…理由？　理由って？」

張り巡らされた鏡の中で、心底不思議そうに彼は呟いた。それに対し、幽鬼は昼頃に重三に聞いた話を思い出していた。

「…テロリストを倒しに行く…という話を猿飛さんから伺ったのですが？」

「ああ、そういう話も聞いたけど…お姉さんは、自分が死ぬ理由を教えてもらわないとイヤ？」

喋りながらも機械的にナイフを投げつけ続けるが、幽鬼は振り向きもせずに火屯鉞刃で叩き落す。

「理由があろうとなかろうと…人を傷つけていい道理がないでし

ょうッ！」

「なんで？」

そのとき、テレビ局の車が到着し、撮影を始めた。

戦いを見世物にしようとする姿勢に幽鬼は相変わらず苛立ちを感じたが、今はそんな場合でもない。

夢想剣で攻撃の位置は察知できるが、攻撃の密度が高すぎる、集中を削ぐわけにはいかない。

「命は尊いものだからです！」

「…？　尊いって…難しい言葉、わからないんだ」

そんな問答をしながらも続く連続攻撃を、幽鬼はやはり問答をしながら受けきっている。

幽鬼は知っている。最も恐ろしい殺人者とは、殺人に対して興奮を持つ異常者でも、殺人に対して苦痛を持つ正常者でもない。

自他問わず命に無関心でありながら、それでも殺戮を職業とする人形。弾牙のような人外だ。

「では、あなたはなぜ戦うのですか」

「…戦わないで、なにをするの？」

弾牙は他者を祝福することはない、生まれたときですら祝福されたことがないから。

親に捨てられたことを不幸に思うこともない、最初から一秒でも愛を感じたことがないから。

標的の首を素手で絞め殺すときも何も感じない、ペットボトルを踏み潰すようにただそういうものだから潰すだけ。

弾牙はこれまで十九年、情熱を持つことなく惰性だけで生きてきた。他人も惰性で生きているだけだと信じたまま。

「違う…あなたは…もっとッ、人の温かさを知るべきです」

「…なんで？」

「あたなの鼓動は冷たすぎる、人はもっと熱くなれる生き物です」

その言葉の意味も、弾牙には理解できない、生まれつき暖かいという感覚を知らない。

火星で産み落とされ、冬の便所のように寒い真空宇宙を漂い―なぜそこで死んでいたかは分からないが―忍者の斬殺死体で暖を取り生き延びた…冷たいと感じる風もないままに。

「…じゃあ、さ、暖かくしてあげるよ」

病的な青年が何をするつもりか、夢想剣で悟った幽鬼はその脅威から逃れるべく大きく前方に跳躍する。

その場を離れて一拍置いてから周囲の救急車が爆発したが、幽鬼も弾牙も平然としている。

態度を変えたのは観戦している命知らずの野次馬たちだけ…彼らも親から自分の命を暖める方法を教わらないまま大人になり、他人の命のやりとりでしか熱くなれない廃人たちだ。

「冷たい、あなたの攻撃には血と誇りがないッ！」

果敢に叫ぶ幽鬼に、鏡像の中の弾牙は変わらず無表情に凶器を投げる。

どうやら手元の形状記憶超硬合金のホイルが少なくなってきたらしく、駐車してある窓ガラスや空き缶を潰して作ったインスタント手裏剣が増えてきた。

空き缶を縦に潰してから横に裂く、慣れると空き缶一つから二十秒くらいで二つ作れる。

「心や命を挫くことが、なぜ罪ではないと云うのですッ！」

鏡に隠れて見えないが、観衆がざわめいた。

観衆たちが感銘を受けようがなんだろうが、幽鬼には今はどうだっていい。今は弾牙を何とかしなければ。

今、救えなければ、彼は戻れなくなってしまう。そんな確信めいた焦燥があった。

「へえ…じゃあ、あなたには…心が…あるんだ」

「あなたにだって心はあります、誰にでもッ…痛みを感じる心があるのなら！」

「腕が落ちたときは…痛かったよ？」

「なら、なぜその痛みが皆にあると…信じられないのですかッ！

それが分からないなら…あなたはいつまでも人にはなれませんっ」
全天に発生する破壊の気配を夢想剣によって察知し、幽鬼は身を伏せた。
何度目かの自動車の爆破によって黒煙が上がり、それは煙幕のように周辺を包み込んでいき、視界は悪くなっているが、量子レベルで攻撃を探知する夢想剣を使える幽鬼にとってはなんの問題もない。
目に煙が入らないように目を瞑り、ただ神経を研ぎ澄ます。
「弾牙さん、人には命がある、命には力がある、その力を感じられないならば、あなたは…ッ！」
返答はないが、その位置だけは感じ取れる。
弾牙に意識がある限り、脳内では攻撃のための量子転移が行われる。
夢想剣はその量子レベルでのゆらぎを捉えて回避行動を取れる、眼が見えなかろうがなんだろうが関係ない。
そして、当然のように弾牙が何か投げつけたことを察し、幽鬼は叩き落すべく刃を振るった。
光の刃は手触りもなくそれを断ち切ったが、同時に幽鬼の全身に何かの液体がこびりついた。その臭いは――血だ。
「…えッ？」
閉じていた目を開けてみれば、幽鬼は全身に大量の血液を浴びていた。
自分の血ではない、怪我なんてしているわけがない、だが“自分の血ではないとしたら”、“今切り捨てたものはなんなのか”。
先ほど弾牙が投げつけた“もの”の正体に幽鬼は口内の乾きや悪寒を感じていた。斬ってしまった、殺ってしまったと。
「そ…んな、そんなつもりじゃ…」
奥歯が鳴るのを止められない、自分の鼓動がうるさい、身体の震えが止まらない、足に力が入らない。
状況ゆえに殺しても幽鬼の過失ではないし、罪もペナルティもない。それでも幽鬼は動揺していた。

そんな最悪のコンディションでも、幽鬼の脳内量子センサー＝無想剣は、弾牙の攻撃を探知した。前方からの火屯鉞刃のメスによる一撃。大丈夫、防げる、震えを押さえ込んで振り上げ…メスは幽鬼の両肩に正確に突き刺さった。

「…あれ？」

防げたはずだった。両腕さえあれば。

「気付かなかったの？　お姉さんの手、もうないよ？」

見れば、幽鬼の白い手首はもうコンクリートの上に咲くように放り出されている。

人を斬ったという衝撃は、ほんの一瞬、幽鬼から夢想剣を操る集中力を奪い、その隙を逃さずに弾牙の火屯鉞刃はその両腕を切断し、そのことにすら幽鬼は気が付いていなかった。

「言い残すこと、ある？」

いくら攻撃が察知できても、単純な攻撃速度、バリエーション、手数、どれを取っても弾牙の方が圧倒的に上。

手首と剣を失い、幽鬼に相対する手段は残されていない。

「…あなたに…本当の幸せが訪れる日を祈っています」

「…覚えとくね」

両腕と戦意を失った女の胸を切り開くのは、弾牙にとっては大根を切るよりも簡単だった。

「…お姉さん、血には力があるんだね」

弾牙は、さきほど自分が投げつけたもの――自分が使っていた輸血用パックを拾い上げた。

もしも幽鬼が他のコロッセオ闘士のように生身の人間を斬り殺したことがあれば、見えなくともその違いには気が付き、なんということはなかったはずだ。

もっとも、並のコロッセオ闘士の中には他人を切り殺しても自分を見失うような奴は居ないが。

「…あと…ふたり」

弾牙は、そのときになってやっと視線に気が付いた。

幽鬼の死を騒ぎ立てるギャラリーではない、病院の屋上に立ち尽くす流星が、重三を場外ホームランで叩き飛ばしている光景だった。

ＮＥＸＴ　ＳＴＡＧＥ　屋上

第１３話　血祭り（後書き）

二対三

選抜七人
死亡・愛宕橋　蝙也（我流）
死亡・飯篠　土輔（天真正伝香取神道流）
死亡・伊藤　幽鬼（一刀流）
死亡・松崎　仁（人造理心流）
生存・西郷　流星（山至示現流）
生存・雑賀　凶華（雑賀流炮術）
死亡・丸橋　獣市郎（宝蔵院流槍術）

忍者三派選抜
生存・霞心居士（根来）
生存・猿飛　重三（甲賀）
生存・百地　弾牙（伊賀）

現在の賞金：一億÷二＝五千万
現在時刻：二十二時二分

第１４話　終わりの祭り

【８４ｇ】

人が死んだら星になると云いはするが、その日の空は飯篠も松崎も丸橋も蝙也も幽鬼も、誰一人居ないような真っ黒な曇天だった。

重三の忍術によって町ひとつが停電する中、非常灯の赤い光だけが照らし出していた。

コロッセオ闘士たちは数多の戦いの末、生き残っているのは女がふたり。だがその内のひとり、凶華は根来の霞心居士によって足腰を立たなくさせられている。

忍者は三人とも生存しているが、その内ふたりは流星によって戦闘不能にまで追いやられ、残っているのは伊賀一人。

「火星御留流山至示現流皆伝、西郷流星」

「国家安全特務部隊伊賀派隠衆、百地弾牙」

十の病棟が規則正しく乱立しているこのカオスな大病院の第一病棟屋上。

互いに手の内は知り尽くし、弾牙の主武器である形状記憶超硬合金のホイルはほとんど使い果たし、流星の超々硬合金で出来た愛刀、蛮一文字も重三との戦いで刃の長さは半分以下。

体力もすり減らし、既に負荷は限界を超え、肉体は万全とは程遠い状態にまで追い詰められている、だからこそ決着時。

「…実は…同じ相手と二回戦うの、初めてなんだよね」

「へえ、なんで？」

「なんでっ…普通、戦った相手って殺すじゃない…お姉さん」

「なるほどね、さすが弾牙くん」

隣の第二病棟の大時計が、二十三時四十分を回った。
その戦いを、今回派遣されていた収録担当の忍者たちは多角的に収録していく。
集音マイクでは拾えない、音のない魂の咆哮を世界に響き渡らせながらふたりが走る。
先に仕掛けたのは、弾牙。
右腕の包帯を噛み切ってほどいて鮮血を散らせて流星に目潰しを掛ける。だが流星は構わず突撃、避けもしない。

――鏡使いの弾牙くん相手に視力があっても、撹乱されるだけ――
――うん、お姉さんならそうすると思ってたよ。なんとなく――

声もない交流に続き、今度は流星の喉を引ききるような雄叫び、猿叫。
それと同時に流星は愛刀、蛮一文字をブーメランのように弾牙へと投げ放った。
もちろん弾牙がこんなアドリブ技を受ける道理はなく、安々と跳んで避けるが、その先、延長線上には非常灯があった。

――お姉さん、スゴイね――
――目潰ししたいなら、あたしがやってあげる――

屋上から明かりが消えると同時に灯った二筋の光、火屯鉞刃の光。
弾牙が構えているのは、先ほど幽鬼から奪い取ったサムライソード型の火屯鉞刃。
流星が構えているのは、蝙也が弾牙に斬り殺されたときに持って

いた同じくサムライソード型の火屯鉞刃。
互いに己の武器を使い果たし、最後に頼るのは何の変哲もない火屯鉞刃。多少のカスタマイズはあるだろうがその性能に大差なし。
振り下ろすしか技のない示現流で、超速剣術を誇っていた蝙也以上の剣力を有する弾牙をいかにして切り捨てるのか。

――そりゃ、振り下ろすよ――

大上段。大きく振りかぶって火屯鉞刃で一刀両断の構えだが、この構えは超重量と超遠心力を生む蛮一文字だからこそ有効な戦術。
だが、光の刃を発生させる火屯鉞刃ならば、どんな切り方をしても破壊力は変わらない。それが判っていても流星にできる技はひとつしかない。振り下ろし。示現流の訓練方にして奥義、蜻蛉のみ。
「…僕が…剣の射程に入ったところで…振り下ろすってことだよね」
「ええ、そうね。あなたなら、あたしが振り下ろすより早くあたしを殺せるかもしれないし、殺せないかもしれない」
この泥覧試合も、残り時間は少ない。本日の二十四時、それがタイムリミットだ。
弾牙が斬りかからなければ、このまま時間切れで命の取り合いも発生せず、ふたりとも死なずに済むが…弾牙には命を惜しむ理由はなく、もちろん火屯鉞刃を構える。
「僕、お姉さんのこと…好きだったよ」
「あたしも別に嫌いじゃないわ、キミのこと」
互いの神経が集中する一点、その一瞬の機先を制した方が勝つ。
これまでの長いとはいえない人生を一瞬に練りこんでいく。
そして互いに、全く同じタイミングで息を吐き…銃声が響いた。
隣の病棟から降り注いだ弾丸は、十二時間ほど前の真田獣勇士の少女たちと同じように弾牙の額を貫いていた。
「…凶華さんっ！」

ウイルスとエタノールの毒素に侵されながらも意識を保つことすら困難なコンディション、科学的には動けるはずもない肉体を魂が動かしていた。

子の治療費を稼ごうとする母の信念が、学者たちがベッドの中で思いついたような科学の常識程度に屈するわけがないのは周知の事実。

「これで…あたしの生存の五千万円と…ボーナス…一億ッ…ッ！」

「凶華…さん」

「…おばさん…限界だったんだね」

頭を打ちぬかれたはずの弾牙は、平然と喋っていた。

血の一滴も流れ出さず、もちろん骨も砕けない…当たり前だ。鏡に写った弾牙お得意の目くらましなのだから。

「…ぼくの術を見分けられないなんて…本当に、限界だったんだね、根来のおばさん」

弾牙は残り少ないホイルを隣の第二病棟の屋上まで投げつける、それはちょうど虹のように歪みのない真っすぐな橋、その橋には星ひとつない空が写りこんで真っ黒になっている。

「じゃあ…おばさんから殺すよ？」

弾牙は水平に張ったその橋に飛び乗り、スキーかスノーボードでそうするような、足の裏を橋から離さずない妙な歩き方で進んでいく。

その足の裏を鏡面から離さない独特の歩き方は、二十世紀のマイケル・ジャクソンがやっていたムーン・ウォークに似ていて、スピードもその程度。

反射的に流星も追っていこうと橋に飛び乗ったが、即座に元居た第一病棟屋上へと戻った。

「…形状記憶超硬合金、だったよね、これは…」

火星原産のナノマテリアル、形状記憶超硬合金、オーバータングステン・マルテンサイト。

鏡のような形状から推測されるとおり、硬化した状態では摩擦力

がなくなり、火星では溶けないスケートリンクとして使用されているほど。

それを弾牙は早くはないが、入院患者用の擦り切れたスリッパで前進していく。

「待って！　ねえ！　弾牙くん、キミの相手はあたしでしょ！」

何かが、何かが流星の中で叫んでいる。

火星では、誰もが命を道具のひとつにしか見ていなかったし、それが自然であり、科学的で建設的発想だった。

科学で自然を語るならば、最初の生命は太陽にも祝福されず、三千度の高温の中で生まれた。

科学で自然を語るならば、すべての生物には利己的な遺伝子というものの器である。

科学で自然を語るならば、弱者は淘汰されるのが義務である。

科学で自然を語るならば、この銀河には、悲しんだり痛がったりする星は存在しない。

科学で自然を語るならば、他人が他人を殺しても何のデメリットもない。

それが科学によって自然を作り出した火星の思想、それが流星の思考だった。

「う、あああああああっッ」

流星は、自身でも理由がわからないまま、火屯鉞刃で橋を切り落としていた。

別に凶華が殺されようと、弾牙の手が血で染まろうと、火星的に考えれば何の問題もないはずなのに。

流星は、いつの間にか、誰かを守ろうとする地球的発想を得るにいたっていた。

端が落ちた橋が落ちる。ブランコのように片側だけに支えられて鏡張りの橋は鏡張りの梯子になる。

だが、それでも気にも留めずに弾牙は例のムーンウォークで駆け上っていく。

「待ってッ！　止まってッ！　弾牙くんっ！」
「…ヤだ♪」
いつもどおりの子供っぽい笑顔だった。
もう伊藤幽鬼のように助けてくれそうなコロッセオ闘士は居ない。
というか、もうコロッセオ闘士は流星と凶華しか残っていないし、凶華も息子のためならいざしらず、自分の身を守るために立ち上がれるような状態ではない。
「…止まれ、小僧ッ！」
そんな状況でも、鏡の梯子の上に浮かび上がったひとつの壁、ズタボロのマスクにズタボロの身体を引きずり、現れたのは一人の男。
「…なんで？」
「小僧！　俺の女に手を出すたァ、どういう了見だ、ゴルァッ！」
ウイルスで尖らせた皮膚をスパイクにし、霞心居士は九十度の鏡梯子に立ちはだかる。
「…光輝…？」
「頑張れよ、凶華。お前は…俺以外に殺されることは許さんぞ」
霞心居士こと明智光輝は、改造人間である。
悪の秘密結社、根来への絶対忠誠を誓うために自身のウイルス操作能力によって自らを洗脳。
その洗脳は植物状態となった我が子を見捨て、それを守ろうとする妻の命を奪うほどに自身を根来へと心酔させた。
しかし、西郷の攻撃によって頭蓋骨及び脳に深いダメージを負ったことで、一時的に本来の人格を取り戻したのだ。
「二重人格ツンデレオヤジ、デレとなってここに見参ッ！　さあ、弾牙ァ！　インフルエンザで寝込んでなッ！」
戦いは上を取った方が圧倒的な有利となる。
霞心居士は全身の包帯を解き、下から走ってくる弾牙に向けてウイルスで汚染された血液を雨のように滴らせる。
「…違う、霞心居士さんッ！　そっちじゃない！」
落下した血液を浴びたのは、例によって例の如く、鏡像に写りこ

んだ弾牙。
鏡像がウイルスを浴びても掛かるわけがない。
「…ダメだよ、霞心のおじさん…普通に戻ったおじさんじゃ…ウイルスは使いこなせない」
「…だよな」
戦いは上を取った方が圧倒的有利となる。
鏡写し、弾牙は下にいるんじゃない。既に霞心居士の背後に登っている。
「霞心のおじさんには…触らないよ」
弾牙は火屯鉞刃を一閃し、鏡梯子の下部分を切り落とす。霞心居士のしがみついている部分を丸ごと。
もちろん、足場ごと切り落とされたはいくら霞心居士でも落ちていくしかない。
「…何しに来たの、おじさん」
「あたしにキミの居場所を教えるためよ！」
火屯鉞刃を振るう映像は鏡で作れても、映像では梯子を切り落とすなんて出来るわけがない。
つまるところ、今、霞心居士を叩き落した弾牙は、流星の瞳に連続で写っている限り本物ということになる。
流星は既に先ほど投げた蛮一文字を拾い上げてハンマー投げのように振り回している。
廻る廻る廻り、そして蓄積されたエネルギーはあるタイミングで開放され、再び蛮一文字はブーメランとなり、圧倒的なスピードで弾牙へと向かう。
「…音速…超えてないよ、それ」
弾牙はその攻撃の弾道を見切り、鏡面を蹴ってたった一本残っている腕で器用に身体を支える。
蛮一文字は、一瞬前まで弾牙が居た空間に轟音を立てながら突き刺さった。
「ハズレたよ、お姉さ…」

視線を第一病棟の屋上に戻したとき、視線を戻したこと自体が失敗であったことを弾牙は悟った。
いない。流星がいない。さっきまでは刀を投げたはずの流星が居ない。

――…刀を投げたんじゃなくて…！――
――そ、踏ん張ってた足を離したの――

弾牙が視線を戻したときには、鏡面に突き刺さった蛮一文字を足場にした流星が、猿のような奇声を上げながら火屯鉞刃を既に振り切り、残った腕を切り落とした。

――さすが、お姉さん…！――
――そんなに楽しそうにしないでよ――

両腕を失いながらも、弾牙は両足だけで鏡面に張り付くが、その両足も流星の返す刃でバッサリと切断された。
「…また戦おうねっ！　お姉さん！」
落下していく彼の表情には、恐怖も絶望もない。
この高さから四肢がない状態で落ちても助かる自信があるのか、それとも自分の命にすら興味がないからなのか。
「…あたし…」
先ほどの流星の技は、技というより曲芸に近い。
ハンマーのように振り回された蛮一文字には、ひとつ気を抜けば流星の小さな身体なんて容易く吹き飛ばすほどの遠心力が蓄積されていた。

だから、流星は吹き飛ばされたのだ。
異常なまでの足の力を瞬間的に解除し、刀と一緒に自分も飛んで行った。
そして、当然のように刀だけが飛んできたと判断した弾牙は、次に何を投げてくるかを知るために屋上に視線を戻し、その隙に下から流星の一撃を受けた、というわけだ。

第二病棟の時計がこの長かった一日の終了を零時を以って知らせた。

NEXT　STAGE　第八東京タワー

第１４話　終わりの祭り（後書き）

一対三

選抜七人
死亡・愛宕橋　蝙也（我流）
死亡・飯篠　土輔（天真正伝香取神道流）
死亡・伊藤　幽鬼（一刀流）
死亡・松崎　仁（人造理心流）
生存・西郷　流星（山至示現流）
死亡・雑賀　凶華（雑賀流炮術）
死亡・丸橋　獣市郎（宝蔵院流槍術）

忍者三派選抜
生存・霞心居士（根来）
生存・猿飛　重三（甲賀）
生存・百地　弾牙（伊賀）

現在の賞金：一億÷一＝一億
現在時刻：零時零分

エピローグ：後の祭り

〔西郷流星〕

重三さんとの戦いの折、彼からなんで戦っているかを聞いた。
宇宙に居るテロリストたち、彼らの住む梁山泊と名付けたプルトニウムを豊富に含む衛星、その核分裂のエネルギーを利用して彼ら百八人のテロリストが企む地球崩壊のシナリオ。
あたしには関係ない、そうやって火星に帰ってもよかったのかもしれない。

「だから、一億受け取ってください。霞心居士」
その日の夜が明けた頃には、もうあたしも霞心居士さんも傷の処置を終えていた。
とはいっても大きな怪我のなかったあたしと比べ、凶華さんにやられた傷やら、弾牙くんに鏡の上から叩き落された落下した衝撃やらで意識はあっても喋れる状況ではないらしいが。
「管理するだけでいいから。息子さんを生かすために使って…もう、あの子にはあなたしかいないから」
「……」
――結局、凶華さんは助からなかった。
さっき撮影担当の忍者さんたちに聞いた話だと、弾牙くんの鏡像を狙撃した時点で、エタノールと霞心居士さんのウイルスの影響で呼吸が止まっていたらしい。
「情けを受けんぞ、俺を誰だと思ってやがる！　俺は！　俺は！　俺はァアアア！」
叫んでいるのは、仁さんと戦っていた霞心居士さんが洗脳したニ

セモノくん。さっきビデオで見たとおりのテンションだ。
「ちょっと黙っててよ、ニセモノさん」
「俺はニセモノじゃねえ、俺は本物の…名前は思い出せないが、とにかく俺が本物だ！」
かなり支離滅裂だが、それだけ霞心居士さんの洗脳の威力の方が本物ということだろう。
「俺の忍術はウイルスだ！　脳内に腫瘍を作り、それで洗脳する」
「知ってるけど？」
「それだけじゃない！　俺は洗脳したコピーたちと脳内に腫瘍を共有することで、量子リンクによって簡単なテレパシーも使える」
もう疑う理由も別にないが、本当に霞心居士さんの忍術ってなんでもアリだ。
量子リンクというと幽鬼さんの無想剣と同じ理論だが、火星の最新コンピューターでもできないことをやってのけるのが日本の剣士らしい。
「だが、そこに寝ている男は俺じゃない、いや、俺じゃなくなったそいつには脳内に腫瘍を感じ取れないからな！」
「あー、はいはい、そうなんですか、そこのは…ん？」
聞き流そうとしたが、それはどういう意味なんだろう。
このニセモノくんにしてみれば、今あたしを騙すメリットなんて何もないし、かといってこんな勘違いをしているわけもない。
妙な疑問が絶えない。なぜ霞心居士さんは最後の最後で凶華さんを庇ったのか？　今はなぜ霞心居士さんの頭の中に腫瘍がないのか？
わからないままベッドに横たわる霞心居士さんを見れば、あたしの一撃で見事に変形した頭部が目に入った。
なんというか、完全に頭蓋骨までダメージが行き、下手したら“脳まで”ダメージを受けて、“もしかしたら”、“中身”が出るほどのダメージだったのかもしれない。
「…ま、いいか、そんなこと」
凶華さんや霞心居士さんの過去に何かあったのだろうが、どうだ

っていい。
「それじゃあ、あたし、行きますから」
「ん？　どこに行くつもりだ？」
ニセモノくんが質問したので、あたしはテレビを点けた。
今、ほとんど全てのテレビ局はその放送をやっており、その中から目当てのシーンを探し出した。

〔おーっと！　雑賀凶華の凶弾が、飯篠土輔の頭を打ち抜いたァアアア！〕

「…これがなんだ？」
「別に？　ただ“コロッセオ闘士である凶華さん”が、コロッセオ闘士である土輔さんを倒しているだけですよ？」
あたしはよくわかっていないニセモノくんをよそに、あたしは病室の窓から飛び出していた。
ソーラーパネルが引き詰められた屋根を伝って、摩天楼の中でも飛びぬけて高いタワーを目指していた。
閉鎖してあるはずの第八東京タワーの屋上には、既に集まった忍者さんや新鮮組の人たち合わせて六人、そして七台の火屯鉞刃バリヤーが搭載された宇宙バイクが有った。。
その中から、弾牙くんが付けたばかりのサイボーグの四肢であたしの方に走ってきた。
…そう、弾牙くんは生きていた。というか、甲賀の猿飛さんも生きていたし、実は忍者側は死者は出なかった。
「お姉さんもやっぱり来たんだ、嬉しいな！　またお姉さんと戦えるんだ！」
「…分かってるとは思うけど…今回は仲間よ？　弾牙くん？」
残念そうに舌打ちをする弾牙くん。またあたしと戦う気だったっ

ぽい。
「じゃあ、いいや！　絶対…お姉さんは守るからさ！　終わったら戦おうよ！　次は僕が勝つからさ！」
これは言い換えると、火星では何度も云われていた“お前を殺すのは俺だけだ”だけなのだが、弾牙くんが云うと趣(おもむき)が違う。
「お姉さんは…絶対に死なせないから、さ…この腕と足に掛けて、さ」
そのときになって、あたしは気が付いた。
彼が付けているのはサイボーグパーツの動きには、見覚えがあることを。
「…それ、って…？」
「え？　ああ…時間がなかったし…松崎さんって人のを貰ったんだ」
「それ、だけ…？」
嬉しそうだった。新しい髪形に気が付かれた女のように。
「うん！　手足との神経を繋ぐために松崎さんの脳も欲しかったけど、霞心のおじさんがダメにしちゃってからさ！　それは幽鬼さんと蝙也さんのを貰ったんだ！」
サイボーグは鉄の部品が多いが、それと脳神経を繋ぐために培養した人口神経を使う…のだが、その代用として使える二人の脳神経も凄まじいが、そんな部品で既に動ける弾牙くんも、かなり人外だ。
そんな弾牙くんと同格として扱われているのが、今タワーの上に集まっている面々、というわけか。
勢ぞろいし、それぞれが顔を見合わせてから姿勢を正す。
「伊賀、隠衆、百地弾牙」
「伊賀、隠衆頭目、二百二十二代服部半蔵が一人娘、次代服部半蔵」
「甲賀、万衆が中忍、杉谷全銃坊」

「根来が紀伊組頭領、一十一人居士、刀心居士」
「根来が紀伊組頭領、一十一人居士、夏心居士」
「コロッセオ闘士、西郷流星」

初対面の忍者さんたちが多いが、根来の二人はやっぱり仮面を付けているし、甲賀の人は大きくて筋肉質、伊賀の選抜メンバーは未成年。

「さて…甲賀は丸橋殺害でマシンは一台、伊賀が愛宕橋と伊藤殺害で二台、根来が松崎と雑賀殺害で二台、でコロッセオ闘士も飯篠を殺しやがったから…一台、殺した雑賀も死亡しているのでマシンの使用権利は他の闘士に引きこしだ」

このアイデアは、新鮮組頭領の火門さんの発案で、試合が終わってから、検査を受けるあたしのところに直接そう伝えに来てくれた。だから、あたしは梁山泊まで行く。どうして行くのかは…。

「用意してたバイクは七台、行く忍者は五人でコロッセオ闘士がひとり、余ったマシンは俺が使う」

この場を仕切っているのは新鮮組の近藤さん、構成員の中でも偉い人らしい。

シルエットも沖田さんや松崎さんと違ってロボット的で、両足は関節が四つあるチーターのようなもの、大きすぎる左腕は人工皮膚もなく、手作りラジオやダンボールパソコンのようにコイルや電子基盤を堂々と晒している。

「…口惜しい、このような任務でなければ、今この場でお前を殺せるというのに…」

「別に嫌ならかまわんが、俺の“コテツ”が無くて困るのはお前たちだ」

この一言に、露骨に忍者さんたちは反論を諦めた。

夏心居士さんという人も国家公務員らしく極道を嫌ってるようだけど、当の近藤さんは気にもしていない。

国防戦力である根来忍者にとっては、これから倒しに行く中国テロリストだろうと極道だろうと、国家を脅かす存在には変わりないのだから。

「…なっちゃん。邪魔ならそのときに消せばいいじゃん。今はそれよりも早く宇宙に出ようぜ…なあ、お前ら！」

空が割れた。青空と白い雲を裂いて黒装束の忍者が、凧やらパラシュートやらでばらばらと落ちてきた。

東京タワーの支柱にも形状記憶超硬合金の鏡やら迷彩柄のマントで隠れていたらしく、数十秒後にはこぼれそうな人数の忍者。

さっきまでどうやって隠れていたのか、もう当人たちにも分かっていないんじゃなかろうか。

「本当にこれで宇宙まで行けるのか？」

「マスドライバーが使える月や火星と違って、地球から宇宙に出るならこれが一番ですよ、なあ、皆の衆っ」

甲賀の…名前は覚えていないが、とにかく甲賀代表の人だ。

彼の号令に従って、ひとりの伊賀忍者が甲賀忍者の肩に乗り、その上に根来が乗る。

肩車ではない、直立不動の姿勢で中国雑技団のように飛び乗り、そのまた上に、と連続して登っていく。

三派の忍者は同じ人数ではないので、最も数の少ない根来は最初に切れて、そのあとは伊賀と甲賀が交互、最後は人数の多い甲賀だけでタワーを構成する。

「…正気か、これ？」

一番下になっている忍者さんは、数万人という人数を肩で支えてるとは思えないほど表情は冷ややか。

しかし、彼がさらに足場にしているタワーの支柱は煎餅のようにあっけなく亀裂が入っている。

「これ…下の忍者さんって、重力操作とかできる忍者さんなの…？」

「他の流派はわかりませんが…少なくとも甲賀で下を形成する皆

さんはそんな小細工は使っていないはずですよ、西郷さん」
あたしの質問に、あっさりと甲賀代表の人は云いきった。
「耐えしのび、刃を下から心を用いて支えるのが我ら忍者、同じ忍者を支えられずに何が国防戦力か、同情も賞賛も遠慮も、私たちには不要」
つまるところ、根性とか気合で支えているらしい。
「じゃあ、遠慮なく行こうぜ。お前ら」
近藤さんの号令に続き、全員が宇宙服なんて着るわけも無く、酸素ボンベだけで宇宙バイクに跨ってアクセルを捻る。
宇宙バイクは真空かつ道がなくとも走れる宇宙生活での必需品。
原理的には、タイヤが高速回転することでタイヤ表面に重力子を生成し、重力子が放つ斥力によって目的の方向へと加速・移動することができる。
重力の車輪が回り、跳躍台もなくあたしたちのバイクはバッタのように跳ねた。
忍者さんたちは怯えることもなく、背中であたしたち七人のバイクを受け止め、文字通り忍者さんたちが身を挺して作ってくれた九十度の絶壁タワーを登っていく。
「すまん、背を借りるぞ。皆の衆」
『姫はお気になさらずにッ、これが我らの誇りゆえッ』
弾牙くんじゃない方の伊賀代表の女の子は、申し訳なさそうにしながらもアクセルを緩めることはしない。
「さあ、皆の衆。人類のためにテロリストたちを虐殺と行こうッ」
夏心か刀心かは分からないが、根来の人がそう云った。
あの人も霞心居士さんと同じように、根来らしく洗脳をしているのかもしれないが、とにかくあたしの心は宇宙が近づくごとに戦いへの高揚が増していった。
大地が遠のき、それに伴い宇宙が近づいていく。
結局、あたしは蝙也さんのように戦いのためだけに戦えず、幽鬼さんのように命を守るだけに戦えないし、弾牙くんのように何も持

たずに戦えないし、凶華さんのように護るものもない。
だが、それでも戦わないという選択もできそうもない。
「…止まれないんだな、あたしって」
「ん？　なに？　お姉さん？」
「あたしって、前に進むしかできないんだな、って思っただけよ！　弾牙くん！」
そのときだった。
視界の隅に、宇宙からいくつかの影が落ちてくるのを捉えたのは。
「その通り、キミたちは止まることもできないさ！　これから地球へ落ちていくだけだからね！」
胡散臭い坊主を先頭に、都合三名。
「天の間に浮く雲へと住まう入雲竜、公孫勝」
「地においてもまた然り、混世魔王、樊瑞」
「地に魁る神機軍師、朱武」
宇宙バイクもなく、宇宙服もなく、酸素ボンベも無く、布の服だけで突撃してくるそいつらは、梁山泊に住まう百八人のテロリストのメンバーたちだ。
それは何かの忍術か、それともミュータントの特異体質なんだろうか。
「いいえ、もちろん仙術です」
七人の宇宙バイクに、素手で殴りこみを掛けてきた三人に忍者さんたちも殺る気満々だ。
「さあ、張り切って行こうか！」
無重力でもすることは変わらない、人間はどこに行っても人間だ。

NEXT　STAGE　宇宙

エピローグ：後の祭り（後書き）

選抜七人
生存・刀心居士（根来）
生存・夏心居士（根来）
生存・杉谷全銃坊（甲賀）
生存・西郷　流星（山至示現流）
生存・服部　半蔵（伊賀）
生存・百地　弾牙（伊賀）

百八人のテロリスト
生存×百八人

第0話　蛇に足が生えたような祭

〔８４ｇ〕

地球の静止軌道上。

それは、それまでは自分が持ちうる最大速度で、ただ宇宙を彷徨っていただけだった。

目的地も時間も持たず、ただ飛んでいるだけの存在だったそれは、ちょっとした偶然で小惑星から地球の衛星へと姿を変えた。

その小惑星がプルトニウムという、地球の有する自然ではほとんど作り出すことができない物質でできていたのは、偶然という言葉では足りず運命とでも言い換えるべきかもしれないが。

そんな衛星が日本の領空範囲内で静止し、日本国の剣たる忍者たちが影でその所有権を他国と争い奪い合う中、この衛星を奪い取ったのは天魁星の異名を取るたったひとりのテロリスト。

その中国生まれのテロリストを中心に、集まり集まったの百八人の好漢、悪霊、妖怪たち。

彼ら百八人が各々が持つその技量と途方もない原子力で、衛星を改造したのが彼らの住処、梁山泊。

そんな衛星の中、百八人のテロリストのひとり、天勇星の部屋で目覚めたひとりの少女が居た。

彼女の心の中にあるのは、ただ漠然とした喪失感だけ。

目の前の青年に対して懐かしさは感じていたが、その懐かしさは決してその喪失感を埋められない。

何か約束があった。使命として、宿命として、命として抱いてきたものだった。

「私は天勇星。その名を関勝、あなたの…遠い子孫ですよ」

「…お前が誰かはわかった、だが、俺は…俺たちは誰なんだ？」

彼女の後ろには、未だにフラスコから出られない数万の兄弟たちがいた。

たったひとつの細胞から分裂し、年齢、性別、能力、全てが異なるが明確に同じ遺伝子から作られていることは実感としてわかる。

「私の祖先…あなたのオリジナルは、とある戦で首を跳ねられました。

それを百七人の仲間たちが見つけてくれまして…塩漬けにされていたおかげでＤＮＡサンプルも採取できました」

「…その…オリジナルの俺は…リュウとかヨクトクとか…云うのか」

「いいえ、なぜです？」

「そのふたつの名前が…ずっと頭から離れない、そいつらに…会いたくて…申し訳なくて…なんなんだ、これ」

天勇星は、満足げに笑い、生まれたばかりで何も着ていない少女に、自分が着ていた白衣を渡した。

「人生記憶はＤＮＡには記録されていないはずなんですが…まだ人類には人類の知らない不思議があるということですか…素晴らしいッ」

天勇星の高笑いと、それを見守る少女。

その部屋には、プルトニウムの甚大なエネルギーで目覚めを待つ無数のクローン戦士が居た。

ＮＥＸＴ　ＳＴＡＧＥ　空想科学忍法帖　梁山泊編

第０話　蛇に足が生えたような祭（後書き）

選抜七人
生存・刀心居士（根来）
生存・夏心居士（根来）
生存・杉谷全銃坊（甲賀）
生存・西郷　流星（山至示現流）
生存・服部　半蔵（伊賀）
生存・百地　弾牙（伊賀）

百八人のテロリスト
生存×百八人

関羽雲長クローン軍団
生存×無数

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2100u/

空想科学忍法帖　泥覧試合編

2011年8月11日10時11分発行